
気が付いたら異世界でした。

朝顔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら異世界でした。

【Nコード】

N2668T

【作者名】

朝顔

【あらすじ】

少しばかりもやしっ子で自宅警備員予備軍なことを除けば、ごくごく普通の高校生だった主人公。しかしある日、テンプレの如くトラックにひかれて死んでしまう。そして、死んだはずの彼が目覚めたのは、地球とは似ても似つかない摩訶不思議ワールドだった。そんな彼の異世界ライフを綴った物語。お気に召すか分かりませんが、どうぞごゆっくり……。注1：この

作品は、超が付くほどの駄文です。気を付けてください！注2：この作品は、とんでもなく不定期更新かつ亀更新です。お気を付け

ください。注3：作者は、末期の厨二病患者です。回復の見込みはありません。ご注意ください。厨二病が伝染しても、責任を負いません。

Episode 1 <西暦2007年・7月29日> プロローグ (前書き)

どうも、初めまして。

すでにご存じの方は、こんにちは／こんばんは。

朝顔と申します。

この小説は、作者の危ない妄想85%、作者の欲望10%、そしてなけなしの理性5%を原料としています。それでも構わないという猛者の方のみ、先へお進みください。

Episode 1 <西暦2007年・7月29日> プロローグ。

Prologue Episode 1 <西暦2007年・7月29日> プロローグ。

あー、俺死んだわ。

目の前に猛スピードで迫って来るトラックを見ながら思った。

衝突まで、あと数秒しかないんじゃないかなろうか。なのに、トラックのスピードがとても遅く見える。

ああ、これが走馬灯か。と言っても、俺の場合には人生をオートで振り返ってくれる機能は付いていないらしい。その証拠に、さっきからバカみたいな事ばかり考えてる。

死の間際になったら、もっと取り乱すかと思っていたのに、下らない事を考えられるほど冷静だ。……あれか、取り乱しすぎて1週回っちゃった、みたいな感じなのか。

いや、そんなことはどうでもいい。それよりも、だ。

走馬灯が一向に過去を追憶してくれる気配が無い。普通ならここでやり残したことからか、家族のこととか色々頭の中を過るんだろうけど、俺には無い。

確かに、残した家族　　と言っても姉が1人いるだけだが　　や

親友のことは心配だし、もう会えないと思うと悲しくなる。

……だけど、その気持ちは、それほど重くない気がするのだ。

例えば、1、2週間の旅行で会えなくてちよつと心配な時の様な
まるで、もう一度会えると確信している様な……。

そこまで考えて、そんなバカなこと、と打ち消した。

有り得ない。俺は絶対に助からない。個人的に輪廻転生は信じて
いない。だから、もう2度と会えない。

はぁ。こんなつまらないことを考える羽目になったのも、走馬灯
がきちんと機能してくれない所為だ。仕方ないから、こんな事態に
なった原因位は回想してみますか。

「あーあちい……。溶ける……」

ミン、ミンミンミンミンミン。

遠くから聞こえてくる蝉の鳴き声が、何故だか鬱陶しかった。

それを振り払うように、自転車のペダルに体重を掛ける。グンと加速して、今までよりも若干涼しくなる。

しかしそれも一時のこと。もはやすでに凶器と化したアスファルトからの放射熱は、俺の体力を容赦なく削っていく。

あーヤバイ。もう体力がイエローゾーンへ突入しようとしている。……家を出て、まだ2分ちよつとしか経っていないのに。毒の異常状態も真っ青な効きっぷりだ。ああ、単純に俺の体力が低いだけか。「ちきしょう……。姉ちゃんじゃんけん強すぎだろ……。10回勝負でストレート負けとかマジありえない……」

何故、俺がこんなバカみたいに暑い日に、外へ出ているのか。

理由は簡単。

俺の姉と二人でやった、『切らしていたアイスをどちらが買いに

行くかを賭けたじゃんけん』に、俺がストレート負けを喫したからだ。

……姉ちゃんパネエっす。

俺ん宅ちの一番近いコンビニだと、徒歩で10分。自転車で5分。そんな微妙に田舎な場所が、俺の住む街だ。

今すぐにも倒れこみたい衝動を抑えて、必死にペダルを漕ぐ。コンビニまであと半分。大丈夫かと真剣に心配になった。

・
・
・
・
・

「ありゃとござっしたー」

もはや原型をとどめていない、気の抜けた挨拶を背に、コンビニを出る。

「うおっ……。た、立ちくらみか……」

外に出た俺は、あまりの暑さに、一瞬意識が遠くなった。

……マジで大丈夫か、これ？ この体力の無さは、男として本格的にダメな気がする。

そこにいるだけで体力が回復する聖域コンビニを出た俺は、再び毒アスファルトの沼地を自転車で疾走していく。

現在進行形でガシガシと体力を削られているが、大丈夫。聖域コンビニで体力を満タン近くまで回復していたのだ。家に帰るぐらいまでなら、

ギリギリセーフだろう。

そう願いつつ、俺は自転車を必死に漕いでいく。
しばらくすると、前方に大きな道路。確か、国道
号線だったか。この辺りの住宅街を、唯一通っている国道だ。

俺の家は、国道を横断した先にある。要は、この国道を横断しなければならぬ、と言うこと。

「あぢー……」

国道に限らず、大きな道路の横断歩道と言うのは、得てして青は短く、赤が長い。つまり、よほど運がよくなければ、信号に引っかけってしまう訳で。

そんな訳で、炎天下の中ぽつんと立っているというのは、中々に体力を削られるのだった。

目の前を、交通規定？ 速度順守？ 何それおいしいの？ と言わんばかりの猛スピードで、車が通り過ぎていく。

うわ、今の確実に100キロは出てたんじゃね？ なーんて、暑さになるべく意識を向けられないようにしていたら。

ドンッ！ と、

「わっ！ えっ？」

不意に後ろから衝撃を受けて、俺の身体は自転車ごと、アスファルトの上に不時着していた。

ガシャン！ズザザザザ！

痛い。

地面に激突した時に当たった肘と、擦った顔がめちゃくちゃ痛い。あれじゃないかな、肘の方は骨折れてるかも。この貧弱ボディなら、これぐらいでもポキッと逝ってしまうかもしれない。

誰だよ、俺を突き飛ばしたやつは……。現代っ子のもやしつぷり舐めんなよ！骨折れてたら、治療料全額負担かつ慰謝料3万円の刑に処してやる（3万という微妙に現実的なところがみそなのだ）。

そんなバカ的思考をしながら、俺を突き飛ばした犯人を確認しようとした時、不意に俺の右側から、プーーーーー！！！！と言う大音量のクラクションが聞こえてきた。

「え……？」

訳が分からずその音源に顔を向けたら、目の前いっぱい広がる、大きなトラック。

「うそん……」

あー、俺死んだわ。

以上、回想終わり。

よく考えてみれば、死ぬ寸前になってその原因を冷静に回想する男って、シユール極まりないな……。いや、自分のことなただけでも。

ふと前方に意識を向けてみれば、トラックまでもう1メートルも無い。ここでの体感時間が現実よりどれほど引き延ばされているか知らないが、時間はそれほど残っていないはずだ。

ああ、そつだ。折角だから、俺を殺したやつ顔ぐらいは見ておかないとな。

そう思って、首を横に向けようとしたら、まるで自分もスローモーションの世界に入ったかのように、ものすごいゆっくりにしかなかった。

一瞬不思議に思ったが、よく考えてみたら、スローモーションに見えるのは思考が加速しているからなのであって、身体が付いていけないのは自明の理だった。

今俺にできる最大限の速さで首を動かす。逃げ逃げ。早くしないと犯人の姿を見る前に俺が死んでしまう。

そうやってなんとか首を横に向けて、これで犯人の姿が見える、と安堵した俺の目に飛び込んできたのは。

歩道の上で直に土下座している、頭の上に黄色い輪っかが浮いていて、背中から純白の翼が生えていて、輝きを放つ金髪を波打たせている、女性だった。

.....。

はああああ！？ え、ちょ、ちょっと待ってくれ！？

なんで翼！？ なんで輪っか！？ そして極めつけは土下

ドガン、ゴシヤ。

暗転。

ここはどこだろう……。周りは真っ暗で何も見えない。

暖かい。気持ちいい。欠けていたナニカが満たされる幸福感。重
力から解放された解放感。

ここはどこだろう。確か俺は……死んだ……？

ッ！ 痛い！ 痛い！ イタイ！ なんだろう、急に頭が痛
く……。

ああ、眠くなって来た。おやすみなさい。

・
・
・
・

どれ位眠っただろうか。

なんだか周りが騒がしくて目が覚めた。周りから聞こえる……これは声？

ん？ なんだろう、急に下に引っ張られる……？

とてつもなく大きな力が、俺を下へ下へと引っ張っていく。

く、苦しい！ 息が出来ない！ 息？ 呼吸？ 何だそれは。

ああ、駄目だ。息が苦しくくて、何がどうなって……ッ！

急に光が……！ 眩しい！ 段々光が近づいて来る……！

ああ！

「おんぎゃあ！ おんぎゃあ！ おんぎゃあ！」

全力疾走した後みたいに、心臓がバクバク言ってる。あまりの周囲の眩しさに、視界がぼやけてよく見えない。

すると、急に誰かの手に抱かれて持ち上げられた。視界がぼやけて、誰か分からない。ただ、とてつもなく大きいと言っつのは分かった。

なんだろう、すごく、怖い。

誰かに抱かれた俺だが、また別の誰かの腕に抱かれる。だけど、今度は不思議と怖くなかった。それどころか、すごく安心する。

「&、#、+\$\$. #” \$&ホーリイ。ホーリイ・シャルウ・レナス*」

俺を抱きかかえた人が何かを言っている。何を言っているだろうか？ 辛うじて名前らしきものは聞こえたけど……。

まあ、いいや。なんだか、とても眠たくなってきた。とても疲れた。考えるのはまた今度にしよう。

おやすみなさい……。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

基本的にこの作品は、作者の好物をぶっこんで出来たものですので、
少々の矛盾やこじつけは大目に見ていただけると助かります。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹謗
中傷の類はご遠慮ください)

Episode 1 <神聖歴883年・暖の期・12日> 転生した先は。

Episode 1 <神聖歴883年・暖の期・12日> 転生した先は。

「うーん……」

ベットの上で大きく伸びを1つ。寝起きの目には、窓からさんさんと降り注ぐ陽光が少し眩しい。ふと横を見ると、一緒に寝たはずの母さんの姿は無かった。代わりに、1階から朝食のいい匂いが漂ってくる。

俺がこの世界に二度目の生を受けた日から10年がたった。

俺はあの日、確かに死んだはずだった。だが、こうして生きている。これはいわゆる転生と言うやつなのだろう。転生なんて信じていなかった俺だが、実際に体験してしまうと信じざるを得ない。

ちなみに、この世界で俺が生まれて10年がたったが、“俺”と言う自我と前世の記憶が覚醒したのは5年ほど前の話だ。

それ以前の記憶はあるのだが、はっきりとした自我が存在しなかった。

恐らく、成長途中の脳が今の成熟した思考や膨大な前世の記憶に耐え切れなかったため、自我を封印し、十分に耐えられる様になった段階でその封印を解いたたのだろうと推測している。5歳になると、脳がほぼ大人と同じくらいに成長すると前世で聞いたことがある

るし。

そんなことをつらつらと考えていたら、

「ホリイちゃん！ 朝よー！ 起きなさい！」

下から母さんの俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「はあい！ いま行くー！」

前世のころとは全く異なるシヨタボイス。若干舌足らずなのは御愛嬌だ。だが、不思議と違和感はない。恐らく、自我が封印されていた間に慣れてしまっているのだろう。もつとも、5年間もこの声につき合っていれば、慣れそうな気がするが。

自我が封印されていたと言っても、それは高度な思考と前世の記憶のみであって、根本的な部分は封印されていなかったはずだ。簡単に言えば、前世での5歳までと全く同じだったということ。意識の様な表層ではなく、無意識である“根本に近い部分”に上書きされているのだから、違和感など、起こり得る筈が無い。

まあ、すべて憶測である。

10歳にしては発育の遅い身長に苦労しながら、階段を下りていく。地味に急なので、割と苦労するのだ。

「母さん、おはよう」

もうすでに食卓についている母さんに挨拶。

緑髪に藍色の瞳。かなりの美人さんで、今年で30超えてるはずなのに、何処からどう見ても20代にしか見えない我が母上は、俺の自慢だ。

「おはよう、ホリイちゃん。朝ご飯出来てるわよ」

ホリイちゃんと呼ぶのはやめてほしいんだけどなあ……。通算23歳の精神には中々キツイものがある。何度も何度もやめてほしいと言ったのだが、絶対に譲らないのでもう諦めた。本人曰く、ホリイちゃんはかわいいんだから、ちゃん付けで呼ばなきゃダメ！とのこと。意味分らん。

ちなみに、『ホリイ』と言うのは俺の愛称で、正確にはホーリイである。

席に着くと、出来たての朝食のいい匂いが俺を迎えてくれた。むむ、今日のメインはスクランブルエッグに小麦のパンか。旨そうだ。

「大地神イシユよ、今日の恵みに感謝します」

「かんしゃします」

食前のお祈り。別に宗教に入っているわけじゃなくて、この世界ではこれが普通なのだ。

お祈りが済めば、食事の時間だ。

当然箸なんか無いので、フォークやスプーンで食べることになる。毎日それらを使っているから、今では音を立てずに食事なんて朝飯前だぜ。……いや、音を立てずにとって、意外と難しいんだよ？ 特にナイフとか。

まだまだ成長途中のこの身体は沢山栄養を必要としているようで、腹ペコだった俺は、あつという間に平らげてしまった。

「あー、おいしかった。ご……けふっ、けふっ」

危づく、ごちそうさま、と言いかけたのを済んでの所で飲み込んで、咽たふりをして誤魔化す。自分が転生者だということは母さんには伏せているので、怪しまれるような行動は慎まなければ。

「あらあら、そんなに急いで食べるから……」
そう言っつて、優しく背中を撫でてくれる母さん。

よし、なんとか誤魔化せた。だが、そんな優しい母さんを騙すのは、ちよつと、いや、かなり心苦しい。それでも仕方が無い。割り切らなければ。自分の子供が転生者なんて、相当気味が悪いはずだ。知らない方が幸せに決まっている。

やっぱり前世に引きずられるのか、食後はいつも『ごちそうさま』と言いつつになる。と言っつか、『ごちそうさま』を言わなければ、何処か落ち着かないのだ。この所為で、何度危機に陥ったことか。

『頂きます』はお祈りがあるから、間違っつて言っつてしまうようなことは無いのが救いか。

「うん、もう大丈夫。それで、きょうは仕事あるの？」

「ええ。多分夕方には帰っつてこれそつうな依頼を選ぶからね。それまでお留守番よろしくね」

「はい」

まあ、留守番と言っつても、今日は図書館に行く予定なのだが。

「ホリイちゃんはしつかりしているから、留守番を任せられて安心だわ」

そつ言っつと、母さんは朝食を食べ終わっつたよつうで、食器を持っつて立ち上がった。俺も自分の分の食器を持っつて後を追っつ。

台所のシンクの水桶に張ってあった水に食器を浸ければ、それで終了。後は水桶に刻まれた汚れを分解する魔法が勝手に食器をきれいにしてくれる。

ふと、思い出したように母さんが口を開く。

「ねえ、ホリイちゃん。後1週間で『覚醒の儀』ね。ホリイちゃんは冒険者を目指してるんでしょ？」

「うん」

「どんな異能力に目覚めるか、楽しみね」

母さんはそう笑って言った。

魔法。冒険者。異能力。

無論、前世にはそんなもの存在しなかった。あるとすれば、ファンタジー空想の中。

だけど、この俺が生まれた世界には、それらが存在する。前世では『空想の産物』と呼ばれていたものが。

そう、この俺、ホーリイ・シャルウ・レナスが生まれ落ちた世界ファンタジーは、幻想が我が物顔で闊歩する、所謂異世界だったのである。

Episode 1 <神聖歴883年・暖の期・12日> 転生した先は。(後

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹
謗中傷の類はご遠慮ください)

今回は、情景描写なし、心情描写なしの、説明オンリーです。つまらないかと思われませんが、文字数の都合上、こうなってしまうました。ひとえに作者の力量不足が原因です。精進します……(望みがあるかどうかは分かりませんが)。

若干、文字数が少なめになっています(2000文字程度になっています)。

Episode 2 <神聖歴883年・暖の期・19日> 覚醒の儀・上。

少し、この世界の話しよう。

この俺が2度目の生を受けた、最高にクソツタレな世界の話。

まず、この世界には名が無い。ただ『世界』とだけ呼ばれている。この世界の文化レベルは、ほぼ地球での中世並。ただし、歴史は此方の世界の方が古く、俺の予想では、文明と呼ばれるものが出来てから軽く1万年は経っていると思われる。

では、何故それほど歴史は古いのに、文明が中世並なのかと言えば、それはひとえに『魔法』と『魔物』の二つの存在が原因だと言えるだろう。

当然のことながら、『科学』よりも『魔法』の方が便利なのは確かだ（あくまで、初期段階において、ではあるが）。そんな便利な技術があるのだから、苦労して科学技術を発展させようとはだれも思わないだろう。また、摩訶不思議な出来事が起こっても、地球でなら分析・研究されるが、ここではなまじ魔法というものがあるために、誰も深く突っ込んで考えないのだ。

さらに、それに輪をかけて妨害する存在が、魔物だ。

この世界での魔物は、大凡、地球でのゲームや小説内に登場する魔物と同じものだと思って構わない。

即ち、凶暴で、大半が理性を持たず、ヒトよりも遥かに強大な力を持つ存在。そんな者達が、この世界には跳梁跋扈しているのだ。文明が発達する訳が無いのである。

もっとも、その魔物から取れる素材が、現在では文明を支えているという皮肉な状況になっているのだが。

よって、以上のことから、科学技術は発達せず、したがって文明もそれほど進歩していない。ただ、ここで注意しなければいけないのが、魔法技術も発達しているということなのだ。

この世界では、魔法の研究が有史以来ずっとされている。1万年という数字の重みは、相当なものだ。1万年もの間研鑽されてきた魔法技術は、生活の至る所に根付いている。……つまり、ところどころで文明のレベルがおかしくなっているのだ。

その最たる例が『魔空艇』だろう。

魔空艇とは、簡単に言えば空飛ぶ船である。比較的魔物の少ない空を、長距離移動するための交通手段だ。魔力を原動力に魔法で空に浮かび、自由に航行する船。しかしその外見は魔法のイメージからは程遠く、一見すれば、SF小説に登場するような実に機械的なフォルムをしている。

前世で、『発達した科学は魔法と見分けがつかない』と言ったのは誰だったか。ならその逆もまた然り。『発達した魔法は科学と見分けがつかない』のだろう。

さて、この世界では、『魔法』・『魔物』と並んでもう一つ、特筆すべき点がある。それは『異能力』と呼ばれるものだ。

正確に言うのなら、『魔法』も異能力の一つである。『異能力』の定義とは、『魂に宿る、魔力を燃料に行使される、世界に干渉する能力』だ。

いきなりこんなことを言っても、チンプンカンプンだろう。しかしまあ、これが『異能力』というものを、最も簡潔に表した言葉なのだ。

ここで言う魂とは、そのまま前世で語られてきた『魂』というものと相違はない。『魔力』もまた小説やマンガなどで出てきたものと大差は無い。そして、『世界に干渉する』とは即ち、世界に存在する事象を書きかえるということだ。

最も分かりやすい例を挙げるなら、基礎魔法『イグニッション発火』が適当だろうか。

この魔法は読んで字のごとく、火を点ける魔法だ。基礎魔法と題される様に、最も簡単な魔法の一つである。

当然のことながら、火を熾すには、火打石の様な火を生み出す装置と、その火を持続させる燃料が必要になる。だが、魔法を使うと、それらを必要とせずに火を熾すことができる。

世界に干渉して事象を書き換えるということは、存在したものを無かったことにしたり、存在しなかったものを存在しているということに変えてしまうということだ。

ここでは、火が無かったという事象を書きかえて、火が存在するという事象に上書きしたのである。さらに、この火は異能力で生み出したものであるから、『魔力を燃料とする』のだ。つまり、魔法で生み出した火は、術者からの魔力供給が途絶えない限り消えることは無い。

しかし、ここで一つ注意しなければいけない点がある。それは『異能力で与えた影響は、異能力が消失した後も残り続ける』という点だ。

さっきの例でいうと、魔法で生み出した火は、魔力供給が切れれば消えてしまうが、その火が例えば材木などに燃え移ったならば、その材木に移った火は魔力供給が切れても消えないのである。

それはさておき
閑話休題。異能力に話を戻そう。

異能力とは『魂に宿る……云々』と小難しく言ったが、もつとかみ砕いて言くと、超能力みたいなものであると言える。超能力テレキネシス、即ち念動力バイロキネシスや、発火能力クリアボヤンスや、透視能力等々。これらの能力の内に、『魔法を行使出来る能力』（厳密に言くと、『魔法を行使出来る能力』という能力はないのだが、ここではその説明は割愛する）が内包されていると考えればよい。

異能力とは魂に宿る。それはつまり、この世界に生きるすべての生命に異能力が宿っているということだ。生まれたばかりの赤ん坊だって、異能力を持つ。多くの生物の場合、生まれた時から過酷な環境に身を置くため、異能力は無くてもならないものだ。しかし、人間および人型族　つまりは知性が非常に高く、文明を築いてい

る生き物たち にとっては、赤ん坊に拳銃を持たせるのと大差ない
のである。

そこで考え出されたのが、異能力の封印である。まだ幼い赤ん坊の内に異能力を封印することによって、安全性を確保する。そして、精神的にも成熟し始める10歳ごろに、その封印を解くのだ。その封印を解く儀式のことを、『覚醒の儀』と呼ぶ。

現在俺は10歳。今日がその『覚醒の儀』である。

読んでいただき、ありがとうございます。

いかがだったでしょうか。

今回はまるまる説明回だったので、恐ろしくつまらなかったと思います。ですが、次回は普通に戻るので、勘弁していただきたいです……。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹
謗中傷の類はご遠慮ください)

Episode 3 <神聖歴883年・暖の期・19日> 覚醒の儀・下。(前

前回は短かった反動か、今回は何故か長くなってしまいました。

約5000字です。

どろしてろじつなつた……orz

Episode 3 <神聖歴883年暖の期・19日> 覚醒の儀・下。

ゴーン。ゴーン。ゴーン。

見上げるように高い白亜の教会。その高い尖塔から、昼の刻を告げる鐘が街に響き渡る。見上げていると、首が痛くなりそうだ。

吹き抜けた突風に振り返れば、抜けるような青空と、急勾配の街が目に入ってくる。急降下する斜面にへばりつくように建てられた、これまた抜けるような白さの建物群が、太陽の光を反射して俺の瞳を容赦なく刺激する。それよりも先まで視線を向けると、不意に眩まはゆいい白が途切れ、先ほどとは打って変わり、目に優しい新緑がどこまでも続いているのが見えた。

「ホリイちゃん。中に入るわよ」

「うん」

俺は眼下に広がる白亜ヴァリネラの街から目を外すと、母さんを追って、白亜の教会へ足を踏み入れた。

中に入ると、高原本来のひんやりした空気が包み込む。さんさんと照りつける日差しが無い分、教会の中は随分と寒く感じられた。

その内部は前世でもよくある教会の聖堂とほぼ変わらない 緩やかなアーチを描く高い天井と、奥に鎮座する祭壇。整然と並ぶ長

椅子。空気がピンと張りつめるような神聖な緊張感と、涼しささえ覚えるような清涼な空気。先ほど寒く感じたのは、この標高が高いという理由だけではあるまい。

敬虔な信者が数人祈っている以外は、誰もいないがらんとした聖堂を抜けて、回廊を歩いていく。俺は普段こんな所に来ないから、ずんずん歩いていく母さんの後ろを付いていくしかない。シーンと静まり返った通路を、カツン、カツンと足音だけが反響して響いていく。

それにしても、妙に静かだ。

今日は覚醒の儀だ。この街中の俺と同じ年の子供が、ここにやってきているはずである。

いかにこの街の住人の大半が冒険者であり、子供の数が少ないにしても、最低でも20人近くの子供たち　付き添いで来ている親たちやそれ以外の目的で訪れた人々を含めれば、およそ2、3倍の人数　がこの教会に来ているというのに、殆ど話し声も聞こえない。

時たま聞こえてくるのは、反響して何処から聞こえてくるかも分からない、子供が泣いている遠い声だけだ。

「ここよ。さ、中に入って」

入り組んだ迷路の様な回廊を歩くこと暫し。通路の行き止まりに木製の扉が見えた。漸く目的地に着いたようだ。回廊はすべて灰色に近い白石で作られていたが、目の前の扉は完全な木製。何だか、久しぶりに感じたぬくもりある色に、心がホッと落ち着いた。

「うおっ……！」

ギギイ……と木の軋む音を立てて扉を開けると、いきなりあふれ出た喧騒が耳をついた。それほどの音量ではなかったが、今まで静寂に慣れた耳にはちよつとキツイ。ましてや、五感が敏感なエルフ族の血をひいているのなら尚更だ。

どうやら、あの扉　　というよりはこの部屋全体　　に防音の魔法が施されていたらしい。通りで教会の中が静かすぎるわけだ。

部屋の中はいたってシンプルだ。何処にでもあるホールといった感じ。明かりは特になかったが、天窓から差し込む光で十分採光はとれているので、内部は比較的明るい。そして、聖堂や回廊のようなピンと張りつめた空気が無いせいか、心なしか暖かい。

中には子供大人合わせて3、40人はいるだろうか。その中に、見知った子供たちの姿を見かけて、俺は声を上げた。

「おーい。シルヴィ、セレス、アンナ、シリウス！　久しぶり！」
俺の声に、きよるきよると辺りを見回した4人だが、俺の姿を認めると、嬉しそうに手を振ってきた。

「母さん。ちよつとシルヴィたちの所に行つてくるね」

「分かったわ。その間に手続きをしておくから、呼んだら戻ってきてなさいね」

「うん」

言つが早いか駆け出して、シルヴィたちの所まで到着した。

「ホーリイか。久しぶりだな」

ちよつとばかりハスキーな落ち着いた声音でそう言つのは、銀の

長髪に黄金の瞳の少女。銀狼の獣人の少女、シルヴィである。

一見、シャープな輪郭の顔に落ち着いた性格・表情と、こいつホントに子供か？ と思ってしまうのだが、頭上にある犬耳と尻尾が、現在進行形でフリフリと左右に揺れている。…… ようするに、喜んでいるのである。顔はそう見えなくても。

このフリフリ振られている尻尾と、ぴくぴく細かく動く耳。クールな彼女とのギャップが素晴らしい。ビバ、クーデレ。

「よう、ひさしぶり！」

お次はセレス。こいつは人間だが、最高レベルの身体能力を持つはずの獣人シルヴィとタメを張るほどの体力馬鹿ビククリにんげんである。この世界には珍しい黒目黒髪で、顔立ちも割と整っているために、黙っていれば知的イケメンになるのだが、バカである。もう一度言おう。バカである。勉強はてんでダメ。

猪突猛進を全身で体现する野郎だ。近所のおばさんからは純粹だと評判だそうだが。まあ、純粹と言えは聞こえがいいが、要するにバカのことである。大事なので3回言った。

ただ、人間性で言えば、バカではなくて、よくできたやつ、ということになるのだろうか。簡単に言えば、マンガの主人公みたいな男を思い浮かべてくれれば、大体は当てはまるだろう。

「ホーリックくん、久しぶりだね！」

そう言っつて、毒気を抜かれるようなほんわかした笑みを浮かべるのは、アンナだ。先祖に天使の血を持つ彼女は、艶のある金髪と碧

の瞳という天使の特徴を色濃く受け継いでいる。見るものを和ませるような笑みを放つ少女は、本人こそ自覚していないものの、極度の天然かつドジっ娘である。誰よりも人を傷つけ傷つくことを嫌う、この優しい優しい少女は、俺たちの癒しなのだ。

「やあ、久方ぶりだね。ホーリィ」

そして、最後にシリウス。こいつは、セレスとある意味対極の位置にあると言ってもよい。頭脳明晰、冷静沈着、謙虚、深謀遠慮。最後のは少々意味が違うか。とにかく、10歳のくせに、『久方ぶり』なんて言葉を使う時点で、どういうやつかよく分かるだろう。

しかし、常に冷静で、冷たいやつと思われがちだが、その実、とんでもなく友達思いなのだ。いるだろう？ 冷静だけど隠れた激情家みたいな人間。こいつはそんな人間である。要するに、まあ人間的によくできた人間なのだ。

彼らは、この街で、いや、この世界で初めて知り合った友達だ。知り合ったのは数年前。今では親友と呼べるような間柄である。

最近の悩みは、こんな俺みたいな汚れた精神の人間は、こういういいヤツらがそばにいと、ひしひしと劣等感を刺激されるということなのだが、これは言わない方が良かっただろうか？

「うん。ひさしぶり。みんなもこれから覚醒の儀か？」

「ああ。でも、君らは一番最後だとか何とか言われて、俺たち全員最後になるんだよ。ぜってーえこひいきだよな！」

『君らは……』の部分だけ、妙に声を低くして　モノマネをしているつもりなのだろう　、いかにも、憤慨してます、と言いたげな表情でこちらに愚痴ってくるセレス。精神年齢がセレスよりは

幾許が高い、シルヴィやアンナ、シリウスも何処となく不満げだ。

「妙だな……。えこひいきするにしても、ここに居る子供たちは皆平民の子。貴族相手にえこひいきならまだしも、平民相手にやってもな……。教会には何の旨みもない。」

「一度、儀式をやるうとしたんだが、途中で周りの大人が慌てだして……。結局、最後にやるとだけ言われて、中止になったんだ」
「みんなもそうだろう？」 とセレスたちを見るシルヴィ。全員頷いている。

皆の様子を見る限り、同じ目にあつたようだ。ふーむ。これってもしかして……？

俺には一つ、思い当る節があつた。

小耳にはさんだ程度の話である。

異能力は精神に依存する。だから、10歳児程度の異能力なら、例え暴走したとしても被害は少ない。しかし、ごくごく稀に、非常に強力な異能力に目覚める子供もいるとか。その場合、覚醒の儀で万が一暴走したら大変なので、後に別室で儀式を施すのだという。

シルヴィの話を聞く限りでは、『一番最後』で、かつ『儀式をやるうとしたら、大人たちが慌てだした』らしいから、おそらく間違いないだろう。問題はそこではない。

その『非常に強力な異能力に目覚める子供』というのは、数年に1人の割合で出てくるような確立なのだ。シルヴィ、セレス、アンナ、シリウス 4人。数年に1人の割合のはずが、一度に4人もの子供が、強力な異能力に目覚める。これははっきり言って異常だ。

偶然で片づけるには少々無理がある。これは一体……？

「ホリイちゃん！ 手続き出来たから、行くわよ」

深い思考の海の底に沈もつとした時、不意に後ろから声が掛かった。母さんだ。

「うん、分かった！ ……悪いな、先に行つてくるよ」

「うう……ホーリイの方がさきとか、なんかヤだ」

そうぼやくセレスの肩を笑いながら叩くと、みんなと別れて母さんの元へ向かう。もう準備は終わつたらしく、後は別室へ向かつて儀式を受けるだけのようだ。

あー、今更ながらに不安になつてきた。何故だか知らないが、少々のいやな汗をかいている。まるで、何かこれから恐ろしい事でも起こるかのよう。……しまった。フラグか。

そんな俺の様子に何か気が付いたのか、母さんが優しく俺に声を掛けてくれた。

「ホリイちゃん。怖がらなくても大丈夫。痛くも怖くもないからね」
「うん」

そんな俺を尻目に、儀式の準備は着々と進んでいく。5分もしないうちに、準備は整った。

俺は部屋の中央部にある石でできた祭壇に寝かされた。この祭壇は結構広いらしく、大人二人がすっぽりと寝れるほどの大きさだ。そして、その俺の周りを、顔を布で隠し、床に引きずるほどの長い純白のローブを着た司祭たちが、6人、ぐるっと取り囲んでいる。母さんは部屋の隅の方でじっと祈りを捧げているようだ。

「我、解放イクシナスの神に仕える者なり。封印イクシスの神に仕えし者が封ぜしその力を、解放せんと望む」

他の5人とは少々意匠が違った司祭服を着た男が、朗々とした声で詠唱　いや、祝詞のりとを唱える。

「解放せんと望む」「」「」

それに追従するように重なる、他の5人の声。重なった声がさらに反響して、感覚を麻痺させていく。

「我、この者が持ちし異なる力を解き放たんとす」

「解き放たんとす」「」「」

不意に、ドクン、と心臓が一跳ねする。と、同時に、身体の奥にあるナニカが熱をもってうずき始めた。

「解けよ、封印！」

「解けよ、封印」「」「」

身体の奥が、燃えるように熱い。

「解放イクシナスの神の名の下に命ず！ 対神ついでしん・封印イクシスの神の封印よ、解けよ！」

「解けよ！」「」「」

最後に、力強く　半ば叫ぶように　言い放った言葉を聞いた瞬間。

「カシャン」という音がして、俺の身体が、まるで重力から解放されたかのように、ふわりと軽くなった。そして同時に、目の奥がジワリと熱を持つ。それは心地よい熱で、例えるなら湯船に顔を浸した時のような熱だった。

しかし。次の瞬間。

読んでいただきありがとうございました。
いかがだったでしょうか。

後半厨ニアクセル全 開！

ついでに主人公、ムスカになりました。フラグ立てるからですよ
ね……。自業自得ですね。(えっ？

そこはかとなくネタ臭がしますが、気のせいです。たぶん。きつ
と。めいびー。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹
謗中傷の類はご遠慮ください)

Episode 4 <神聖歴883年・暖の期・21日> 魔眼の発露。

俺はきつと、夢を見ているのだろう。

周りは真っ暗で、何も見えない。深い深い闇に覆われていて、まるで底なし沼のように、その先は見通せない。唯一足元だけが、純白の石に覆われていて、だけどその石も、俺の周りだけしか存在しない。

俺自身も、地に足を着けているのかいないのか、イマイチはつきりしない。足の裏に感触はあるのだけれど、自分の重さを感じることが出来ないでいる。

俺は気が付いたらここに居た。おかしなことに、直前までの記憶が無い。ナニカが欠落したような、そんな感覚が身体の中に残っているだけだ。

多分俺は、ベットに入りこんですぐに寝てしまったのだろう。だからこれはきつと夢なのだ。

「ははっ。こんな妙な夢を見るなんて、たまってるのかね、俺」

そんなことを呟いた時、不意に、闇が動き出した。動き出したと

言っても、それは感覚的な話で、実際には周りが真っ暗でそれを確認する術は無い。あくまでそんな気がする、程度なのだが、俺には確信があった。

闇が、収斂する。^{しゅうれん} ナニカが生まれ いや、現れる。

「　　っ！」

闇の膜を切り裂いて現れたのは、巨大な目、だった。ギョロリ、と擬音語が聞こえてきそうな仕草で、こちらを見つめる。

俺の身長よりも大きい。充血したかのように真紅に染まった瞳は、その虹彩にまるで歯車のような紋様が見て取れた。

「　　ったく、なんだってんだよ……」

目は、俺を見つめ続けて微動だにしない。こいつを見てみると、身体をその瞳に吸い込まれそうになる。見つめ合うこと数十秒。俺はあることに気が付いた。

「……、歯車が、回ってる……？」

瞳の虹彩部分、歯車の紋様が回転しているのだ。カチリ、カチリ、カチリ、カチリと。

目は今頃気が付いたのかと言わんばかりに、瞳孔が収縮させる。その動作が俺は何故か、笑ったように感じられた。

そこで、唐突に意識が遠のき始めた。ああ、妙な夢からやっと目覚められる。そう思いながら、遠のく意識の、最後の瞬間まで目を見続ける。

けれど、やっぱり目は瞳孔を収縮させたままで、どうしても俺にはそれが笑っているようにしか見えなかった。

「　　つ、　　うあ……」

水の中から地上を見た時の様に、ゆらゆらと視界がぼやけている。やがて、視界は元の正常なものへと戻り、俺は覚醒した。

「ここは……？」

頭を振って、未だ霧がかかったようにぼやける思考を振り払う。俺が寝かされていたのは、病院の一室らしかった。この辺りは前世とさほど差は無く、白い清潔なシートと白を基調とした部屋は、地球の病院と言っても通用しそうだ。

横に目を向けると、そこには椅子に座って寝てしまっている母さんの姿が。

「母さん？」

「ん……？　っああ！　ホリイちゃん、目が覚めたのね！」

うつらうつらと船を漕いでいた母さんは、俺の声にガバツと立ち上がり俺に抱きついた。

「よかった……！　よかったわ……！」

「え……！？　か、母さん！？　どうしたの！？」

いきなりどうしたんだ！？　普通に寝たはずなのに、気が付いたらこんな所に居るし。母さんは、すごく喜んでるし。

「覚えてないの？　ホリイちゃん。あなたは覚醒の儀で、いきなり倒れちゃったのよ」

その言葉に、微かに記憶が反応する。

覚醒の儀？　……………そうだ。確か俺は……！

「　っ！　そうだ、目が……！」

思い出した。確かあの時、覚醒の儀の最中に、急に眼に激痛が走って……。そこから先の記憶が無いということは、あの後気絶してしまったのだろう。

「目は、一体どうなって

」

その時、扉がガラリと開かれて、白衣に似たローブを着た女が入ってきた。

「あ、メリヴェル先生！　ホリイちゃんが……！」

「おや、目覚めた様ですね。ホーリイ君、何か身体におかしな所は無いか？」

「あ、はい。特には……」

母さんの言葉を聞く限り、彼女はメリヴェルと言うらしい。彼女が俺の担当なのだろう。

整った顔立ちに、ややつり目の瞳。歩く姿はきびきびしていて、軍人がキャリアウーマンを連想させる。それにしても背が高い。190はかたいんじゃないだろうか。ベットで上体を起こしている俺は上を向いて話をせねばならず、首が痛くなりそうだ。

「記憶の混乱などは見られませんね……。精神状態も安定していません。彼はハーフエルフですから、精神は強いはず。問題無いとは思いますが、今日1日様子を見て、明日退院ということによろしいですね」

この世界には人間以外の種族が存在する。例えばシルヴィ。彼女は獣人だ。獣人以外にも異種族というのは存在して、他にもエルフ、ドワーフなど、その存在は数多い。

かく言う俺も人間ではなく、ハーフエルフ、つまり人間とエルフの混血。母さんは人間だが父さんはエルフだ。もともと、俺が生まれる前に父さんは死んでしまっていて、今は母さん一人しかないのだが。

エルフ族というのは、これもまた基本的には前世で言うエルフとほぼ同じだ。詳しい話は割愛するが、彼らの特徴の一つとして、精神力が強い、というものが挙げられる。簡単に言えば、精神異常がおきにくく、精神汚染や精神支配、記憶操作などが効きにくい、ということである。その特徴は、半分エルフの血を継いでいる俺にも受け継がれているのだ。

「ええ。よかったわね、ホリィちゃん。明日退院できるって」
「うん」

ふと、窓の外を見ると、太陽が空を駆けあがっていく途中だった。

この病院は街の上部に建てられているらしい。街の大通りを忙しく動き回る人々が良く見える。

……ん？ ちょっと待て。俺が覚醒の儀を受けたの昼過ぎ。午前中ではなかったはずだ。ということは……。

俺は、背中を冷たい汗が伝っていくのを感じた。今日は何日だ？
何日間俺は寝てた？

「母さん、今日、何日……？」

「今日は21日よ。ホリイちゃん、あなたは2日間ずっと、目を覚まさなかったのよ」

恐る恐る母さんに聞くと、俺を気遣うような優しい声で、やや予想していたよりも短い数字が返ってきた。

よかった、1週間とか2週間とかじゃあなかったのか。でも、母さんには大分心配をかけてしまったらしい。うっすらと目の下にクマが浮いている。それに少しやつれたんじゃないだろうか。

そんな様子を見ると、申し訳ない気持ちが強くわきでてくる。同時に、すごくうれしい気持ちもわいてきた。

俺は、母さんに抱きついて小さくありがとうと呟いた。

「いいの。ホリイちゃんが気にすることは無いわ。ほら、それよりもホリイちゃんには見てもらわないといけないものがあるわ」

そう言った母さんが取り出したのは鏡。何を見せるのかと首をひねる俺に、母さんは俺の顔を鏡に写した。

「っ！！これ、は……」

思わず、手を目の方へ持っていく。衝撃が大きすぎて、俺は口をぽかんと開けて、言葉にならない声を発するだけしかできなかった。

鏡に映るのは、見なれた幼い顔に、後ろで結った長い蒼色あおいろの髪。
エルフの血を引く証である尖り耳。そして

そして、夢で見た、虹彩に齒車の紋様が小さく浮き出た、真紅の
瞳だった。

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

主人公がエルフだった、というのはいささか唐突過ぎた感じがしないでもないですが、これ以上延ばすのはちょっと……ということ、この話で出すことにしました。

一応前話でそれとなくほのめかしているので、唐突すぎるということは無いか、と。

また、前話で、主人公たちの会話が大人びすぎていないか、という指摘があつたのですが、一応理由は考えてあります。

大勢の方が、この点に疑問を持たれていると思いますので、説明をしたかったので……。

私的な事情で今回は時間が足りないので、次回に説明を回させていただきます。お許しください。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹謗中傷の類はご遠慮ください)

どうも、こんばんは。

朝顔です。

まず始めに、更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

最近(というか、恐らくこれからしばらくは)、リアルの方が素晴らしく忙しく、まともな執筆時間が取れない状況です。

大体、一日1時間以下。作者は、恐ろしいほどの遅筆なので、こんな状況では、殆ど執筆が進みません。

主に学校が本格的に忙しくなってきたせいなのですが、恐らく、この状態がしばらく続くと思います(一ヶ月弱ほど)。

その間は、どうしても二日に一回更新は難しいと思いますので、先にお断り申し上げておきます(というか、よく考えたら、二日に一回更新するなんて、一度も宣言してないんですよ。まあ、どうでもいいですが)。

それでは、本編の方を、どうぞ。

Episode 5 <神聖歴883年・暖の期・22日> 気絶、再び。

Episode 5 <神聖歴883年・暖の期・22日> 気絶、再び。

今朝、漸く病院を退院した俺は、家に帰るとすぐに、母さんに庭に連れ出されていた。

なんでも、魔力の覚醒と、異能力の訓練を始めるらしい。ちなみに、異能力を完全に制御できるようになるまでは、街に出るのは禁止だそうだ（当たり前前だ。異能力はきちんと制御できなければ、相当危険だろう）。

「それじゃあまず、魔力を知覚する所から始めましょうか」

俺は、いよいよ異能力を使えるようになるのか、とわくわくしながら母さんを見つめていた（仕方が無い。男ならこういうもの一度は憧れるものである）。

すると、母さんがそう言って、スツと腕を差し出してきた。よく見ると、その腕にはうっすらと青色のオーラの様なものが纏わりついている。

「この青いのは見える？」

俺が頷くと、母さんはほっとしたような顔になって、続けて言う。

「これが魔力よ。すごく偶に、魔力が視認できない子もいるから、心配だったんだけど、大丈夫みたいね。今からホリイちゃんには、

魔力を認識してもらおうわ。本当は身体の中に魔力を直接流し込むのが一番なんだけど、そうすると拒否反応を起こしちゃう子もいるから、今回は、魔力を肌で感じるだけね。お母さんの腕を触ってみて」

言われた通りに、母さんの腕にそつと触れる。すると、腕に纏われていた青いオーラ　魔力に触れた瞬間、何かに阻まれたかのように、それ以上進まなくなってしまった。どうやら、この魔力が腕を覆っていることで、直接肌に触れることが出来なくなってしまっらしい。

グツと力を入れて押し込んで、それ以上先へ進まない。その代わり、魔力の形が少し変形した。俺が押している所だけ、少し薄くなったのだ。と同時に、冷たくて、柔らかいような硬いような不思議な感触も手に伝わってくる。さらに、触っているすぐ下で、何かが流れていく感触も感じる。感覚としては、冷水を流しているホースを触った時に近い。

「どう？　何か感じた？」

「うん。何かが流れるような……」

「ほんと？　それはよかつたわ。ホリイちゃんが感じたのは、循環させている魔力よ。これを感じ取れたつてことは、魔力に敏感なことなの。ホリイちゃんはエルフの血を引いているから、魔力に敏感なのね。魔力をどんなふうに感じた？」

「どんなふうに、か。そうだな……とても感覚的というか、抽象的なものだが、あえて例えるとすれば」

「何だか、冷たくて澄んだ水みたいなの……」

「そう！ よかったわ、魔力の流れだけじゃなくて、魔力そのものもちゃんと捉えられてるみたいね。今のホリイちゃんにはちよつと難しい話かもしれないんだけど、魔力って言うのは、個人個人で全く性質が異なるの。例えば私だったら、今ホリイちゃんが感じたみたいに、流れる清流のように澄んだ水みたいな魔力ね。他にも、人によっては、燃え上がる炎のような魔力を持つ人もいたりするわ。こんなふうに、魔力って言うのは千差万別なんだけど、唯一血の繋がっている人同士は、例外なの」

母さんにはっこり笑ってそう言うのと、続けて言う。

「血の繋がっている者同士なら、殆ど似通った性質の魔力を持つわ。父親か母親のどちらかの魔力に似た性質の魔力を持つ。家はお父さんも、私と似たような魔力だったから、ホリイちゃんも多分私達と同じような魔力を持っていると思うわ。さあ、ホリイちゃん。お腹の　おへその奥に意識を集中させて……」

言われた通り、目を閉じて腹の奥　丹田の辺りに意識を集中させる。

「そう、そう。そして、今さつき感じた、お母さんの魔力に似たものを探して……」

清流のような清らかな魔力……。冷たくて透き通るような水を想像しながら、自身の内面へもぐっていく。すると不意に、身体の中に、ナニカがあるのが感じ取れた。

それは水だった。身を切り裂くような、冷たい冷たい水。透き通っていて、穢れを一切含まない冷水。だけどそれは母さんのものとは少し違う。母さんのは、淀みの無い、緩やかでもなければ激しくもない、そんな流れだった。

それに対して、俺の魔力はまるで激流だ。ごうごうと音を立てて流れる急流。岩さえも砕いてしまうような、そんな激しい激しい流れ。それが身体の奥でぐるぐる渦巻いている。

「見つけたよ。これが俺の魔力なんだね」

「見つけたのね！ それじゃあ、それを動かしたりできる？」

動かす、か。母さんはそういうものの、どうやって動かせばいいのか見当がつかない。魔力をグーツと伸ばすような感覚で動かそうとしてみたけれど、全く動く気配が無い。

ふむ。魔力に神経があるとは思えないから、魔力そのものを動かすというよりも、外から引きずり出す、みたいな感覚でやった方がいいのかも知れないな。

「あ、出来た」

引っ張りだすような感覚で魔力を動かしてみると、ややぎこちないながらも、魔力が動いた。ズズズ、ズズズと、重いものを引きずっているかのように、滑らかには程遠いが、一応動くことは動く。だけど、母さんのはもつと滑らかで、まるで川の流れみたいだった。

「……ん？ 川？ 流れ？」

んー……。なんか、とても重要なことにかすった気がするぞ。川。

流れ。水。流れる。水が流れる……。水が流れる、水路。水路？

「っ！ そうか！」

「どうしたの、ホリイちゃん？ いきなりそんな大声出して」
母さんが何か言っているが、耳に入らない。俺はこの発見に夢中だった。

水路だ。水路をイメージする。魔力を流す時に、水路とそこに流れる水をイメージするのだ。

早速俺は、身体の奥の魔力がある場所に意識を集中させる。ぐるぐる渦巻く魔力の奔流に穴をあけ、身体中を張り巡らせた水路に魔力を引いて来るのをイメージする。

その、次の瞬間。

「う、わ、あ……！」

ゾクゾクゾクゾクッ！ と全身を膨大な何かが暴れ狂うように駆け抜けた。しかし、俺の貧弱なイメージによって形作られた水路は、荒れ狂うように流れる激流に耐え切れず一瞬で破壊される。あとはただ、暴力的な魔力の流れによって身体の中を蹂躪されるだけだ。

そして。全身に、激痛が走った。

「あああ！？ うガアああ！！ ゲウウうう！！ ガアアアッ……！」

身体の内側から、全身の痛覚を等しく猛烈に刺激される感覚。覚醒の儀の時の痛みも、これに比べれば少しすりむいた程度の痛みしかない。尋常ではない強烈な痛みに、脳内が真っ白に塗りつぶされる。

激痛という言葉すら生ぬるいこの痛みに、俺は言葉にならない獣のような声を発しながら、地面をのたうち回るしかなかった。

「ホリイちゃん！？ どうしたのっ！？ うっ！ すごい風……！
これはっ……すべて魔力なの！？ まさか、魔力回路を！？ な

んてこと……。全身の魔力回路を一気に開いてしまおうなんて……！
ホリイちゃんすっかりしなさい！」
母さんが何か叫んでいるが、頭に入ってこない。だが辛うじて、
地面をのたうちまわっている俺を、抱き上げてくれたのは理解でき
た。

「あぐうアガあア！！」

あまりの激痛に、それが痛みだと認識することすらできない。何
が何なのか、何がどうなっているのか。思考することすら許されな
い。すべてのことがあやふやになって、ぼやけていく。自分自身の
ことすら、曖昧模糊になっていく。

俺は何だ？ 俺って何だ？ 何なんだ、何なんだ。ああ、モウス
ベテガワカラナイ。

意識が遠のく。周りが遠のく。すべてが遠のく。
やがて、すべてが闇に包みこまれた。

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

主人公、またまた気絶です。4日の内に2回も気絶なんて、どんな生活送ってんでしょうね。全く、呆れ果てますよ。(作者のせい
えーっと、前回もこのあとがきで書いた、質問というか指摘の件
ですが、もう時訳ありませんが時間が無いので、今回も見送らせて
いただきます。

本当に時間が無いんです……><

基本的に、午後8時半から9時前までの間に投稿されたならば、
その場合は時間の余裕が無いんだな、と思ってくださって結構です
(ごくごく個人的な事情により、9時以降はPCに触れることを禁
止されておりますので)。

なのでその時は、多少の誤字脱字やおかしい部分があっても、笑
って、後でこっそりと教えてやってください。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹
謗中傷の類はご遠慮ください)

Episode 6 <神聖歴883年・暖の期・23日> 目覚めと来訪。

「うっ……ん」

チュンチュン。チュンチュン。家のすぐそばから、鳥の鳴く声がある。俺はその声で目が覚めた。

「あれ……もう朝？ と言うか、昨日いつ寝たっけ」

いつまでも閉じていたがる重い瞼を持ち上げて、ぱちりと目を開けると、そこには見なれた俺の部屋の天井が。鳥の鳴き声で起床という、実に爽やかかつ健康的な、前世なら羨ましい限りの起床法だが、この世界でさほど珍しいものでもない。

というか、そんなことどうでもいい。昨日、ベットに入った記憶がないのである。そもそも、夜まで起きていた記憶がない。

まあ、取り敢えず、起き出してから考えようとベットを出たその時、俺はあることに気が付いた。

「身体の調子がすごくいい……？」

まるで、鳥にでもなったかのような解放感。無重力状態とは言わないまでも、月の重力ぐらい重力しか感じられない。いや、これは比喩であって、重力を感じないのではないが、そう表現したくなるほど身体が軽いのである。

それに、力が全身に漲みなっている。今なら軽く5メートルぐらいは

ジャンプできそうだ。

「おや、目覚めたかい。その様子だと、心配はいらないようだね」
そんな戸惑いを隠せない俺に、母さんではない、見知らぬ女性の
声が掛かった。

びっくりして慌てて扉の方を振り向くと、そこには、燃えるよう
な真紅の髪を後ろで結い上げ、口には火を点けていない煙草を啜え
ている女性の姿が。

その顔立ちは母さんとタメを張れるほど整っているが、美人とい
う表現よりも美しい女傑という言葉の方が似合う。まあ、どちらに
せよかなりの美人である事には変わりはないのだが。そしてその口
元には、ニヒルな笑みを浮かべている。その笑みは口調と相まって、
どこか老獪な雰囲気醸し出していた。

「え、えーっと、貴女は？」

いきなり入ってきた女性に、俺は警戒心を隠せなかった。それは
そうだ。自分の家に、朝起きたら知らない女がいたのだから。俺は、
観察するというよりは睨みつけるように女性を見つめるが、彼女は
少し苦笑いを浮かべただけで気にした様子もない。

「あー、やっぱり覚えてないか。あたしはエイドリー。ホリイ坊の
母親　リタの冒険者仲間さ」

彼女は苦笑を顔に浮かべて、頭を掻きながらそう言った。……な
るほど、不審者にしてはやけに堂々としていると思ったら、母さん
の友人か。

て言うか、ホリイ坊で。その口ぶりからすると、俺はこの人と会
ったことがあるのか。いや、全く記憶にないけれど。

「全く、リタが血相を変えてあたしの所に来るから、何事かと思っ
て行ってみれば、いきなり魔力回路をすべて開くなんてバカをやら
かしたんだって？ 昔から何かやらかしそうだとは思ってたけど、
早々にこんな無茶やらかすとはねえ。呆れた呆れた」

そう言っつて肩を竦めるエイドリーさん。いきなりの馴れ馴れしい
しゃべり方に、一瞬面食らった。……というかなんだ、その『犯罪
者の同級生だった人物にインタビューした時のコメント』みたいな
言い草は。

……いや、突っ込みも重要だが、今はそんなことをしている場合
じゃない。この人は今何て言った？ 魔力回路？ すべて開く？

「あ、そうだ。気絶したんだった」

唐突にすべてを思い出した。俺はあの時、とんでもない激痛で気
絶してしまったんだ。どう考えても、大の大人でもショック死して
しまいそうな痛さだったが、よく生きてたな、俺。

「なんだい、今頃思い出したのか。ま、身体の方も異常なし、記憶
の方も異常なしって、よほど運がいいようだね。大人でも死んじま
ってもおかしくなかったんだから」

少々あきれたような目で俺を見てくるエイドリーさん。おう、や
っぱり死んじやってもおかしくなかったのか。

そう思うと、今更ながらにゾクツとしてきた。

「えーつと、そうだ、母さんは？」

「リタなら寝室で寝てるよ。ホリイ坊、覚醒の儀の時にもひと騒ぎ
起こしたんだって？ それに続いてこれ。リタもぶっ倒れるわけだ」

その言葉を聞いて、俺は全身からさつと血の気が引いた。
母さんが、倒れた？ 俺の、せいで？

「そんな、母さんが、倒れた？ お、俺のせいだ……」

「おいおい、そんな真っ青になるんじゃないよ。大丈夫、リタは疲れが溜まってただけだ。大方、寝不足だろうね。悪いところなんざ一つもないよ。それよりか、今のホリイ坊の方が心配だ。あんまり気負うんじゃないよ。子供は親に迷惑かけてなんぼだからね」

エイドリーさんはそう言うけれど、残念ながら俺は子供じゃない。見た目は子供でも、中身はほぼ大人なのだ。

全く、情けない。母さんに迷惑かけないようにとか言っておきながら、このザマだ。前世ではありえなかったファンタジーに触れて、浮かれて舞いあがっていた結果がこれ。過去に戻れるとしたら、昨日の自分をブン殴りたい。

駄目だ。精神的に大人にならないといけない。こんなんじゃ未熟すぎる。ただでさえ、今の俺たちを取り巻く状況というのは、母子家庭という母さんに負担がかかるものだ。この世界に生まれて、やっと手に入れた母さんを失うようなことだけは避けなければならぬ。

「取り敢えず、これからの訓練はあたしが担当することにした。リタも自分でやりたがってたけど、ホリイ坊はちよつとばかり危なっかしいようだからね。その度に倒れてちゃあ話にならない。リタの身体にも悪いしね。まあ、安心しな。それでもあたしはギルドの教官資格を持ってるんだ。大船に乗ったつもりでいるといい」

エイドリーさんは、すっかり沈み込んでいる俺にそこまで一気に

まくしたてると、不意に優しい口調で、

「さて、これからすぐに訓練だ、と言いたいところだけどね。ホリイ坊、昨日の昼から何も食べてないだろうから、腹が減ってるだろう？ 朝食にしよう」

エイドリーさんが言った途端、俺の腹は思い出したかのように鳴き声を上げたのだった。

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

えー、前回に続いて今日も時間がありません。ぎぶみーたいむ。
そう言う訳なので、申し訳ありませんが(以下略
端折ってしまい申し訳ないです……。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹
謗中傷の類はご遠慮ください)

Episode 7 <神聖歴883年・暖の期・23日> 今度こそ訓練します・上。

「それじゃあ、始めようか」

準備を整えて庭にやってきた俺を見て、エイドリーさんは言った。

「はい！」

「おうおう、気合入ってるね。ま、力み過ぎないようにしな」

前は殆ど触りだけしかできなかったために、声にも自然と気合が入る。そんな俺を見て、エイドリーさんはちよっと笑った。

……あの後、グーッと鳴いたお腹のせいでエイドリーさんに爆笑された。個人的にはすごく納得がいかないのだが、それは置いておくとして。

エイドリーさんが作った朝食を2人で食べた後（母さんはまだ寝ていた。よほど疲れが溜まっていたのだろう。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになる）、すぐに訓練を始めるからと言われて、慌てて準備を済ませてきたのだ。

「さて、まずはどれぐらい魔力を操作できるか見ようか。ホリイ坊はもう全身の魔力回路を開いているから、問題ないはずだよ」

「魔力回路？ さっきも言っていましたけど、それってなんですか？ さっきは軽くスルーしてたけど、意味がよく分からないので質問

してみる。字面から大体の意味は分かるけど、曖昧なままにしておくのはあまり良くないからな。

「ああ、まだ知らなかったんだね。魔力回路って言うのは、読んで字のごとく、魔力を流す回路のことさ。ホリイ坊が味わったあの激痛は、こいつを無理矢理こじ開けたせいだね。魔力回路は、一度形成したら消えることは無いけど、身体を欠損した場合　ホリイ坊にはちよつと難しいか。簡単に言えば手とか足とかを失った場合

には魔力回路も消滅する。要は、肉体に依存するってことだ」
なるほど、大体は予想した通りだったけど、肉体に依存すると知らなかった。ふむ、実際に神経みたいに身体中を走っているのか、それとも実際には存在しないのか、ちよつと気になるけど、またあとで聞いておこう。後、『依存』も『欠損』と同じくらい難しい言葉だと思う。別に指摘はしないが。

「　まあとにかく、ホリイ坊が魔力回路を開いた時みたいにやってごらん。そうすれば、魔力は流れるはずだよ。ああ、痛みとかは無いから、心配しなくてもいいからね」

「は、はい……」
その言葉を聞いて、思わず返事が尻すぼみになってしまった。それでも、怖気づく心に喝を入れて、身体の奥に神経を集中させる。

しかし、エイドリーさんは簡単に言ったけれど、それは容易なことではなかった。身体の内側に潜ろうとすると、あの時の事が頭を過よって集中できない。数分間そうやって格闘して、ようやく内側に潜ることに成功した。できるだけあの時の恐怖を思い出さないようにしながら潜っていくと、すぐに渦巻く激流にぶち当たった。

「よし………」

あの時の激痛を思い出して、尻込みしそうになる心を叱咤する。
こんな所で躓いてちゃあ、冒険者になる夢なんて決して叶わない
のだ。大丈夫、痛くない、痛くない。

そう自分の心に言い聞かせながら、渦を巻く魔力を包んでいる、
水槽のようなものに穴をあける。イメージとしては、ダムの放水み
たいな感じ。

途端に、凄まじい勢いで魔力が流れ出した。ごうごうと流れ出た
魔力は、特にイメージもしていないのに、身体中を蹂躪するように
駆け巡る。

「っ……………！」

あの時の痛みが苦しみが脳内にフラッシュバックし、悪寒が全身
を駆け巡る。あの時と同じだ。俺は心臓が止まる思いがした。背中
を嫌な汗が流れ落ちる。

あんなのをもう一度味わったら死んでしまう！

震えだしそうな身体を両腕でギュツと抱きしめて、崩れ落ちそう
になる膝を必死でこらえる。そうすること数秒。けれど、痛みは襲
ってこなかった。

「え……………？」

魔力は今も凄まじい勢いで全身を駆け巡っている。だけど、そこ
に痛みは感じない。せいぜい、何かが通り過ぎるようなむず痒い感
覚があるだけだ。

その瞬間、俺は脱力した。腰に力が入らなくなって、ストーンと地
面にへたり込んでしまう。俗に言う女の子座りになってしまって、
ちよつと恥ずかしかつたけど、そんなことを気にならないぐらい、
心底安堵していた。

「よ、よかったあ……………！」

ジワリと滲んでくる安堵の涙に、視界の隅が霞む。これじゃあホ

ントの女の子みたいだ、なんて心のどこかが指摘したけれど、そんなことどうでもいい。

ただ、あの激痛を味わわなくて済んだことが、心の底から嬉しかった。

そんな俺を見て、エイドリーさんは、

「よくできたね」

ただ一言そう言って、後は何も言わないで俺を抱きしめて、頭を撫でてくれた。まるで泣いた赤子をあやすように、優しく、優しく。

その後しばらく、その光景が続いた。

「さて、仕切り直しだね。魔力の体内循環は出来たみたいだから、後は体内操作だけだね」

エイドリーさんが未だ真っ赤な俺を見て、苦笑しながら言う。

あの後、あやされている途中で正気に戻った俺が、あまりの恥ずかしさに少々暴走するという事件があったものの、それ以外はおおむね問題は無かった。そう、それ以外は。

……。……。うう、恥ずかしい。尖った耳の先まで真っ赤に染まっている。エイドリーさんは笑って許してくれたものの、メチャクチャ恥ずかしい思いをすることになった。……。え？ 何があったって？ 聞くな。あれはもう黒歴史決定だ。墓場まで持っていく。

そんな、一人悶々としている俺を尻目に、

「……。しっかし、とんでもない魔力量だね。流石はハーフェルフと言ったところか。余剰魔力量だけでこれだもんねえ……。下手すると、リタよりも多いんじゃないかな」

エイドリーさんは何故か呆れたような口調で呟く。

「え、俺って魔力多いんですか？」

その言葉に、俺は反応せずには居られなかった。

「ああ。そうだね、魔力量だけなら、リタと同等かそれ以上だよ」
思わず口を突いて出た俺の言葉に、多少面食らったらしいエイドリーさんだが、すぐに頷いてそう言った。

……。母さんの魔力量がどれくらいか知らないけれど、母さんは腕利きの魔法師だ。冒険者の中でも上位ランカーに位置していると聞

いたことがあるから、魔力量も相当なものだろう。

俺ってそんな母さん以上の魔力量なのか。……えーっと、もしかして、俺ってかなり魔力持ってるの？

いや、確かに、身体の奥に渦巻く魔力は相当な量だとは思っていただけ、これが普通なんだとばかり……。

しかしまあ、よくよく考えてみれば、エルフっていうのは魔力保有量が最も多い種族だったっけ。そのエルフの血を引く俺も、魔力保有量が多いのは必然か。

思案に暮れる俺に、エイドリーさんは続けて言う。

「今ホリイ坊は体内の魔力を循環させているけど、普通の魔力に覚醒したての子供なら、10分持てばかなりの魔力量があるってことになる。だけどホリイ坊、かれこれ20分近くはそうしているだろう？ それに、自分の腕を見てみな。青い靄もやみみたいなのが腕中に纏わりついてるのが見えるかい？ それは『余剰魔力』と言って、魔力を循環させるときに出る無駄な魔力だ。こいつが、ホリイ坊は普通の子供と比べて多い。つまり、sonだけ魔力を無駄にしてることだね。それなのに、普通の子供よりも長く魔力を循環させてられるということは、つまり、ホリイ坊の魔力がとても多いってことなんだよ」

エイドリーさんにそう言われて、自分の腕を見ると、確かに濃い靄のようなものが腕から発散されているのが見えた。しかも、どうやらこの靄　余剰魔力は全身から発散されているらしい。

確かに、さつきから身体の中から何かが抜けていく感覚があるな、と感じていたが、別段何か問題があるわけでも無さそうなので、放っておいたのだ。

今、身体の奥の魔力を確認してみると、少し流れが緩やかになって、全体の量が減っているのが分かった。これが余剰魔力で減った魔力の分なのだろう。だけど、それほど減ってはいなくて、後倍の時間程度ならこのまままでいられるぐらいは残っている。

「さてと。次は、魔力を循環させることの利点について話そうかね。ホリイ坊、ちよっとジャンプしてみな」
「ジャンプ、ですか？」

いきなりどうしたんだろう？ 俺みたいはまだ子供が飛び跳ねたって、高が知れているのに。

不思議に思いながらも、取り敢えず、エイドリーさんの言葉に従って狩るその場で飛び跳ねてみる。そして、ジャンプした瞬間。俺はその考えを改めることになった。

「うわっ！ 何これ!？」

グリーンと迫る木の梢。庭の隅っこの方に植えられているカジャの木だ。確か高さが3、4メートルはあつたはずんだけど……。さらに、家の塀も軽々と下の方に去ってしまつて、隣の家まで丸見えだ。横を見れば家の二階の窓がすぐそこに。跳び付いてやるうかなとも思つたけど、それはそれで怪我をしそうだったからやめておこう。

……とまあ、割と冷静にここまで実況してみたはいいものの、誰しも大地の束縛からは逃れられないわけで。

「う、うわああー！」

天に向かつての加速も次第に衰え、やがて完全に勢いを失つた後、俺は大地との再会を果たすために猛烈な勢いで落下を始めたのだつた。

内臓が上の方までせり上がってくるあの浮遊感。そして、周りが妙に遅く感じられる。そんな状態で、元々若干の高所恐怖症だった俺は、

「ぎゃあああ！ 助けてええ！」

年甲斐もなく（いや、見た目は子供であるが）、口から悲鳴を迸らせているのだった。

落ちる落ちる落ちる落ちるうう！！ つーか地面に激突するうう！ 死ぬわあ！

地面が迫ってくる。感動的な再開まで、後、5、4、3、2……

「ひいひい……！！……い？」

ボスン。

妙に気の抜けた音を立てて、急に落下が止まる。

俺を待ち構えていたのは、硬い地面ではなく、暖かい人の腕だった。見上げれば、間近にエイドリーさんの顔。

俺はエイドリーさんに見事、受け止められていたのだった。

「くくくつ……。ホリイ坊はよつぽど高い所が怖いらしいねえ。そんなことで冷静な判断力を失くしていたら、冒険者なんてできないよ」

悪戯が成功した時の子供みたいな顔をして、エイドリーさんが笑いながら言う。その顔を見て、俺はエイドリーさんの真意を悟った。

なるほど。どうやら心配しなくても、エイドリーさんがきちんと受け止めてくれる予定だったらしい。あえて何も言わずにいて、俺がどうという反応をするか試してみただろう。その楽しそうな笑みが、すべてを物語っている。

……どうやら、エイドリーさんという人物は、なかなかの茶目っ気のある人らしい。

「そ、そりゃあ確かに高い所は怖いけど、仕方がないじゃないですか！ いきなりだったし……」

俺にだって反論はあるのだ。確かに、高所恐怖症なのは事実だが、心の準備もなしでこんなことされたら、誰だってこうなるに決まっている。

「半泣きになるほど、怖かったようだね。くくくっ！ 落ちている最中の顔は見物だったよ。死んじまう、みたいな顔して……。くくくっ！ この高さから落ちてても、せいぜいが骨折だろうに」

エイドリーさんはそれだけ言うと、もう話も出来なほど爆笑し始めた。

……前言撤回。この人は茶目っ気がある、なんてかわいいもんじゃない。性格がねじ曲がっている。(中身はともかくとして) 10歳の子供をからかって爆笑する人なんて、相当ひん曲がった性格をしているに決まってる。

思わぬ性格の露呈に、俺は何だか先が思いやられて、思わずため息をついたのだった。

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

ここ最近は説明続きなので、少々文が重たくなっております。後
2、3話位で説明回を抜け出す予定なので、もうしばらくお付き合
いください。

さて、今日こそはあの質問に答えたいと思います。
精神年齢云々の話です。

まずはどんな質問だったかというところ、『主人公たちの会話が、と
てもではないが5歳の子供の会話とは思えない』というものと、『
危険だと封印されていた異能力だが、5歳で封印を解くのは早すぎ
ではないか』という質問です。

まず、一つ目の方から行きます。

(以下、コピペです)

この世界は地球とは比べ物にならないほどシビアな世界だとい
うことが主な理由です。危険な魔物もそうですし、医療も発達してい
ないので、ちよつとした病気　それこそ風邪でも　でも死んで
しまうことがあります。

そんな世界では、子供もいつまで経っても精神年齢が未熟である
わけにはいきません。そんな子供は自然と淘汰されていきます。つ
まり、地球の子供たちよりも早熟で、この世界の子供の5歳は、大
体地球（日本や先進国に限る）の7、8歳ぐらい（しかも、その中
でも割と大人びている子供）の精神年齢とほぼ同等と考えています。
これが一つ目の質問の理由になります。

次は、二つ目の質問の理由です。

これは、少々一つ目の理由と被るのですが、この世界は危険に満ちています。なので、早いうちからある程度の自衛能力を身に付けておかないと、死んでしまうのです。一番手っ取り早く、自衛能力を養う方法は、自身の異能力を強くすることです。

勿論、子供がその異能力で人や物を傷つけないとは限りませんが、その場合、非常に重い罰が下されることになっています。子供がそれをやらかしたなら、逮捕の後、日本で言う所の少年院の様な所で矯正されます。大人なら、下手をすれば牢獄行きです。また、何度も異能力で犯罪を犯すと、異能力を封印するなどの措置を取られることもあります（子供、大人区別なく）。

という感じなのですが、皆さんいかがだったでしょうか。実の所、少々、自身でも苦しいなと思う所があり、皆さんに納得していただけるか不安です。しかし、まあ、これ以上の理由は思いつかないので、仕方がありません。（どなたかすっきりする理由を思いつく方はいらっしゃらないでしょうか……）

2011年6月16日に、主人公たちの設定を5歳から10歳へ変更しました。

この作品は、元々見切り発車の作品なので、プロットは激甘です。設定もその場で思いついたものが多く、いつ矛盾が起きるか戦々恐々としています。

なので、少々牽強付会がすぎると思っても、（重大な設定ではなければ）軽くスルーしてくださると嬉しいです。（あ、別に矛盾を指摘しないでくださいって言うてるわけではありませんので、悪しからず。疑問がある部分も、どしどし質問してくださいって構いません）

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹
謗中傷の類はご遠慮ください）

重大なお知らせがあります。

以前、『異能力を解放するには主人公たちの年齢が幼すぎるのではないか、そして、主人公たちの会話が、どう見ても5歳児の会話に見えない』というご指摘を頂きました。

一応、私なりの理由を前話に載せたのですが、あれからどうにも自分自身でも納得がいかず、そして、今後の展開を考えた結果、設定を変更することにいたしました。

つまり、主人公たちの年齢を5歳から10歳へと引き上げます。

また、それに伴う改稿作業は、この投稿前に終えており、後は改稿した本文を差し替えるのみになっております。差し替えは、この投稿直後から始めますので、その間、今話以前の回の間の整合性が取れなくなる場合があることを予めご了承ください。それと、差し替えた部分で若干の変更はありますが、話の流れの大筋は変わっていませんので、読み返していただく必要はありません。

長くなりましたが、最後に、この件に関してご指摘を頂いたFさんに、最大級の感謝を。

そして、この拙作を読んでくださっているすべての方へ。できれば、これ以後もこの作品を読んでくださると、とてもうれしく思います。

それは、本編を、どうぞ。

Episode 8 <神聖歴883年・暖の期・23日> 今度こそ訓練します・下。

「さ、さて、ホリイ坊。仕切り直しだ」

エイドリーさんが言う。

「が、あれだけ爆笑した後だ。ハツと我に返って、ああ、やっちゃた、みたいな顔をした後、いきなりまじめモードに入ろうとしても、少々無理があると思うのだが。」

「……いや、別に口に出して指摘はしないよ？ ただ、非常に表情筋の訓練になる、とだけ言っておこう。俺の微妙な頬の引きつりが、見抜かれていないのを祈るばかりだ。」

俺の視線に何か感じる所があったのか、はたまた俺の表情から何かを見抜いたのか。エイドリーさんは少々気まずそうな顔をした後、ゴホン、とわざとらしく咳をして続ける。

「ホリイ坊がジャンプした時、ありえないくらい高くまで跳んだだろう？ あれこそが、魔力循環の利点だよ」

「それって……、つまり、身体能力の強化ってことですか？」

よくある話だ。小説やマンガなかでも、魔力や氣を身体に纏うと身体能力が強化される、なんて設定は多く見かける。

今までの経験則で、この世界のシステムは、どうやらマンガや小説に出てくるようなそれと、よく似ているということが分かってきた。現に、エルフについての身体的特徴は、『尖り耳』、『五感が

鋭い』、『肉が食べられない』（おいしく感じない）、『身体能力が低い』など、前世でのそうだった『設定』とよく似通っている。だから、今回もそうじゃないかと思ったのだ。

「そうだよ。全身の身体的能力を強化する。これが魔力循環を行う意味だ」

俺が分かったことに驚いたのか、それとも10歳の子供が『身体能力の強化』なんて言葉を使ったことに驚いたのか、定かではないけれど エイドリーさんは驚いたような顔をして、俺の言葉を肯定した。

「ただ、ちょっとばかり気を付けないといけないことがあってね。今ホリイ坊は魔力を循環させているけれど、後もう少し 10分ぐらいしたら魔力が底をつくんじゃないかい？」

「あ、はい。もう少しで無くなっちゃうそうです。さっきはあんなにあったのに」

エイドリーさんの言うとおりだ。先ほどまで半分ほど残っていた魔力は、今や4分の1以下にまで減っていた。あの時 ジャンプしたあの時、大きく魔力が減ったのを感じた。恐らく、そのせいでこんなに早く魔力が減ったのだろう。

「取り敢えず、この後も魔力を使うから、魔力循環をいったん止めてごらん。……ああ、止め方は具体的には一人一人違うけど、大体魔力を循環させる時のイメージと逆のイメージをすればいいよ」

魔力を流した時と逆か。というとは、穴を塞ぐイメージだろうか。取り敢えず、身体の奥に意識を集中させて、魔力の渦に到達する。最初のころに比べると、随分流れの激しさも分量も減った魔力の渦それを包み込んでいる水槽のような膜に開いた穴を、今度は完全に

閉じてしまふイメージ。

すると、ほどなくして、身体中を迸っていた魔力の流れが、魔力の渦に吸い込まれるようにして、ぴたりと止まった。どうやら成功したらしい。

成功したことにホツと胸をなでおろしたのもつかの間。しかし、次の瞬間、身体がズシリと重たくなった。

「うっ……!!」

重い。いや、重いというよりもだるい。まるで、激しいスポーツをした後のような倦怠感が、身体を覆っている。

いきなりの激しい疲労感に、俺が困惑していると、

「その様子だと出来たようだね。どうだい、身体がだるいだろうか？ それは魔力の減少が原因だ。魔力を使いすぎると、これよりももっとひどい疲れが襲ってくるからね。注意するんだよ」

なるほど。これは、結構キツイ。単純に、慣れていないことや、まだ身体が幼いってこともあるんだろうけど、この状態で運動する気にはなれない。それぐらい疲れている。これよりもっと倦怠感が酷くなるのなら、それこそ、歩くことすらままならないだろう。

「とは言え、魔力ってのは、限界まで使えば使うほど伸びていくものなんだよ。勿論、それだけじゃなしに、成長と共に魔力の量も増えたりするし、限界もあるがね。だから、なるべく幼いうちに、魔力をたくさん使っておくべきなんだよ。……ああ、話が逸れた。魔力循環の利点と欠点の話だね」

そこまで言うと、エイドリーさんは、はあ、最近どうにも話が脱線するねえ……、と頭を掻きながらばやいた。そして、続けて言う。

「今さつき、ホリイ坊が体感したみたいに、魔力循環つてのは、身体能力を大幅に高める働きがあるんだ。だけど、注意しなきゃならない点がいくつかあってね。まあ、一番大きい注意点を上げるとすると、魔力循環している最中に、何か運動したりすると、その分魔力が多めに食われるってことだ。勿論、自分の素の運動能力を超えない範囲なら、それは無いに等しいけどね。だけど、さつきみたいに、3、4メートル近く跳び上がるなんて、今のホリイ坊どころか例え大きく成長した後でも絶対に不可能だろう？　そういう運動をした時は、大きく魔力を使うことになるから、よく覚えときな。多分、魔力がもう無くなりかけになったのも、そのせいじゃないかい？」

そう問いかけるエイドリーさんに、俺は大きくうなずいた。全く以てエイドリーさんの言うとおりである。

ふーむ。なるほど、だからあんなに魔力が減ったのか。俺はさつきからずっと気になっていた疑問が解けたことで、ようやくすっきりした気分になった。

要するに、魔力循環は、決して万能なものではないってことだな。確かに、そんなんじゃあ、魔力量の多い魔法職の方が強くなってしまっって、前衛の意味が無くなり、パワーバランスの崩壊が起こってしまう。

……そして、俺の推測でしかないが、多分その魔力の消費量の増加は、必要な膂力に比例するんじゃないだろうか。これはあくまで推量に過ぎないが、足りない膂力を魔力で補っているのだから、そう見るのが妥当だろう。

「さて、魔力循環の欠点は大雑把に言えばこれだけだ。まあ、細かくいうならもう少しあるけど、今は気にしなくていい。次はち

よつと魔力循環のコツを教えておこうか。 ついさつき、ホリイ坊は余剰魔力が多いって言っただろう？ これまたさつき言った通り、余剰魔力は、いわば無駄な魔力が漏れ出したもんだ。こいつを抑えることで、魔力循環時の無駄な魔力の消費を抑えることができる。実際にどうやるかって聞かれたら、それは答えようがないんだけどね。個々のイメージに依るんだよ。まあ、ホリイ坊なら、リタと同じような流水のイメージだから、後でリタにコツを教えてもらいな」

エイドリーさんはそこで言葉を切り、さて、と続けて言う。

「本当なら、魔力放出とか体内魔力の操作とか体外魔力の操作とかも教えたいけど、取り敢えず後回しだね。先に、異能力の制御の訓練をしまおうか」

おお。遂に、か。

少し感慨に浸りながら、俺は自分の目にそつと触れる。

紅い、紅い、瞳。その瞳を彩る虹彩は、カチリカチリと回る歯車。どうやら異能力の影響でこうなってしまったらしい俺の瞳は、『魔眼』と呼ばれるものに変質しているそうだ。そう母さんから聞いた。魔眼を持つ者は、例外なく真紅の瞳と特異な虹彩を持ち得るらしい。

この目は自分のものだど理解しているはずなのに、鏡を見るたびに、何かがつくり嵌っていないような違和感を覚えてしまう。そして、違和感を覚えると同時に、自分が知らぬ間に全く別のものへと変質している恐怖が、俺の心の奥へと沁み出すように侵入してくるのだ。いつかは、この瞳にも慣れる時が来るだろう。しかし、その時まではこの恐怖と共にいなければならぬのだ。

この魔眼を理解することは、きつと『何かをじっくり嵌める』事に繋がっているはずだ。そして、『何かがつくりと嵌る』と、こ

の瞳を自分のものとして受け入れられる気がするのだ。

まあ、そんな壮大に物事を語ってみた所で、することは変わらない。まずはエイドリーさんの話を聞かないと。

俺は改めて、エイドリーさんの話を聞き逃さないために、居住まいを正したのだった。

Episode 8 <神聖歴883年・暖の期・23日> 今度こそ訓練します

読んでいただきありがとうございます。

いかがだったでしょうか。

説明回は後1、2話で抜け出すはずですが。それまでの間、もうしばらくお付き合いください。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹
謗中傷の類はご遠慮ください）

Episode 9 <神聖歴883年・暖の期・23日> 異能の覚醒。

「さて、いよいよ本題だね。異能力の訓練を始めるとしようか。

と言つても、まあ、まずは魔力の部位操作からだがね」

「魔力の部位操作、ですか。なんですか、それ？」

即座に聞き返した俺を見て、苦笑しながらエイドリーさんが言う。

「そう焦るんじゃないよ。早く異能力に触れたいつてのは分かるけどね。……魔力の部位操作つてのは、簡単に言えば、さっきやった魔力循環を身体の一部だけでやることさ。簡単だから、すぐにできるはずだよ。大体のイメージとしては、魔力を通す場所以外は、魔力回路 このイメージは個人個人で違うから一概には言えないね をすべて閉じてしまうようなイメージだね。まあ、この『閉じる』つてイメージも、人によって違うから何とも言えないんだけど、それは置いておこう。それじゃあ、ホリイ坊。右腕左腕どっちでもいいから、そこだけに魔力を流してごらん」

ふーん。魔力回路を閉じるイメージ、ねえ。

俺の場合、魔力回路は水路がイメージの基盤となっている。なら、それを閉じた状態にするには、何かで流れをせき止めてしまえばいい。

さらに、よく考えると、魔力は最初一ヶ所から流れ始める。そして、そこから全身へと枝分かれして流れていくのだ。だったら、一番根元の部分と、腕までの魔力回路に存在する枝分かれの部分だけ

せき止めてやれば、すべてを閉じる必要は無いはず。

俺は、このアイデアを早速実行に移すため、自分の魔力がある内部まで潜る。数秒後、魔力の根源へと到達した。慣れてきたためか、割とさつきより早く到達したようだ。

腕までの魔力回路を意識して、それに接する魔力回路の枝分かれ部分のみ塞いでいく。すべて塞ぎ終わった後、何度も漏れがないかチェックすることも怠らない。

エイドリーさんに言われてから数十秒後、ようやく準備が整った。

「ふうっ……！」

身体の奥底から息を吐き出しながら、ゆっくりと魔力の渦に穴をあける。

……やべえ、ちょっと緊張してきた。どうやら、トラウマは簡単に克服されてくれないようだ。

それでも、魔力が少量流れ出すほど穴をあけると、魔力量が減ったせいか、はたまた穴を小さくしたせいか、あるいはその両方か さつきまでとは打って変わって、緩やかな魔力の流れが、魔力回路を流れ始める。

そして、全く他に流れることなく右腕まで到達し、そこから再び魔力の根源へと真っ直ぐ帰っていく。腕以外の何処にも魔力は流れていない。

成功だ。俺は思わず安堵のため息をついた。

「うん、出来たようだね。魔力の多い時ならちょっと難しかっただろうけど、魔力の減っている今なら、割と簡単にできるか」

そうエイドリーさんもホツとした様子で呟く。その様子に、さっきまで下がrippばなしだったエイドリー株が少し上昇する。

が、その後、あの時の魔力量を減らしておく判断はやっぱり正解だったね、と小さい声で自画自賛しているのが聞こえた。どう考えたらそんなこと考えてなかっただろうと思っただけど、俺は黙っていることを選択した。うん。俺ってヤサシイナァ。

決して、ちよつと笑ってしまったのがエイドリーさんにバレて、ギロリと睨まれたのが怖くてちびりそうになったからじゃアリマセーンヨ。ホントダヨ。

……………ゴホン。

「魔力の部位操作はできたようだね。じゃあ、いよいよ異能力に入つて行こうか。ホリイ坊は魔眼系の異能力だから、たぶん魔力を流すだけで発動するはずだよ。使い方云々は言わなくても分かるはずだから、まずは目にだけ魔力を流してみな」

……………ん？ 言わなくても分かる？ 少し引つ掛かる言い方だな。まあいい。取り敢えず、言われたとおりに目に魔力を流そうか。

腕に流している魔力を止めるために、一度魔力の根源に開いた穴を塞ぐ。そして、改めて目までの魔力回路を意識し、さっきやったのと同じように、枝分かれを塞いでいく。そうして出来上がった一本の魔力回路を何度も確認して、ようやく後は魔力を流すだけになった。

「くっ……………！」

どんな異能力が発現するのかという期待と不安。前みたいなおことが起こらないかという恐怖。そして、いよいよ始まるのだ、という

気分の高揚に似た緊張がないまぜになる。俺の心の中はグチャグチャで、混沌としていた。集中するのが酷く難しくて、何度も魔力を流そうとして失敗する。

見かねたエイドリーさんが俺に声をかけようとしたのを片手で制して、俺はもう一度、魔力を流そうと身体の奥へと意識を集中させる。今度は上手くいき、魔力の渦まで到達した。

「よし……！」

何度も深呼吸して、心を落ち着かせる。そして、魔力の渦に必要な最小限の穴を開けた。スーッと水が流れるように、魔力が回路を流れていく。

へそ、胸、首……。魔力回路を流れる魔力が、段々と目的の場所まで迫っていく。そして、首、頭を通って、ついに瞳に到達しようかという時、それは起こった。

「ッ！ ウアゲツ！」

言葉にならない声だけが漏れる。視界が乱れ、銀色の星々が縦横無尽に乱舞する。天と地が何度もその役割を交代し、ガツンと殴られたような衝撃が頭を襲う。頭の中を支離滅裂な思考が踊り狂い、それと反比例するように身体からは力が抜けていく。胸の奥の欠けていたピースがカチリと音を立ててはまり、完成したナニカが情報の海に包まれる。

そして、そのナニカはまるで無尽蔵のように情報を吸いこみ、ほどなくして海は枯れた。

「ウゲツ！ ツはあ、はあ、はあ、はあ……！」

荒い息。暴れ狂う心臓と、錯乱した肺がコンビを組んで呼吸を急かす。だが、そこに先ほどの『異常』は無い。テレビの画面を

切り替えるように、一瞬で『異常』は消え去った。

未だ霞みがかかったような頭で、目の前に立つエイドリーさんをぼんやりと見上げる。その時になって初めて、自分が地面にへたり込んでいるのを自覚した。

「はあ、はあ、はあ……。ふうふう……」

肺と心臓のお二方もようやく落ち着いたようで、俺は普通に呼吸ができるようになった。頭にかかっていた霞も晴れ、どうにかいつもの思考能力を奪回する。

そして、思考回路が正常に稼働し始めたことで、俺はエイドリーさんの言葉をはっきりと理解した。

「ああ、なんだ、そういうことが」

ぼつりと。思わず口を突いて出た言葉に、エイドリーさんが頷いて、

「どうやら成功みたいだね。『そういうこと』さ」
と云い。

……確かに、『言わなくても分かる』な、これは。

異能力は魂に宿る。それが意味するのは、異能力が、先天的にその者を構成する一要素であるということ。即ち、それは呼吸の仕方と同じことであり、脊髄反射と同じことであるということだ。無意識のうちに出てしまふ、使えてしまふ。それが、異能力と言うものの。

呼吸を必要としない羊水の中で育った赤ん坊が、生まれた直後にも関わらず、鳴き声を上げながら自然に呼吸を始めるように。封印されていた異能力は、解放された瞬間から、その使い方を知っているのだ。もちろん、それはただ『使える』だけであつて、『使いこ

なせる』わけではない。

不意に、目の前の空間の一部が薄い赤で着色される。周りの空間はそのままなのに、そこだけが薄い赤色に染まっているのだ。まるで色眼鏡を掛けたかのように、現実味の無い薄っぺらの赤色が視界の一部を占領する。

そんな、目がおかしくなったとしか思えない非現実的な光景に、しかし俺は慌てなかった。それどころか、ある意味では、目がおかしくなったというのも間違いとは言い切れないな、などとどうでもいいことを考えていた。

なぜそんな余裕があるのかと問われれば、知っていたからと答えるしかないだろう。この赤色の意味する所も、その原因もすべて。

エイドリーさんが動く。さっきまでとは打って変わって、その動きは妙に遅い。いや、違うな。単純に、俺の動体視力が上昇してエイドリーさんの動きが遅く見えただけだろう。どうやら、魔眼は動体視力まで高めてくれるらしい。なんとまあ、便利なことで。

まるで精密機械のように、エイドリーさんが赤色をなぞりながら動く。不規則に歪んだり出っ張ったりしている赤色に染まった場所だけを、寸分の狂いもなく正確動いているのだ。

だが俺は、驚くこともなく、それを当然の事として受け入れる。なぜならそれは予定調和だから。絶対的な未来観測によって得られた、覆ることのない未来。それが赤色に染まった空間だ。

『ハザード・ヴィジョン 脅威の予知』。それが俺の魔眼の名前。

「ホリイ坊。いつまでへたり込んでいるんだい。ほら、立ちな」

エイドリーさんがそう言いながら手を差し出す。その手を握ると、エイドリーさんは、よいしょ、と言いながら俺の身体を立たせた。

「今日は疲れただろう？ もうじき夕方だし、今日はこれでおしまいだね」

エイドリーさんが空を見上げて言う。

俺もつられて上を見上げると、確かに、日差しは橙に色づき始め、太陽は地平線に再会するために全力疾走中だった。いつの間にか、かなりの時間が経っていたらしい。

「ほら、家に戻るよ」

「あ、はい！」

そのままぼんやりと空を眺めていた俺は、エイドリーさんの声にハッと我に帰る。慌ててエイドリーさんの後を追った。

魔眼、ハザード・サイジョン『脅威の予知』。この保持者の脅威となりうる行動軌道を、事前に視界に赤色で示す。

そして、この魔眼によって観測された未来は、決して覆えることは無い。だからこそ、俺はあの赤色に染まった空間を、予定調和だと言いきったのだ。

どうやら、俺は随分とけっしたいな能力を手に入れてしまったらしい。どこか雲をつかむ様な嬉しさを感じながら、俺はそんなことを考えていたのだった。

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

主人公の地味チート、ようやく出せました。そして、自身のルビのセンスの無さに愕然としました。おーあーるぜっと。

とにかく、これで説明回が終わるか。ふい〜……。長かった……。

今回は主人公がメツタンメツタンにやられます。主に精神的に。

幼馴染組 シルヴィとかセレスとか、皆さん誰それって状態だと思えますが、恐らく次回は彼らが出てくるでしょう。

誰だっけ? と思った方は、『Episode3 覚醒の儀・下』の最後の方を読んでいただくと、分かると思います。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております!(誹
謗中傷の類はご遠慮ください)

どうも、お久しぶりです。

またもや更新が遅くなってしまいました。

申し訳ありません。

一応、言い訳めいたものをさせていたたくとすれば、テスト期間中だったということと、なんとまあタイミングの悪いことに風邪をひいていた、ということがありまして、ここまで更新が遅くなってしまいました。

次回は、この4日後、8日を予定しております。

私の場合、更新速度を落とすのは簡単なのですが、上げるのは簡単ではありません（実体験）。下手をすれば、そのままズルズルと更新頻度が落ちていき、更新停止状態になってしまった、なんてこともあり得るので、ここが踏ん張り所。

なんとしても、8日までには更新したいと思います。

それでは、本編をどうぞー。

Episode 10 <神聖歴883年・暖の期・26日> 幼
馴染との再会。

「母さん、行ってきまーす！」

「行ってらっしゃい、ホリイちゃん」

母さんに見送られながら家を出て、なかまち中街 ウァリネラここ白亜の街は急斜
面に作られた街で、上から順に、たかまち高街、したまち中街、下街と呼ばれる区分
に分けられている。の方へ歩いていく。

俺たちが住んでいるのは下街だから、中街まで行くには急勾配の
坂を登っていかなければならない。

体力の無いこの身体ではすぐに息が上がり、上から刺すように照
りつける高原特有の強烈な日差しに、あっという間に汗が噴き出し
始めた。

「ふう……」

思わず立ち止まって、息を整えながら汗を拭う。

この日差しと坂がなければ、かなり過ごしやすい気候なんだけど
な……。そもそも、気温もあんまり高くないし。

山から吹き下ろしてくる風が、火照った身体をクールダウンして
くれる。数十秒もすると、汗も若干引いてきた。

「よし……」

目的地はまだまだ先。俺はへたり込みそうになる精神に活を入れ、
もう一度坂を登り始めた。

歩きながら周りの風景をぼんやり眺める。ここは大通りだから、露店も人も多い。多種多様な人々や品物が、この白亜の大通りを行き来していた。

大通りの反対側では、鈍く輝く金属の鎧を身に纏った冒険者らしき男が、露店の店主と値切り交渉をしている。他にも、新緑のローブを着た魔法師風のエルフの男や、何やらよく分からない魔物の素材を使った鎧を着ている女冒険者など、大通りのあちこちで冒険者の姿を見てとることが出来た。

人種も性別もバラバラな彼らだが、一つだけ共通点がある。それは実にカラフルだという点だ。

美しい蒼色の鎧を着こんでいる者もいれば、反対に、目によろしくなさそうな、ケバケバしいオレンジ色の素材を使った防具を着ている者もいる。街自体が白色なので、一見すると、キャンパスに無秩序に絵の具をぶちまけたようだ。

「流石、やっぱり活気が違うよなー」

なんて呟いてみる。もつとも、この街しか知らないなので、比較対象は存在しない。ただ言ってみただけである。

とは言え、俺のいうこともあながち間違いではない。この街が活気に満ち溢れていることは確かだ。

ここは冒険者の街。冒険者という存在は、商人にとっては非常にありがたい存在だ。なぜなら、彼らはよく金を落としていてくれるのだから。命を掛けて金を稼ぐ彼らの収入は高く、当然ながら金払いいもい。冒険者が集まる街は、彼らが落としていく金のおかげで非常に経済的に豊かになると言われているのだ。それはこの白亜の街も例外ではない。

「お、見えてきた見えてきた」

そんなことをとりとめもなく考えながら歩いていると、前方に突如として緑が現れた。そして見えてきたのは、木、木、木、木、木

森林である。

ヴァリネラ

ここは白亜の街で、恐らく唯一の白色以外の色が存在する地区だろう。

『ヴァリネラ森林公園』。これがこの場所の名前だ。適度に人の手が入ったこの森は、市民の憩いの場として、この街の人々に古くから愛されている。

「ふう……。やっと日陰に入れたか」

森林公園に足を踏み入れると、頭上に広がる木々が苛烈な日差しを遮ってくれた。風が吹き抜けて木々がこすれ合う、ざわざわという心地の良い音を耳にしながら、今回の目的地まで歩いていく。

俺はその心休まる音をBGMに、ここに来ることになった経緯を思い出していた

きつかけは、2日前のこと。

その日は、異能力を本格的に学ぶのと、魔法、魔術などや魔力について色々エイドリーさんから習っていた日だった。

そんな折、母さんからあることを告げられたのだ。

「実は……ちょっと言い難いんだけどね。ホリイちゃん覚醒の儀の後、1、2日気絶してたでしょ？ あれのせいで、ホリイちゃんちよっと出遅れちゃって、シルヴィちゃんとかセレス君とか、みんなもう訓練終わりがけみたいだね。2日後の26日に、一度みんなが集まるうってセレス君たちのお母さんと話してたんだけど……。でも、普通、この訓練って5日近くかかるから、ホリイちゃんは無

理かもしれないわ」

ま、マチですか……。シリウスとかアンナとかがみんな終わっているのに、俺だけ一人訓練を続行しなければならなくなるのか！？ いやしかし、気絶していたせいだから、俺のせいじゃない気がする……。あー、でもなんかいやだ！

……ええい、もう決めた！ 2日後って言うてたな。いいだろう！ 今日と明日の二日間ですべての訓練を終えてやる！ そもそも、『身体は子供、頭脳は大人』を地で行く俺が、普通の子供と同系列に並べられていいだろうか？ いや、いいはずがない！ 現役高校生で、それなりに頭もいい方だった俺が、この程度のことまで白旗を振っついては駄目なのだ！

そうして、決意を固めた俺は、

「いや、やるよ。今日と明日の2日間で全部の訓練終わらしてやるよ！」

と、気炎万丈、高らかに宣言したのだった。

これが2日前の話。

そして現在、俺はきつちり2日間で訓練を終わらせて、ここに来ている。一応、2日で訓練を終えるために、筆舌に尽くしがたい努力を重ねたということは記しておこう。前世での知識と頭脳をフル活用し、ようやくここまで漕ぎ着けたのである。エイドリーさんも相当驚いていた。

俺は、これまでのことを思い出しながら、木々の間を縫うように石畳で舗装された道を歩いていく。

当然のことながら、ここに来た目的は、我らが幼馴染たちと会うためである。集合場所に指定されたのが、ここ森林公園の大広場だったのだ。確かに、ここは公園と名の付くだけあって、子供たちが遊ぶための広場や遊具もそれなりに充実しており、集合場所としてはもってこいの場所だろう。

そしてしばらく歩くこと10分ほど。森が開けて、目の前には大きな広場が飛び込んできた。

「ふいー……。やつと着いたか。えーつと、あいつらは……」

「おーい！ ホーリーくん！」

と、彼らを探していた俺の耳に聞こえてきたのは、聞きなれた声。声のする方向を見ると、金色の髪の少女がこちらに手を振っていた。アンナだ。他にも、セレス、シルヴィ、シリウスと、全員の姿も見える。どうやら、俺が最後だったようだ。

急いで彼らの下へ向かう。みんなの所に着くと、すぐに質問攻めに遭った。

「大丈夫だったのか？ ……心配したんだぞ」

「ねえ、大丈夫だった？ あの時、ホーリーくん気絶しちゃったから、みんな心配してたんだよ」

「そうそう、それにその目、どうしたんだよ？」

「もしかして……魔眼、か？」

上から順番に、シルヴィ、アンナ、セレス、シリウスである。それぞれの個性がよくわかるね。

……うん。みんな俺のこと心配してくれていたのは嬉しいけど、久しぶりに会ったんだから、久しぶり、とか挨拶ぐらいあってもいいんじゃない？ まあ、挨拶も忘れるほど心配していてくれたって考えると、すごくうれしいから、許すとしてよう。

……ああ、だがシリウス、お前だけは別だ。お前は開口一番にそれか。いや、確かに魔眼であってるけどさ。シリウスらしいと言えば、シリウスらしいが……。

あ、あと、シルヴィ超かわいい。ちよつとそっぽ向きながら頬を赤くして、『心配したんだぞ』とか、俺を萌え死にさせる気なのか？ こんな反応するやつって、前世では超が付くほどの絶滅危惧種だぞ？ 耳もぴくぴく動いてるし、尻尾もぶんぶん振られて、正直タマリマセン。

……ゴホンゴホン。それはとにかくとして。

みんなの質問が途切れる頃を見計らって、俺も口を開く。

「みんな、久しぶり。元気そうでよかった。俺も、特に問題は無いから、心配しなくていいよ。ああ、後この目はシリウスが言った通り、魔眼だ。正直、魔眼だからどうこうってことは無いから、できれば気にしないでくれるとありがたい。魔眼の能力については……また後でな」

みんな 特にシリウスが 目を輝かせて興味津津な顔をしているので、一応釘をさしておく。一瞬、ちよつと残念そうな顔になった シリウスの野郎は露骨にである が、みんな自分の異能力を早く見せびらかしたいのか、すぐに、うずうずと待ちきれない様子に早変わりした。

うん、子供だなー。俺？ 俺は勿論そんなこと思っちゃいない。大人ですから。

だから、ちつとも、俺の異能力を知ったら驚くだろうなー、とか、あ、でもこいつら子供だから、この能力の有用性なんて理解できな

いか、なんて思っていますんヨ？ ホントダヨ？

そんな、一人心中で自爆しつつ、生温かい視線を送っている俺を尻目に、

「じゃ、じゃあ、俺からな！ へへへっ、俺のいのうりよくはな……」

と、セレスが早速自慢を始めたようだ。『異能力』の部分が若干言えていないのが、またバカなセレスらしい。

さて。

それでは、我らが幼馴染ーズによる、異能力自慢大会の始まり始まり……。

ぱちぱちぱちぱちー。

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

どうやら、私の異能力『太らせる筆』が発動したようでして、文字数があれよあれよと言う間に増えて（太って）いきました。

おかしい。こんなはずじゃなかったのに。何度見直しても、文字数は変わりません。

この話の文字数は少ないですが、どう考えても、この続きを書こうとすると5000字〜6000字になりそうだったので、ここでいったん切りました。

そのせいか、大したことも書けてないし、内容は薄いし、と散々な文章になってしまいました。（他の話も内容が濃いかと言われると、返答に窮してしまうのですが）

こんな駄作ですが、もうしばらくお付き合いいただけると、ありがたいです。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹謗中傷の類はご遠慮ください）

追記：サブタイトルを『伸びた鼻はへし折られる運命にあるようです・上。』から『幼馴染との再会。』に変更しました（7月8日）

な、なんとか更新出来ました……。

ですが、相変わらず内容が薄いです。ザ・繋ぎ回って感じですね。

正直、これを投稿してもよいものかと悩みましたが、一話の文字数の都合と、何とかこの日までに投稿したいという思いから、投稿を決意しました。

ここ最近、何だか非常にスランプ気味です……。日に日に自分の文章力が落ちてきている様な気がして(そもそも落ちるほどあるのか、という疑問もあるのですが)、何度も何度も消して書き直しました。ですが、全く良くなっていく気がしません。ですので、みなさんもあまり期待しないでご覧下さい。

それでは、本編をどうぞ。

Episode 11 <神聖歴883年・暖の期・26日> シルヴィ大噴火。

Episode 11 <神聖歴883年・暖の期・26日> シルヴィ大噴火。

えー、それでは、第1回（2回は無いよ）異能力自慢大会の開催です！ いえー。

「じゃ、じゃあ、まずは俺からだな！」

まず始めに、口火を切ったのはセレス。待ちかねたと言わんばかりに、うずうずしているのがよく分かる。

ふむ、この腕白坊主は一体どんな異能力を身に付けてきたのかねえ。一応、俺以外の全員は、隔離されたメンバーだからな。相当強力な異能力なんだろうけど……。

「へへへ。じゃあ見てろよ……」

そう言つと、セレスは右拳をグツと引き、腰だめ構える。10歳児の構えであるが、中々に様になっている。これには訳があつて、セレスの親父さんは昔、王国の騎士団に所属していたらしく（それも隊長！）、その時に体得した剣術や体術をセレスに教えているそうだ。

どうやら、実演をするつもりらしい。確かに、異能力を理解してもらうのには一番手っ取り早い方法だろう。

「ふうー……」

セレスはじつと瞳を閉じ、深呼吸を繰り返す。何度も何度も深呼吸をして、精神を集中させているようだ。そして、数十秒が経っただろうか、という辺りで息を止める。

その次の瞬間、それまで閉じていた瞳を勢いよく開くと、

「フッ！」

裂帛の気合が吐き出されると同時に、腕が、ぶれた。

ドゴンッ！！

轟音と言っても差し支えないような音が辺りに響き渡り、土と草が舞う。何をどうやったかは知らないが、天高く打ち上げられた土と千切れた雑草が、雨のようにバラバラと降ってきた。ふと視線を下げれば、セレスのすぐそばに大きさも深さもなかなかのクレーターが。

………一体、何があった？

「……………はあ？」

俺は茫然と口を開けて、ポカーンと突っ立っていることしかできなかった。他の3人も同様にポカーンと口を開けて茫然としている。すっかり土まみれになってしまった俺たちを見て、セレスはニヤリと笑った。

「どんなもんよ！」

……いや、どんなもんよって言われても。まず何をしたのかさっぱりなんだが。思わず首をかしげる俺。みんなも同じ。と思ったが、シルヴィだけは違ったようだ。

シルヴィは、何かをこらえるように俯いて、プルプルと肩を震わせていた。俯いているせいで前髪が顔にかかり、その表情は窺えな

いが……。もしかして、怒ってるのか？
そう思っ、俺がシルヴィに声をかけようとした瞬間

「こんのお、大馬鹿者があつ!!!」
大音量の怒声が、俺たちの耳を直撃した。

「ッ！」
うわ、耳がキーンってなった。一瞬めまいが起こったようにふらついて、思わず地面にうずくまりそうになってしまふ。

「ほ、ホーリイ君大丈夫!？」

「あ、うん、大丈夫」

ふらついた俺を見て、アンナが慌てて駆け寄ってきて俺を支えてくれる。口では大丈夫と言ったものの、実際にはアンナに支えてもらわないとちよつとヤバイ。エルフの血も手伝ってか、どうやら他の2人よりも、俺の方がダメージは深刻なようだ。

俺はアンナに支えてもらいながら、ふらつく頭でどうにか泥と草を払い落す。そして、音の発生源へと目を向けると、そこには

シルヴィの姿があった。

彼女の美しい銀色の髪も、泥と草がへばりついていて台無しで、そして、その背中からは溢れんばかりの怒気が立ち上っている。

そう、某轟竜も真つ青なレベルの大声は、シルヴィから放たれたものだったのである。

「こんなすぐそばで大穴をこしらえるバカがいるかあつ!! 危ないだろうが! 実際私が寸での所で避けなければ私も巻き添えを喰らっていたのだぞ!? そもそもこんな人の多い所でこんなとんでもないことをしでかすなど貴様の頭には何も詰まっていないのか!

？ 貴様のやったことがすごいというのには十分に伝わったが限度というものがあるだろう限度というものが！ ああもうせつかく髪の毛を整えたのに台無しではないかおい聞いているのかこの大馬鹿者！！」

息もつかせぬとはまさにこのこと。凄まじいマシンガントークを息継ぎなしで言いきったシルヴィイは、荒い息を繰り返しながら、まだ怒りが治まらぬといった様子でセレスを睨みつけている。

一方のセレスはといえば、まさかこんなに激怒するとは思っていなかったらしく、そもそも、怒られることすら想定していなかったのだから、呆けたようにぼんやりとシルヴィイの顔を見つめた後、慌ててシルヴィイに頭を下げていた。

「うっ……う、ごめん！」

「許さん！」

「ごめん！」

「許さん！」

「ごめん！」

「許さん！」

……………。

シルヴィイの怒りは相当深かったようで（当たり前だ。シルヴィイの言い分を聞けば、俺だってこれくらい激怒するかもしれない）、セレスが何度も謝っても、一向に許す気配がない。

セレスは俺に救援を求めるような視線を送ってくるが……………。すまん、セレスよ。今回ばかりはフォローできそうにない。いつもはあまり大声を出さず、冷静沈着なシルヴィイがあそこまで激怒しているのだ。下手をすれば、俺たちにまで飛び火しかねない。触らぬ神にたたりなし、である。

俺が腕の前でバツを作って拒絶の意を示してやると、今度はアンナとシリウスにアイコンタクトを送るが、すげなくそっぽを向かれてしまった。2人とも、泥と草を被ったことで　シルヴィが激怒しているため、若干毒気を抜かれたきらいもあるが　それなりに怒っているようである。

かくして全員から見放されたセレスは、絶望と恐怖と1対1でブレンドしたような表情を浮かべると、一縷の望みをかけて俺の方を再び見つめてきた。その顔はもはや半泣きで、非常に嗜虐心をそそじゃなくて。

むむう。そんな目で見つめられると、ちょっと助けてやろうかな、とか思ってしまうのではないか。仕方ない。後でセレスからたっぷりと奢おほってもらうことにして、シルヴィから助けてやるか　そう思っ、シルヴィに声をかけようとした、のだが。

「……いいか、お前はいつもいつも考えなしで行動するから、私達がどれだけ迷惑を被っていると思っっているのだ！　その度に、いつも私がしりぬぐいをしなければならなくなるのだぞ！　分かっているのか！？　私だっ、て怒りたくなるに決まっ、ている！　それなのに、みんなありえないものでも見たような目で私を見てくるし……。怒ったっていいじゃないか！　そもそも、みんなは私を大人だと思っ、ているが、私はそんなに大人ではないのだぞ！　それに、私は完璧超人ではない！　なのに、なのに……。みんなは私をなんだと思っ、ているのだ！　セレスも……」

「う、うん、そうだね……。ごめんなさい。ごめんなさい……」

うん。2人の様子は完全に、絡み酒の上司とその部下の図だな。これは往々にしてよくあることだが、シルヴィの話している内容がもはや説教ではなく愚痴になっている。

前言撤回。これは下手に介入しようとする、俺まで巻き添えを食らいそうだよ……。よし、やっぱやめとこう。俺が割って入っていかなくても、しばらくしたら自然に終わりそうだし。

俺はそう結論を下すと、シリウスとアンナの所へ戻ることにした。まあ、あの調子だと後1時間は続きそうだが、俺には関係ない。セスが懇願するような目をしていた気もしたが、きつと気のせいだろう。気のせい気のせい。

きつと絶望に苛まれているであろうセスに、まあがんばりな、と何とも呑気なエールを送りながら、俺はシリウスとアンナの所に戻るのであった。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

結局、幼馴染の異能力説明にすら入れず……。おかしいです。こんな展開のはずではなかったのに。いつの間にか、セレスがシルヴィに怒られていました。

次回こそは、絶対に異能力の説明に入ります！……たぶん。
あ、それと、前話のサブタイを変更しました。内容は変わっていません。

次回の更新日は、早ければ7月12日、遅ければ13日になる予定です。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹謗中傷の類はご遠慮ください）

どうも、こんばんは。

何とか宣言した期限内に投稿が出来ました。と言っても、1話で終わる予定だったのが、タイトルでも分かるように、2話に分割されてしまいました。おかしい。おかしいです。絶対に、何か宇宙の意志的なものが働いているに違いありません。

相変わらずスランプ中で、思うような文章が書けませんが、どうか見捨てないでやってください。

それでは本編をどうぞ。

Episode 12 <神聖歴883年・暖の期・26日> それなんてチート？ 上。

「さて、気を取り直して、再開しようか」

俺はみんなにそう告げる。

現在の時刻は午後3時。シルヴィが激怒したあの時から2時間が経った所である。

その後、シルヴィたちを放置して一時間ほど遊んだ俺たちが見たものは、凄まじく異様な光景だった。

なぜか深海のような暗い雰囲気を発散しながら、虚ろな目で虚空を見つめ何かを呟くシルヴィと、すっかり燃え尽きて白い灰と化したセレス。2人の変わり果てた様子に、俺たちが大慌てしたのは言うまでもない。ついでに言うと、虚ろな目でブツブツとつぶやき続けるシルヴィは、メチャクチャ怖かった。

どうやら、絡み酒モードのシルヴィが途中で正気に戻り、自分のやったことのアマリの恥ずかしさにあんな状態になっていたらしい。恐らくセレスの方は、単にシルヴィの説教に耐え切れず燃え尽きただけだろう。

俺たちがそんな2人を何とかなだめてすかして、ようやく正気に戻したのがついさっきのこと。そして冒頭の言葉に繋がる、という訳である。

ようやくここに来た本来の目的を果たせそうだと思いながら、俺は2人をなだめた時の苦勞を思い出し、ため息をついた。

「じゃあセレス。さっきのこと、説明してくれるよな？」

俺は早速セレスに問いかける。さっきからずっと気になっていたのだ。

その問いに、流石に完全復活まではいかないのか、若干ローテンションなセレスが口を開く。しかし、その口から飛び出たのは、衝撃的な言葉だった。

「お、おう。えーっと、俺の異能力はな……『武神の加護』っていうんだぜ」

……は？ 今、なんて言った？ 武神の加護、だと？

「え、ちょ、ちょっと待て。武神の加護だと？」

「ああ。そうだぞ。何かもんでもあるのか？」

俺の慌てた様子に、ちょっとイラついたような表情を見せるセレス。……もしかして、こいつ、自分の異能力がどれだけすごいのかを理解していないのか？

俺が、再びセレスに尋ねようとした時、シリウスから横やりが入った。

「セレス。君はもしかして、自分の異能力がどれほどのものか、理解していないのかい？」

おお。さすがシリウス。俺が聞こうと思っていたことをすべて聞いてしまった。

「ん？ なんだシリウス？ これぐらい普通じゃないのか？ 父ち

やんが言ってたぞ」

「と、父ちゃんが言ってた？ そ、そういうことか……。セージスさんなら、それぐらい言いかねない……」

一瞬ありえないと思うも、セレスの父親 セージスさんの、豪放磊落ほうらいらくとでも表すべき性格を思い出して納得してしまう。俺もシリウスも、思わず頭を抱えて天を仰いだ。

武神の加護 『神の加護』系統の異能力が普通だった？ バカを言っちゃいけない。

そもそも、『の加護』と名の付く異能力は、常時発動型異能力の代表例だ。そして、その中でも、神の名が付く加護は最上級さいじゅうきゅうに位置づけられる。

効果としては、その神にちなんだ能力が身に着くのと、身体能力の上昇が挙げられるだろう。しかし、その効果のレベルが異常で、神の加護持ちが一人いるだけで戦争が可能である、とまで言われているのだ。

その証拠に、小国と大国との戦争で、神の加護持ちを動員した小国側が、大国側を圧倒したという逸話はたくさん存在する。

だから、決して、『普通』という範疇カテゴリーに収まるような異能力ではないのだ。これは一般常識のはず……だったのだが。

「え、どうしたの2人して空見上げて。頭、痛いのか？」

「そつだぞ、シリウスもホーリイも。一体どうしたといたのだ。いきなり頭を抱えて……大丈夫か？」

そう聞いてくるのは、シルヴィとアンナ。この2人 とくにシルヴィには 俺たちのような反応を期待したのだが……。どうやら、常識人は俺とシリウスのみのもようだ。こんなので大丈夫だろうか……。真剣にみんなの将来が心配になる。

俺たち2人はお互いに顔を見合わせ、無言のままため息をついた。
……なんだろう？ 急に、シリウスに対して親近感が湧いてきた。
俺は再びため息をついて、俺たちを不思議そうに見つめる3人に説明するために口を開いた。

「あのな、武神の加護って言うのは、その加護を受けたやつが一人いるだけで、戦争の状況が一変してしまうような、そんなレベルの異能力なんだよ。簡単に言えば、人型決戦兵器なんて目じゃない

いや、今の例えは忘れてくれ」

ポカンとしているみんなの顔を見て、エヴァネタが通じないの思い出し、慌てて口を閉じる。つつい、前世の友人と話している感覚でものを言ってしまうのだ。危ない危ない。

「ホーリイくんって、たまに意味の分からないことを言うね」

「そうだな。ついさっきも、『ムスカをリアルでやる羽目になるとは……』とか訳のわからんことを言っていたし」

うんうんと、アンナとシルヴィの言葉に頷くみんな。……なんてこつたい。これからは自重せねば。

「と、とにかく！ 断じて、『普通』の異能力なんかじゃないんだ。これは一般常識だからな！ 知らなかつたら笑われちゃうぐらいのレベルだぞ！」

無理矢理話の流れを戻して話題を回避する。ふうー。危なかった。……え、回避できてないって？ そんなバカな。

「それで、だ。お前はあのとき、何をどうやったんだ？」

戻した流れが再び逸れないように、セレスに質問を投げかける。

が、帰ってきた答えは、またもや予想外のものだった。

「ああ、簡単だよ。ただ単に、地面を全力でブン殴っただけ」

「……………は？」

ぶ、ブン殴った、だと？ おいおいおいおい。それだけで、あんなに大きなクレーターが出来上がったって言うのか。何それ怖い。

……………正直、ここまでとは思っていなかった。俺の異能力も結構なチートだという自覚があるが、こいつのはその上に行く。ハッキリ言って、俺の異能力なんか霞んで見えるほどのチートっぷりである。武神の加護、恐るべし……………。

「そ、そうか……………。じゃあ、シルヴィの異能力ってどんなのなんだ？」

取り敢えず、こんな人間ビックリ箱に付き合っていられない。続きを進めることにしよう。そう思って、次はシルヴィに問いかける。

「私か？ 私の異能力は、ライトニング・マイスター『霆を司りし者』と言うんだ。エレクトリック『発電能

力者』の変異型というか、亜種みたいなものらしい。今まで一度も確認された事の無い能力だから、詳しいことは分からないそうだが」

な、名前からして物騒な……………。しかも、前例が無いってどういうことさ。か、勝ち組みめ……………！

「まあ、この能力でできることと言えば……………せいぜいこんなことぐらいだな」

そう言つと、シルヴィはおもむろに腕を差し出した。そして、何かに集中するように、その黄金の瞳を閉じる。数秒後、異変は起きた。

手の甲がぼんやりと黄色い光を帯びたかと思うと、それが腕全体へと広がり、やがて腕全体の輪郭がぼやけ始めたのだ。

「……………？ 輪郭が……………ぼやけてる？ 帯電しているのか？ いや、それだけじゃないな……………。なんだろう、質量感もなくなっているよ。うな気がするね……………」

シリウスが不思議そうな声音で呟く。その言葉に、シルヴィは驚いたように頷いて、言った。

「よく分かったな、シリウス。その通り、これはただ帯電しているだけじゃない。詳しいことは私にも説明がし辛いんだが、腕そのものが電気へと置き換わっているらしい。私はこれを『エレクトリック・ドライヴ電霊昇華』と呼んでいるのだが……………」

「腕が電気に置き換わっている？ そんなことが可能なのか？」

「いや、普通の発電能力者では無理だと思う。だけど、私の異能力だと可能なんだ。だからこそ、この異能力が亜種に位置づけられているんだろう。……………あと、別にこの腕だって、自由に動かせるし、物も掴むことができる。もっとも、掴んだ物は例外なく帯電してしまんだが。それに、なぜかこの状態の時は、異常に速く動けるんだ。そう言っつて、ヒュン、と腕を一振り。なんだ普通に振ってるだけじゃないか、と思っつたら、本物の腕はとつくに振りきれなくて、俺が見たのはその軌道に沿って動く残像だった。

リアル残像って、初めて見た……………。

「……………」

これには啞然とするほかない。他のみんなも同様なようで、シーンとした空気が俺たちを包み込んだ。

「いや、あの、みんなどうしたんだ？ わ、私が何かおかしいことでもしたのか？ 黙ってないで、何とか言っただけいいんだが……」
「いや、うん、あの、さ。シルヴィもすごいなって思ってる。みんなもそう思ってるだけだよ、な？ な？」

俺がそう言ってみんなを見ると、うんうんと一斉に頷く。その様子に、シルヴィは安心した表情で、そうか、と呟いた。

……シルヴィ、いつにもまして弱気だな……。あれか、さっきの一件が効いてるのかな？ そう言えば、いつもは活発な尻尾と耳も、心なしか元気が無いように見える。

弱気なシルヴィって貴重だから、今の内に目に焼き付けておかないと！ なんてバカなことを考えながら、俺は脳内フォルダにシルヴィの様子を保存すべく、じつと彼女を見つめるのだった。

読んでいただきありがとうございます。

いかがだったでしょうか。

シルヴィさん厨二大爆発です。厨二的クーデレ。新しいジャンルが開拓できそうですね。

さて、ここで唐突ですが問題です。

『霆を司りし者』の『霆』は訓読みで何と読むでしょうか？
これらが分かったら、漢検準一級ぐらいは受かるんじゃないかと思えます。分かった人はスゴイです！

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹謗中傷の類はご遠慮ください）

どつも、こんばんは。

朝顔です。

前回のクイズ、『霆を司りし者』の『霆』は訓読みでなんと読むでしょうか？ の正解発表でございます。

正解は……『いかづち』（いかずち）です。音読みでは『てい』と読みますね。

それでは、本編をどうぞ。

Episode 13 <神聖歴883年・暖の期・26日> それなんてチート？ 下。

「次は私だね」

そう言ったのはアンナ。セレス、シルヴィときて、残すはアンナとシリウスと俺のみだ。

アンナのその言葉に、俺は少し身構える。

セレス、シルヴィと、常識はずれなものを連続して見せられたから、もう何が来ても驚かない。絶対に平常心を保ち続けてやる。そもそも、こいつらに平凡を期待する方が間違っているのだ。ここにいる俺以外の全員は、みな隔離されたメンバーなのだから。そして、アンナだってその一人な訳で、当然ながらぶっ飛んだ異能力を俺に見せつけてくれることだろう。

「私の異能力はね、ダメージ・デリバリー『負傷付与』って言うんだよ」
ダメージ・デリバリー
負傷付与？ 聞いたことの無い能力だが、なんとなく想像がつく名前だな。

そして、そんな事を考えた俺の予想はやはり、続くアンナの言葉によって証明された。

「この能力はね、傷とかを別のものへ移すことが出来るんだよ。生

物、無生物に関係なく。ただ、その人に触れていないといけないうし、病気とかは移すことができないけど……。それに、魔力もたくさん使うから、今だと1、2回ぐらいしか使えないんだ。でも、これのみんなが怪我をした時に、私が治してあげられるね！」

うわぁ……。やっぱり。俺が想像していたのと、おおよそ変わらないう能力だった。

唯一違ったのは、無生物にまで効果を及ぼすことができる、という点と、おそらくアンナの言葉から察するに 肉体的な損傷までしかカバーしていない、という点。……。あ、唯一じゃなかった。

しかしまあ、この能力、名前はそれほど仰々しいものではないが、よくよく考えると相当えげつない能力だ。

例えば、仮に一人の負傷者がいたとする。さらに、そこにもう1つ何か物体があれば、負傷者の傷を物体に移し、その負傷者の傷を瞬時に癒すことができるのだ。どれだけ深い傷であろうと、である。

それに、この能力の使い道は何も回復だけではない。

敵と対峙して傷を負った際には、その敵に触れていれば、敵に自分の傷を移して負傷させることができる。即ち、相手が自分を傷つけなければ傷つけるほど、相手も傷つく事になるという、本当にえげつない能力だと言えるだろう。

もつとも、そんな使い方を、人を傷つけることを嫌うアンナがするとは思えないが。

またもや、俺の異能力が霞むようなとんでもない能力を発現させたなあ、なんて、あきらめの境地に片足を突っ込んだような思いを抱きながら、俺はみんなの反応を窺ってみる。

シリウスは、どうやらこの能力のえげつなさに思い至ったようで、

微妙に顔が引きつっているような、常識的な反応を見せている。…
…だがな、シリウスよ。どうせお前も似たようなチート大爆発な能力を持っているんだろう？ ケツ。

シルヴィとセレスは、ふーん、とただ頷いているだけ。その様子を見る限り、この能力の凄さを見抜けてないようだ。セレスはともかくとして、シルヴィまで見抜けないのは意外だな。さっきの出来事と言い、シルヴィって意外と天然と言つか、鈍いと言つか……。今日から、彼女に対する評価を改めないといけないようだ。

「今日は、みんな怪我をしていないみたいだから、実演はできないね」

ちよつと複雑そうな表情でアンナが言う。俺たちが怪我をするのはいやだけど、自分の能力を自慢できないのもいやだ、といったところだろうか。

そんなアンナに、セレスが声をかけた。

「いいじゃねえか。……俺は頭悪いから、アンナの能力がどんなものなのかいまいち理解できないさ。けど、将来俺たちが冒険者になったときに、アンナの能力で俺たちの怪我を治してくれるんだろ？ なら、いいじゃねえか。な？」

そう言つて、にっこりと、屈託のない笑顔でアンナに笑いかける。「うんっ！」

アンナも、セレスのその笑顔を見て、顔をほころばせた。

青春してるねえ……。10歳のくせに。これはあれかな？

セレス×アンナフラグ成立かな？

そんなダメ人間の鏡みたいな思考をしている俺。しかし、シリウスもシルヴィも似たり寄つたりのようである。2人とも、何やら生

温かい視線をセレスとアンナに注いでいるのだった。

・
・
・
・

「次は僕か」

シリウスが言う。

となると、残りはシリウスと俺だけだから、俺が一番最後までいい……うわ、みんなの異能力よりも確実に見劣りする俺の能力がトリを飾るって、なんだろう、新手的イジメだろうか。

俺が一人、この後のことを考えてナイーブな気分になっていると、シリウスが口を開いた。

「僕の異能力は、『アルティメット・ソーサラー魔道を極めし者』と言ってね。まあ、簡単に言えば、魔法、魔術、魔導、魔道』に関することすべてを行使することが可能になる、という能力かな。もちろん、ただ『使える』だけで、『使いこなせる』のではないから、要修行って所だね」
うわー……。絶対に平常心を保ってやると意気込んでいた俺だが、予想の遥か上を飛んできたシリウス言葉に、啞然とせざるを得なかった。

すべてを行使できるってことは、ごく一部の者にしか継承されて

いない古代魔法や、存在すらも疑われている神代魔法を再現できる、エンシェント・マジック ということだ。ミシカル・マジック

もちろん、何もせずに使用できるなんてことはないだろうから、それらについて学ぶなり何なりしないといけないだろうけど。

セレスもシルヴィもアンナもぶっ飛んだ能力ばかりだったが、シリウスのはその上に行く。何せ、神代魔法ミシカル・マジックなんかは、その魔法一つで大陸を消し飛ばした、とまで言われているほどののだ。まあ、そんな魔法を扱うには、膨大な魔力がいるだろうが。

そこまで考えた時、俺はあることに気がついた。

……そういえば、シリウスの魔力量はどうなんだろう？ せつかく、こんなトンデモ能力を持っていても、魔力が無くちゃ話にならない。

ほかのみんな セレスの異能力は常時発動型だから魔力は必要ないし、シルヴィは獣人種の中でも魔力の多い銀狼族シルバ・ウルフだから心配いらないだろう。アンナも、天使の血を色濃く引いているから、魔力には事欠かないはずだ。

しかし、シリウスは？ シリウスは純粹な普通種 つまりは純粹な『人間』だ。

普通種の特徴としては、すべての能力値が平均的で、突出した能力が無い代わりに苦手な分野も無い、というものがある。個体差はあれど、大体、魔力量では妖精種（すなわち、エルフやフェアリーなど）に勝てず、身体能力では獣人種に勝てないと言われている。

もちろん、セレスのように一部の能力が突出した普通種もいるにはいるが、それはごく少数。シリウスがその中に入っているとは限らない。……が、なんとなく、シリウスもその範疇カテゴリーに入っている気がするな。

「シリウス。お前の魔力量はどうなんだ？」

そうシリウスに尋ねてみると、やっぱり、と言っか、予想通りの答えが返ってきた。

「ああ、僕の魔力量は、大体4500ベールぐらいだから、ホーリイが心配する様な魔力切れは起こさないと思うよ。まだ、魔力量は伸びるしね」

うへえ……。やっぱり、魔力量が普通種とは思えないほど多かったか。と言っか、ハーフエルフとは言えエルフの血をひいている俺よりも、魔力量が多いってどういうことだ。

『ベール』と言っるのは魔力量の単位で、300ベールが普通種の大人の平均魔力量とされている。シリウスの場合4500ベールだから、現時点で大人の15倍もの量の魔力を保持していることになる。これから成長していくにつれ魔力量も伸びていくし、冒険者になると成長に関係なしにまた伸びるので、現時点では破格の値と言えるだろう。

ちなみに、俺の魔力量は2800ベールで、母さんが3400ベールだった。エイドリーさんは母さんより俺の方が魔力量が多いと言っっていたが、間違っっていたらしい。

「そうか。お前に低魔力量を期待した俺が間違っっていたな。……この、バグキャラめ！」

おっと、つい本音が。

「ば、バグキャラは酷いんじゃないかな!？」

「お前の異能力、魔力量、どれをとってもバグキャラとしか言いようがないじゃないか。大人15人分の魔力量を持っていて、数年に一人出るか出ないかぐらいの強力な異能力を持っているやつ、ど

「こがバグキャラでない？ 寝言は寝て言え！」

「ぐっ……」

シリウスの野郎が何か言いたそうにしているが、反論は認めない。バグキャラなんて大っ嫌いだ！

「じゃあ、ホーリイ、君の異能力はどうなんだい？ 君も魔眼なんて珍しいものを発現させているんだから、人のことは言えないだろう！」

と、シリウスが得意そうな表情で言っているが……。ふん、せいぜい俺の異能力のしょぼさに驚くがいいさ！……自分で言っていて悲しくなってきた。なぜに俺がこんなに自分を卑下せねばならぬのだ。

「俺の異能力は、『ハサード・ヴィジョン脅威の予知』フー能力だ。簡単に言えば、敵の攻撃軌道と攻撃範囲を事前に視界に赤色で表示してくれるっていう、至極単純な能力だよ。どうだ、分かっただろう！ 地味にしょぼいんだよ！」

半ばやけくそ気味に言い放つ。俺の言葉で、みんなの間に微妙な空気が漂った。すごいのはすごいんだけど、今までのと比較すると見劣りするな……。的な空気である。

「あー、ホーリイ、すまん……」

申し訳なさそうと言うか、あー、地雷踏んじやった、みたいな表情でシリウスが言う。その言葉が、グサツと胸に刺さった。ぐふう。こついつとき、子供って残酷だ。何も言わないで欲しいのに……。

「ホーリイくん、元気出して？」

「そうだぞホーリイ。能力が劣っていたからって、気にすることは

ないさ」

「そうそう！ 落ち込むなって！」

しかも、シリウスに追随するようにみんなが言う。

グフツ……。みんなのその心遣いが逆につらいよ……。誰か、その辺りの機微を察してくれるやつはいなのかあ！

しかし、そんな俺の心の叫びは、無情にも、ただ空に吸い込まれていくだけだったとき。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

あー……。ようやくこれで物語が進みます。長かった……。ここまで来るのに5万字近く使ってますね……。

幼馴染たちの異能力も出し切った所で、今回はかなり時間がとびます。具体的には2年ほど。

やっと、書きたかったところに入れます。

次回の更新日は、正直未定です。

来週の月曜から、2泊3日で、勉強合宿とか言う頭のとち狂った合宿が始まります。しかも、今週の木、金は平常通りの学校があった……。 (土曜が終業式です)

さらに、再来週には家族旅行が控えているので、その準備で忙しいという……。何とか家族旅行前に一話上げたいですが、できるかどうか……。

そういう訳で、確約はできませんが、なるべく早く上げたいと思います。

それでは……！

どつも、こんばんは。

朝顔です。

正直自分でも、こんなに速く投稿できるとは思ってもみませんでした。前話を書き終えた次の日、早速この話を書いていたのですが、まあ、筆が進む進む。数時間で2000文字近く書いてしまいました。（一見少ないようですが、私的にはメチャクチャ多いです）

正にネ申 降 臨って感じでした。その次の日も、そのまた次の日も、ネ申はまだ降臨なさっていて、あっという間に二話分相当の話が書いてしまいました。

やっぱり、ネ申が降臨したのは、久しぶりの戦闘描写だったからでしょうか。やっぱり戦闘描写は書いてて楽しかったです。書いててこんなに楽しいのは、かなり久しぶりでした。

今話と次話は、できれば続けて読んでいただきたいです。そのための連投ですから。

さて、本編をどうぞ。

Episode 14 <神聖歴885年・春の期・14日> 俺
たちの日常・上。

足元に広がる落ち葉を踏みしめて疾走する。まだ木々が葉をつける時期には早いのか、頭上から比較的明るい日差しが差しこんできていて、全体的に薄暗いものの、視界に不自由するというほどではない。

「ホーリイ！ そっち行つたぞ！」

「分かつてる！」

セレスが声をかけてくるが、そんなことさっきから気付いていた。現に、セレスが口に出す前から、俺は逃げ出した一角兎ホーン・ラビットを追って走り出していたのだ。

ホーン・ラビット一角兎には、危機に陥ると逃げ出して、仲間を連れて戻ってくる、という厄介な習性がある。

小物のチンピラみたいなモンスターだが、これが存外厄介で、時には20頭以上連れて戻ってくることもあるという。そのため、逃げ出した一角兎ホーン・ラビットは、絶対に巣穴に戻る前に倒してしまわなければならないのだ。

「ちつ………！ 速いな」

思わず舌打ち。一角兎の白い背中が見えるが、木々を縫うようにして走るため、中々追いつけない。それに、僅かに相手の方が速いのだ。

俺は全力で追うが、徐々に引き離され、さらにはセレスたちの戦闘音も遠くなってきた。みんなと離れて深追いするのはマズイ。俺は開いている左手で懐から投擲用のナイフを1本取り出すと、アングースローの体勢から身体を捻るようにしてその背中へ投擲した。

「ギピイツ!?!」

投擲したナイフは鈍い光を反射しながら、見事ホーン・ラビット一角兎の背中へ命中。人の腰ほどまである巨体からは想像できないほどかわいらしい声を上げながら、バランスを崩して転倒した。

どうやら、俺が投げたナイフは背骨を貫いたらしく、ピギイ、ピギイと悲痛そうな鳴き声を上げながら手足を弱弱しく動かすだけで起き上がることが出来ないようだ。俺はその傍まで駆け寄ると、未だ弱弱しく鳴くその喉元を、右手のナイフでかき切った。

「ギイツ!?!」

断末魔の叫びと共に、その白い巨体から力が抜ける。俺は、喉をかき切った時の骨を砕く嫌な感触に顔を顰めながら、そつと手を合わせる。と同時に、俺の中に暖かいナニカが流れ込んでくるのを感じた。

手を合わせながら、思えば俺もかなり成長したな、と思う。何せ、初めて魔物を殺した時は、盛大に吐瀉物ゲロを撒き散らしたのだ。それが今では、亡骸に手を合わせるほど余裕があるのだから。

とは言え、やはり『殺し』には慣れない。肉を裂き骨を断つあの感触が、嫌悪感を増大させるのだ。

「ふう……。感傷もここまで。セレスたちの所に戻らないとな」

わざと口に出して自分の意識を切り替える。こうしている間にも、セレスたちはまだ戦闘を続けているのだ。

俺は、ホーン・ラビット一角兎の象徴である立派な一本角を手際よく切り取り、腰の亜空間ポーチへ突っ込むと、背中に刺さったナイフを回収して、再び戦場へと戻るため駆けだした。

ちなみに、ホーン・ラビット残った死体は、森の魔物たちのエサにするために放置する。一角兎の肉はそれなりに美味で、取引もされている。しかし、冒険者でもない俺たちには持ち帰っても売ることはできない上、そもそも今ここで解体している暇などないので、放置する他ないのだ。

さつき走ってきた道とも呼べないような獣道を、音を頼りに駆ける。すぐに視界が開けて、セレスとシルヴィ、アンナにシリウスと全員の姿が見えた。

5匹いたホーン・ラビット一角兎はすべて倒されていて、残るはワイルド・ベア暴爪熊が1頭にウイン旋風狼2頭のみだ。

ウイン旋風狼はその素早さから、ワイルド・ベア暴爪熊は防刃性の高いその剛毛から、それなりに厄介な魔物として知られている。しかし、シルヴィとセレスはその3頭を相手に、互角かそれ以上の戦いを繰り広げていた。

シリウスに目をやると、もうすでに攻撃魔法の詠唱に入っている。この2種は共に魔力耐性が低い。つまり、魔法が弱点なのだ。シルヴィとセレスのおかげで動きが制限されている今なら、魔法を当てるのも容易いはず。これならばこいつらを倒してしまうのも時間の問題だろう。

俺はそう思い、身体から力を抜いた。

もう大丈夫だ。そう高をくくったのがいけなかったのだろうか。

「グロオオオオツ!!」

辺りに、突如として咆哮が響き渡った。

「ッ!?」

突然の事態に身を固くする。慌てて音のした方を振り向くと、そこには俺目掛けて突進するワイルド・ベア暴爪熊の姿が。全身傷だらけになりながら、目を血走らせ、俺に突進してくる。

「うおおおっ!?!」

俺は渾身の力で身体を脇に投げだしていた。瞬間、俺の居た場所を灰色の巨体が通り過ぎる。

あ、危なかった……。後数瞬避けるのが遅ければ、俺の身体はあつけなく吹き飛ばされていただろう。下手をすれば死んでいたかもしれない。

ワイルド・ベア

暴爪熊は突進で崩れた体勢を立て直すと、立ち上がり、鋭い眼光で俺をにらんできた。

立ち上がると優に3メートルを超えるその巨体は全身傷だらけで、元は灰色だった毛も流れる血で赤黒く染まってしまっている。その様子は、もう瀕死と言ってもいいだろう。

しかし逆に、手負いの獣は厄介だ。その怒りの色を宿す血走った目が、普段の数倍増しで凶暴になっていることを雄弁に物語っている。

ワイルド・ベア

暴爪熊から発せられる、叩きつけるような強烈な威圧感プレッシャーに冷や汗を流しながら、俺は右手のナイフを構え直し対峙した。さらに、魔力を瞳に集め、魔眼を発動させておく。

援護が入ることを期待しながら、ちらりと横目でセレスたちの様

子を窺う。しかし、2人とウインディ・ウルフも旋風狼にかかりきりのようで、今すぐこちらに来れるという訳ではなさそうだ。

しかも、ワイルド・ベア暴爪熊は狙いを俺に定めているようで、シリウスやアナには見向きもしようとしなない。どうやら、この中で一番俺が弱いと本能的に感じ取ったらしい。アナよりも弱いと思われる俺って一体……。

野生の本能によって明らかになった思わぬ事実には愕然としながらも、俺はワイルド・ベア暴爪熊とのにらみ合いを続ける。しかし、そのにらみ合いも、唐突に終わりを告げた。

「グオオツッ!!」

ワイルド・ベア痺れを切らした暴爪熊が、咆哮を上げながら、丸太ほどもある太い腕を振るう。鉄板程度なら軽く引き裂けてしまうほど鋭い爪が俺を襲うが、魔眼を発動させた俺には、こんな大ぶりの攻撃などもはや無意味。

俺は低くしゃがんでそれを回避すると、そのまま膝のばねを開放してワイルド・ベア暴爪熊に突進する。擦れ違いざまに右手のナイフで足を切りつけるが、硬い毛と強靱な筋肉が邪魔をして、皮膚を切り裂いただけにとどまった。

すぐさま、二撃目を加えようと再びワイルド・ベア暴爪熊へ向き直るが、突如視界が赤く染まる。それを感じた俺は、すぐさまバックステップで距離を取った。

ブン! と空気を切り裂く重い音をたてながら、振り向きざまに振るわれた太い腕が眼前を通過する。腕が振り切られた瞬間、俺は

魔力を一瞬だけ足に集め、跳躍。

ワイルド・ベア 暴爪熊の顔面までの距離を一気に詰めると、その血走った瞳目掛けて、一文字にナイフを振り抜いた。柔らかい眼球を切り裂く感触が腕に伝わるが、途中で周りの骨に引っ掛かり、結果として右目しか切ることはできなかった。しかし、それでも十分だ。片目を潰すだけでも、生じるアドバンテージは計り知れない。

「グオオア!？」

突然右目を襲った激痛に、ワイルド・ベア 暴爪熊が悲鳴をあげて怯む。俺はその隙を見逃さず、着地するとすぐに、足に向かってナイフで切りかかる。だが、またしても皮膚を切り裂くだけに終わった。

「グアアツ!!!」

ワイルド・ベア ようやく怯みから立ち直ったらしく、目を潰された事で激怒した暴爪熊が、怒りの咆哮を上げる。近くの木がそれだけで揺れるほどの大音量だ。間近で聞いてしまった俺は、一瞬、気が遠くなってしまうた。

「くっ……マズ!」

一瞬だけとはいえ、俺は無防備な姿をさらしてしまう。ワイルド・ベア 暴爪熊はその隙を見逃さずに、大きく腕を振りかぶった。視界に示される赤色の軌道が俺に危機を訴えてくるが、咆哮によって硬直している俺は動くことが出来ない。

マズイ! 避けられない……!

次の瞬間には襲い来るであろう激痛に、俺は目を閉じて歯を食いしる。しかし、ワイルド・ベア 暴爪熊の太い腕が俺を襲おうとした瞬間、それは起こった。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

話の勢いを殺したくないので、後書きはここでおしまいにさせて
いただきます。次話の後書きにすべて乗せてありますので。
それでは……！

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹
謗中傷の類はご遠慮ください）

Episode 15 <神聖歴885年・春の期・14日> 俺
たちの日常・下。

凜とした声が辺りに響いた。

「『弱き者の護り手』 ヤー又よ、彼の者を危機から護りたまえ！

ホーリー・プロテクション
『神聖守護』！」

聞きなれた声で祝詞のりとが紡がれる。その声に俺がハッと目を見開くと、俺を守るように目の前に白銀の盾が出現していた。

しかし、ワイルド・ベア暴爪熊はお構いなしに鋭い爪で盾ごと俺を襲う。その鋭い爪に対して、うっすらと白銀に輝く盾はあまりにも貧弱に見えたのだが

爪がその盾に激突した瞬間、バチンツ！ と白いスパークがワイルド・ベア弾け、暴爪熊が大きく後ろに吹き飛ばされていた。と同時に、白銀の盾も、役目は終わったと言わんばかりに消滅していく。

「わりい！ アンナ、助かった！」

振り向かなくても分かる。これはアンナの神術だ。神を信仰する者だけに与えられる『神力』を、祝詞によって引き出し具現化する言わば『神の奇跡』。本来ならば、もっと長く祝詞を唱える必要があるのだが、これは略式版だ。しかし、略式版でここまでの効果を出せるというのは、流石はアンナと言ったところだろうか。

「うん！ ホーリーくん、今の内に！」
アンナに言われるまでもなく、そのつもりだ。暴爪熊ワイルド・ベアは吹っ飛ばされた後、何かに痺れているかのように立ち上がれないでいる。
神力にあてられ、身体が痺れて動けないのだろう。さっきの盾は、言わば神力の塊みたいなものだ。ワイルド・ベアそれに真っ向からぶち当たったのだから、神力に耐性が低い暴爪熊ワイルド・ベアがそうなるのも無理はない。

恐らく、こうして暴爪熊ワイルド・ベアが動けないでいる時間は、後1分も無いはずだ。俺の手持ちの武器では、その間にどうやってもダメージを与えることはできない。もちろん、さっきのように柔らかい眼球を狙う、という手もあるが、また咆哮で動きを封じられてはかなわな
い。

ならば、残る手段は一つ。幸いにも、暴爪熊ワイルド・ベアの魔力耐性は低い。ならばと、俺は使うことにした。唯一扱うことのできる魔術、『筆記魔術』を。

ごく短い時間で決断した俺は、手に持ったナイフに魔力を集めていく。さらに、集まった魔力を氷の属性へと変換させ、その切先でもって空中に魔導ルン言語を綴り始める。

極寒の山々に住まう氷結の精霊よ

綴る。氷属性に変換された青白い魔力が、ナイフの切先を通して虚空に冷たい文字を紡いでいく。

我を害する者に罰を下す手助けを求めん

綴るは魔を導く言語^{ことば}。俺の手が、流れるように複雑な文字を描き出していく。そこには一切のよどみや間違いは存在しない。当たり前だ。これは、何度も何度も鍛錬を重ねた、俺の研鑽の証なのだから。

磔刑に処されし彼の者を貫く杭

思考が驚くほどクリアに、そして冷却され、鋭くなっていく。感覚はより鋭敏になり、時間は緩やかに遅滞していく。

断罪の槍とも成りしその杭は

無慈悲な一撃によって彼の者の生命^{いのち}をも凍結せん

綴る。綴る。綴る。ナイフを持った右腕は、もはや別の生き物のように躍動していた。いよいよ呪文の魔導^{ルーニング}記述が終盤にさしかかり、腕の動きも加速していく。

貫け、『フローズン・スピア
氷柱凍槍』

キーワード
始動言語を書き終えた瞬間、今まで記してきた魔導^{ルーン}言語が、ひと際青白く輝く。

そして、透き通るような氷柱^{アイスピラー}が一本、俺の前に顕現した。俺の身長よりも遙かに長い、その細く鋭く尖った先端は、暴爪熊^{ワイルド・ベア}に向けられている。これならば、あの剛毛と筋肉さえ、たやすく貫いてしまっただろう。

「行けっ！」

俺の声に応えるかのように、今まで静止したままだった氷柱が、弾かれたようにワイルド・ベア暴爪熊に向かって撃ち出される。

発射音も無く、ただ静かに撃ち出された必殺の弾丸は、寸分の狂いも無く、ワイルド・ベア暴爪熊の脳天を撃ち抜いた。

いや、むしろ吹き飛ばしたと言った方がよかつたのかもしれない。銃弾顔負けの速度で撃ち出された氷柱は、その速度と質量で、ワイルド・ベア暴爪熊の首から上を引きちぎって行ったのである。

ワイルド・ベア暴爪熊は、断末魔の叫びを上げる暇も無く、一瞬で絶命した。

・
・
・

「はっ、はっ、ふうー……」

極度の緊張から解放され、精神が弛緩する。俺は地面に大の字に横たわった。

「あー、死ぬかと思った……」

いや、本当にヤバかった。

そもそも、ワイルド・ベア暴爪熊の危険度はD。即ち、冒険者ランクD以上のランカーが相手をすべき魔物なのだ。Dランカーの冒険者と言えば、冒険者の中では中ぐらい。つまり、中級冒険者に位置する。

間違っても、冒険者見習いにもなっていない子供が相手をしていい魔物ではないのだ。

「嘘をつけ。余裕だったじゃないか。ちよつとアンナに助けてもらつてたけど」

突如頭上から降ってきた声に顔を向けると、そこには、自身の得物である身の丈以上の大剣を傍らに突き立てて、ニヤニヤ笑いながら俺を見降ろしているセレスの姿があった。その隣には、片手剣ショートソードのに着いた血を拭っているシルヴィの姿もある。見た限りでは、2人とも、どこにも怪我を負っていないようだ。

「どうやら、俺が戦っている間に、ウインディ・ウルフ旋風狼を2頭とも倒してしまつたらしい。」

ちなみに、ウインディ・ウルフ旋風狼の危険度はD+。ワイルド・ヘア暴爪熊よりも高かつたりする。さらに、複数頭で出現した場合は危険度が一段階上がり、D++まで上昇するのだ。中級冒険者でも、2人での討伐は難しいのだが……。

「まあ、チートセレスとチートシルヴィだしな。」

「あれのどこが余裕だったんだよ。つーか、見てる余裕があったなら助けるよ!」

「えー、だって見た感じ、俺たちが介入しなくてもいけそうな感じだったもん」

「だったもん」って……。男が言うんじゃないやねえよ、気持ち悪い。

「でもまあ、最後の魔術はさすがだね。スピード・ルーニング魔導速記術もすごかった。それと、あれは中級魔術、『アイシクル・スピア氷柱針槍』の再編魔術かい?」

そう言ってくるのは、もちろんのこと魔道シリウスバカである。

「ああ。よく分かったな。『氷柱凍槍』フロースン・スピアって言うんだよ。本当は、着弾した後凍らせるっていう効果が付与されてただけで、あの威力じゃ意味なかったな」

そう言つて、俺は10メートルほど先に目をやる。そこには、何本かの木を貫いた先に氷の山が出来ている光景が。さっきの一撃が、木を貫いてあそこまで到達していたのだ。明らかにオーバーキルである。

そう、あれは失敗だった。あの一撃で殺しきれないかもしれない、と思ったのだが、思いのほか魔術の威力が強かったのだ。魔力を込める量が多かったか、元々の術式が強力だったか。そのどちらかが原因だと思っただけだな……。

「やっぱり余裕だったじゃねえか」
っていう呟きが聞こえたような気がしたけど、気のせい気のせい。

「みんな、そろそろ帰ろう。時間も丁度いい頃あいだし、何より、血の匂いに釣られて他の魔物が寄ってくる」

そう言ったのはシルヴィ。一応、俺らのリーダー的存在である。

『一応』と付くのは、偶に天然が入るから。それ以外はおおむね頼りになる存在だ。

「そうだね、みんな怪我は無い？ あつたら治してあげる」

アンナがそう言うが、みんな首を横に振る。わお、これだけの魔物を相手にして全員無傷か。流石だね……。いや、その中には俺も入ってるんだけど。

「じゃ、帰りますか」

俺はそう言っただけで立ち上がる。身体はくたくただが、努めて無視。どうせこの後、街の城壁をこっそりと登る、という大仕事待ち構えているのだ。冒険者になれば、というか、大人になればこっそりと街を抜け出さずに済むものにな……。

こんなふうに、俺たちがこっそりと街を抜け出して冒険者の真似ごとをするようになったのは、数か月ほど前に遡る。最初の内は、ごくごく危険度の低い魔物から始まったのだが、今ではこんなことになっているのだ。そのうちAランクの魔物とかと戦いだすんじゃないねえだろうな……。ありえそうだから困る。

親に止められなかったのかと聞かれれば、全く止められなかった。それどころか、いいぞ行ってこい！ とむしろ進められる始末。俺の母さんも、『いいじゃない、行ってきなさいよ』と大歓迎だった。でも、今の戦いっぷりを見たなら、絶対止めると思う。……いや、むしろ褒めるかもしれない。ありえる。特にセレスの親父さん。セーリスさんなら言いかねない。

やっぱり、俺たちの親は、みんなどこかズレてると思うんだ。

そんなこんなで、12歳になった俺の日常は過ぎていくのだった。まる。

読んでいただきありがとうございます。

いかがだったでしょうか。

さて、今回は独自設定と言っか、妄想設定連発回でしたな。筆記魔術やら魔導記述やら、再編魔術やら、訳分からの大放し、みたいな感じ。まあ、その辺りについては、おいおい説明が出てくると思いますが。

しかし、主人公君がようやく魔術を使ってくれました。なんだか感無量です。でも、一つだけ不満がありました。

本当は呪文を綴る所は字体を変えようと思っていたんですが、いざここにコピペすると他の字体と変わらなくなってしまっうんですね。みなさん、何かいい方法は無いでしょうか？（ちなみに、作者はパソコンの超・超初心者なので、あまり難しいことはさっぱりです）

次回更新は、本当に今度こそ未定……のはず。取り敢えず、家族旅行までには1話上げます。

追記：（極めて私的なことですが、）実は合宿（前々話後書き参照）の日程が、2泊3日ではなく3泊4日でした……orz 家族旅行と日数が変わりません……><

この投稿も予約投稿で、これが投稿されているころには、私は勉強でヒイヒイ言っていることでしょう。

なので、感想返事などが遅れることが予想されます。具体的には、28日に帰ってくるので、感想を頂いてもそれ以降に返信することになりそうです。予めご了承ください。

どうも、お久しぶりでございます。
朝顔です。

まずは謝罪を。

今日で、更新が止まってから丁度1ヶ月。この拙作を読んでいた
だいている読者の方々、更新の遅延、申し訳ありませんでした。

次回からは、なるべく間をあげないように致しますが、恐らく、
このような事態が 頻発するとまでは言わないまでも それな
りの頻度で起こることが予想されます。そんな時も、この作品を読
んでいただけたら嬉しいです。

今回は、なんでもない日常編 に、かこつけた説明回です。
しかし、彼らの『日常』は世間一般で言う『日常』とは逸脱しすぎ
ているので、そもそも日常編という言葉すら付けるべきではない可
能性も。

まあ要するに、説明回なので、話の内容はすっからかんですよ、
という訳です。

一ヶ月ぶりの更新なのにこんな状態で情けなくなりませんが、次回
も似たような状況になる可能性が高いので(というか、ほぼ確定事
項です)、またしばらくお付き合いいただければと。

その次からは、少々大きなイベントを用意しておりますので、そ
こまで到達すれば勢いに乗っていけると思います。

それでは、本編をどうぞ。

Episode 16 <神聖歴885年・春の期・16日> 平
穩な日々 鍛冶屋での一幕・上。

「すいませーん！」

店の奥を覗いて声を張り上げる。しかし、店の奥からは物音一つ聞こえない。俺は一向に返らない返事に首をかしげつつ、店内を改めて見渡した。

俺たちの周囲には所狭しと並べられた数々の武具があるが、そのほかには俺たちを覗いて誰一人としていない。一言で言い表せば、閑古鳥が鳴いている、と言うに相応しい状況である。まあ、それだけなら俺たちが客として来ているからいいとしても、この店内には『俺たちを除いて誰一人としていない』のだ。そう、店員さえも。閑古鳥が鳴いていても あるいは、鳴いているからこそ 店員がいないのはおかしい。のだが。

「いつも思うけどよ。不用心だよなあ、この店」

「ああ。私もそう思う。まあ、私たち以外にこの店に来るのはよっぽど酔狂な冒険者ぐらいだろうから、構わないのかもしれない」
そう言ったのはセレスにシルヴィ。ここに居るのは俺を含めてこの3人だけだ。

セレスはともかくとして、シルヴィの言い草はとんでもないが、ある意味正鵠を射ている。

この店の主人は偏屈なドワーフの老人だが、自分が認めた相手以

外には商品は売らないという、どこのテンプレだよと叫びたくなるような商売理念の持ち主なのだ。そのため、この店に来るのはよっぽど酔狂な輩か、俺たちのように認められた者（俺たちは断じて『酔狂な輩』ではない！）だけである。

必然的に客の数は少なくなるし、その上、この店の立地条件街の裏路地の中でもとりわけ人通りの無い、チンピラ共すら集まらないさびれた路地である。からして、この店の存在を知っている冒険者が何人いることが。

そんな訳で、今日もこの店 『カイロネイアの工房』は割と平和なのだった。

「すいませーん！！」

今度はもうちょっと音量アップ。が、反応は無い。仕方なく、もう一度声を上げようとした時、ようやくその人物は現れた。

「おー、お主るか。よう来たの。」

そう言っただけを現したのは、一人の老人だった。だが、その身長がおかしい。俺たちの背丈 大体150センチもない。よりも、さらに低いのだ。しかし、小さな体ではあるががっしりとしていて、その年齢通りの通りの弱弱しさは感じられない。

小さいながらもたくましい体つきと立派な顎髭を蓄えた、これぞドワーフであると言わんばかりの風貌。この老人の名は、オドガルと言った。

オドガルさんはヒョイとカウンターへ飛び乗ると（この老人の身長では、椅子に座ってもまだカウンターの方が高いのだ）、どこから取り出したのかパイプをふかし始めた。

「お久しぶりです。オドガルさん」

「お久しぶりです」

「久しぶり！ オドガルのじいちゃん！

「久しぶりじゃの。大体ひと期ほど御無沙汰じゃったかの。今日も武器の修理かの？」

そう、オドガルさんの言葉通り、俺たちは昨日の『散策』（あくまで、あれは散策であるという建前だ）で消耗した武器の修理のためにこの店にやって来ていたのだ。セレス、俺、シルヴィの3人しかいないのはそのためである（アンナとシリウスは後衛であるため、そもそも武器を持っていない）。

俺たちがあいさつすると、オドガルさんは目を細めて笑う。その様子は好々爺然としているが、その実、上級冒険者を相手取っても一歩も引かないという猛者であるなどと、誰が想像するだろうか。

一度だけ、オドガルさんが戦う姿を見たことがある。その小さな体からは想像もできない膂力で、自身の背丈の2倍はあるうかという巨大な戦斧バトル・アックスを軽々と振り回す姿は、戦の鬼かと思紛うほどだった。

「はい。大分武器も消耗してきましたし」

「そうか。取り敢えず、武器を見せてくれるかの？」

「あ、はい。分かりました」

そう言うと、シルヴィは腰に提げた片手剣ショート・ソードを鞘ごと抜いて、オドガルさんに手渡した。

オドガルさんは剣を鞘から抜いて、その刀身をじっくり眺め始める。シルヴィの武器は、両刃の片手剣ショート・ソード。刀のように、『切断すること』に重きを置いた武器だ。

抜き身の剣は光を跳ね返してキラリと輝くが、素人目の俺から見ても、その輝きが本来のものよりもくすんでいることが分かった。

「ふむ。だいぶ切れ味が鈍ってきておるようじゃの。シルヴィ嬢も

きちんと手入れはしておるようじゃが、それでもダメージの蓄積は抑えられんか。それに、この剣の素材はちと特殊じゃしのお。『増電鉱』は、あまり近接武器の材料に向いておらんから、余計に疲労が蓄積しやすくなるんじやろう」

そこまで言つと、オドガルさんは指で剣の腹を指で弾いた。キーン……と、済んだ音が辺りに響く。

その音を聞いたオドガルさんは満足そうに頷くと、

「 剣そのものは、根元からポツキリ逝くことはなさそうじゃのうむ。これならば、少し手を入れるだけで、元の切れ味を取り戻すじやろう。……そうじゃの、修理には1周期（10日）ほど時間をもらつとしよう。お主ら全員の武器をいっぺんに直すからの、ちょっと多めに時間をもらつぞ」

剣を鞘に仕舞つて、店の奥へと消えていった。

うーん……3人分で10日というのも、日にちがかかりすぎな気がしないでもないが。まあ、その商売理念に多少の問題はあっても、オドガルさんの腕は確かだから、意外と依頼は多いのかもしれない。

「じいちゃん、俺のも頼むぜ」

数分後、ようやく戻ってきたオドガルさんにセレスがそう言いながら、背中に背負っている包帯の巻かれた大剣をズイと差し出した。

片手で。

差し出された大剣はセレスの身長よりも遥かに大きいものだが、セレスはまるで軽い棒でも持つように扱って見せる。俺なんかには絶対に真似出来ない芸当だ。

対するオドガルさんも大したもの、差し出された大剣を、セレスと同じようにヒョイと片手で持ち上げて見せた。オドガルさん程度の身長なら大剣の重量に振り回されてもおかしくないはずだが、

ふらつく様子は微塵も見せない。

オドガルさんが大剣に巻き付けられた包帯を取ると、赤茶けた巨大な剣(おび)が姿を現した。金属は使われておらず、すべて重装猪(チャリオット・ボア)という魔物の素材を使って作られている。

オドガルさんは刃の部分为重点的に眺めたり、あるいは、時折拳でコンコンと剣の腹を叩きながら検分していく。

「ふむ。切れ味はともかくとして、セレス坊の大剣も特に問題はな
いようじゃの。あれだけ言っておいた甲斐あつてか、手入れも欠か
さずされておつたみたいじゃな」

隅から隅まで検分し終わると、オドガルさんそう言つて大剣を振り回し始めた。空を切り裂く鈍い音が、それが決して軽くないことを教えてくれる。流石に片手ではできないのが両手ではあるが、それでも、『軽々と』という修飾語をつけても問題ないほど、その動きは素早い。

数回振り回した所で満足したのか、ふらつくことなくピタリと大剣を静止させると、

「これも少々手を入れるだけで大丈夫じゃろう。しかしまあ、魔物の素材を使った武器は修復に時間がかかるからの。何とか間に合わせてみるが、もしかしたら間に合わんかもしれん。それでもいいかの？」

「ああ。もちろんかまわないぜ。いつもじいちゃんには世話になつてるし、それぐらいどうつてことないさ」

「ふむふむ。それは重畳じゃ。それでは、こいつも預かるとするぞい」

オドガルさんは大剣を肩に担ぎながら、再び店の奥へと消えていった。

さて、お次は俺の番。俺が修理に出すのは、普段使っている『発動体』を兼ねたナイフと、昨日使った投擲用ナイフ数本。他の二人よりも、随分と規模の小さいものだ。

ちなみに、発動体とは、魔術や魔法を使う際に魔力属性の合成などを行うための道具のことだ。魔力属性の合成とは、『基礎四属性』や『三元属性』の魔力を混ぜ合わせる事のできる、『派生属性』の魔力を作り出す作業のことを指す。（詳しい説明は、今は割愛させてもらう）

魔力属性の合成は体内では難しく、さらには何もない空中での合成も難易度が高いため、合成をおこなうための“寄り代”のようなものが必要になってくる。その寄り代を、発動体と呼ぶのだ。

この発動体は、魔力を通すものであれば何でもいいので（それこそ靴かばんのような物でもいい。ただし、それだと非常に指向性をイメージスタッフにくいので、大抵は長杖スタッフや短杖ワンドなどを用いる）、俺はナイフを発動体として使っている。また、俺の得意とする筆記魔術においては、“発動体の形状”というのも大きな意味を持っており、そういう意味でもナイフの形状は特に好都合だったのである。

もちろん、魔力抵抗が少なければ少ないほど発動体として優秀であるから、このナイフも少し特殊な鉱石を使用しているのであるが。

それはさておき
閑話休題。

オドガルさんが戻ってくるまでの間、俺はこれから起こるであろう茶番劇を予想して、少々げんなりとしていた。

「どうせ、またああなるんだろうな……。オドガルさんもいい加減覚えてくれっての」

オドガルさんがいないのをいいことに、一人愚痴る。セレスもシルヴィも、俺の言わんとすることが分かっているのか、2人とも苦笑気味だ。

俺がナイフを修理に出すことに何か問題があるわけではない。問題はそこではないのだ。

問題なのは

と、丁度その時、ようやくオドガルさんが店の奥から現れた。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

このタイトルから分かるように、上下構成になっています。たかが武器紹介に、一体どれだけの文字数をかけるつもりなんだ、と突っ込まれそうですが、それは作者にも分かりません。まさしく神の味噌汁……じゃなかった、神のみぞ知る、というやつです。

多くても4000字から5000字の範囲で収まるはずが、何故か合計で8000文字を超えてしまいました。

さて、次話の後書きもあるので、それではこの辺りで後書きを終えらとしましょう。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹謗中傷の類はご遠慮ください）

Episode 17 <神聖歴885年・春の期・16日> 平
穏な日々 鍛冶屋での一幕・下。

店の奥から出てきたオドガルさんは、俺の姿を見て口を開いた。

「おう、後はホーリー嬢だけか。ナイフの修理だったな」

「だから！ 何回言ったら分かるんですか！？ 俺は男です！」

嬢』じゃないんですよ！！」

そう。問題ちやほんずきというのはこれのことである。

オドガルさんは、俺が何度訂正しても、少年としてではなく少女として扱おうとしてくるのだ。もう顔を合わせるのも20回近くになるはずなのに、一向に間違いが直る気配がない。会うたびに訂正するのだが、その次に会うときにはまた間違える。

確かに、（誠に遺憾ながら！）俺の容姿が非常に女性的であるのは認めよう。その上、俺の声も、少年というにはいささか高すぎる自覚はある（ちなみに、母さんが俺のことをちゃん付けて呼ぶのも、この辺りが理由である）。

実際に、初見で俺が男だと気が付く者はまずいない。しかし、俺が男だと説明した後、二度目に会うときには、普通は男として扱ってくれる。

しかし、オドガルさんは違う。オドガルさんの年齢が何歳かは知らないが、見た限りでは認知症だとか、物忘れが激しいとか、そういった持病があるようには見えない。と言うか、ありえない。にも拘らず、俺の性別を毎回間違えるのだから、からかっているとし

か思えない。

「おお、そうじゃったの。ホーリイ坊、それではナイフを見せてみ
い
」

「……………」
あ、あっさりとスルー。思わず茫然としてしまった。俺の渾身の
突っ込みを、『おお、そうじゃたの』で済ませるとは、素晴らしい
突っ込み殺しである。

「 ああもう…………。はあ、もういいです。…………今回修理してもら
うのは、いつものナイフと、投擲用ナイフが何本かですね。はい、
どうぞ
」

もう諦めよう。

苦節20回。何度も根気強く訂正してきた俺は、とうとう匙を投
げた。相手がスルーするならこちらもスルーしてしまえという、半
ばやけっぱちな対応の仕方であるが、仕方がない。

そんな俺にはお構いなしに、オドガルさんは、俺が手渡したナイ
フ計5本をじっくりと観察していく。ちきしょう、自由な老人だな
あ、おい！

「ふむ。投擲用のはひとまず置いておくとして、問題はこのナイフ
じゃの
」

と、オドガルさんが、これまでの空気をぶち壊すような少々重い
口調でそう言う。ホント、自由だな…………。

それはともかく、オドガルさんが俺に見せたのは、いつも使って
いる発動体を兼ねたナイフだ。

「魔力伝導率を重視した素材で作っておるから、やはりどうしても、
強度の面で他の金属製のナイフには劣ってしまうようじゃの。一応、

手入れは怠っていないようじゃが、使い続けてもう1年以上になるじゃろう？ そろそろ代えどきかもしれないの……」

「う、そうですか……」

ええー……。マジかよ。結構気に入ってたんだけど……。一年近く死線を共にしてきた相棒だということもあるが、何よりその姿形に惹かれて、このナイフを使うことを決めたのだ。

余計な装飾を極力排し、ただひたすら『斬る』ことを追求したそのフォルム。鈍く光を反射する金属質の無骨な姿には、男心をくすぐる何かがあった。

それが無くなってしまうとなると……。残念で仕方がない。買い替える以外に、何か方法はないのか？

すると、俺の心情を見透かしたように、オドガルさんが口を開いた。

「残念じゃが、他に方法は無いな。基本的に、セレス坊の大剣やシルヴィ嬢の片手剣ショートソードとは違って、ナイフというのは消耗品だから。

金属疲労で使えなくなることを前提に作られておる。このナイフを一度溶かして、また新しく作り直すという手もあるが、あまりお勧めはせん。一度溶かして作り直すと、大体元の長さの8割程度にしかならんからの。ただでさえ短いナイフがこれ以上短くなつては困るじゃろ？」

「そう、ですね。……分かりました。新しいナイフを見せてもらえますか？」

本職である鍛冶師のオドガルさんにそこまで断言されては、俺も反論できない。ここはおとなしく、オドガルさんの言う通りに買い替えるべきだろう。もちろん、このナイフは観賞用として取っておくことにするが。

「ふむ。それについてじゃが……。実はの。そろそろこうなるんじ

やなかるうかと思うて、代えのナイフを1つ用意しておいたのじやよ。ふふん！ 気が利くじやる？」

「え、ええ。そう思いますよ……」

確かに気が利くが、だからと言ってドヤ顔で迫ってくるんじゃない！ 変な所で子供っぽいな、この人は。

「それで、その新しいナイフとやらはどこにあるんですか？」

「おう、これじゃこれじゃ」

オドガルさんが差し出したのは、美しい翡翠色の刀身をした片刃の短剣だった。持ち手の部分は木できていて、木目が美しい。金属でできた細いガードが、鐔の部分から手を保護するように持ち手の先まで伸びている。刃渡りは大体20センチほどだろうか。

ナイフと言うには大ぶりで と言うか、そもそもこの世界では両刃の短剣をナイフ、片刃の短剣をダガーと呼ぶので、これはダガーと呼んだ方が適切だろう。

手に取ると、持ち手が吸い付くように手に収まった。それでいて多少余裕もあって、まるで俺専用にあつらえたかのような 『よつな』 じゃない。細部までこだわったオドガルさんなら、間違はなく、長年培った勘で俺の手の大きさを正確に目算し、成長分まで考えてこれを仕上げたのだろう。

手に取って改めて眺めると、何と言うか、芸術作品を觀賞しているような気分させられる。翡翠の刀身は光を反射して淡く光沢を発し、持ち手の先まで伸びているガードは、特に何も装飾らしい物は無いのに、銀細工のように美しい。

今まで使っていたナイフは荒々しい自己主張を含んだ存在感を放っていたが、これは逆に、静かに周囲を圧倒するような、それでいて気品あふれる存在感を放っている。たぶん、普通に貴族の屋敷に

儀礼用の短剣として飾ってあっても、違和感はないだろう。

俺は、このダガーに魅入られてしまい、目が離せなくなってしまう。
った。

「オドガルさん、これは……」

「おうよ。すごいじゃろう？ 刀身は隣国マキベーのクレストン山脈で採れる、翡翠結晶を使ったものじゃ。翡翠ってのは通常は武器には向かない魔導具向きの素材なんじゃが、クレストンの翡翠はどついう訳か、硬度、靱性、弾性、どれをとってもそんじよそこらの金属では敵わないんじやよ。その上、魔力伝導率も並の翡翠よりも高い。正に、ホーリイじよ 坊にうつてつかけの素材って訳なんじやな」

いま『嬢』って言いかけたよな。まあいい。このダガーに免じて許す。

「それに、このガードの部分には魔導銀ミスリルを使っておるし、持ち手ツテには、これまた魔力伝導率のいい環輪樹リングウッドを使っておる。魔力の伝導率は、前のナイフよりもいいはずじゃ。間違いなく、これは今までに打ってきた物の中でも、十指に入る業物じゃ。太鼓判を押せるぞい！」

そう言つて、誇らしげに胸を張るオドガルさん。そこには自身の腕に対する絶対的な自負が見え隠れしていて、いかにもドワーフらしい。ドワーフは自らの技術に関するプライドが非常に高く、それを一たび貶せば、尋常じゃないぐらい激怒すると言つ 様子がうかがえる。

主に幼馴染チートたちのせいで自分に自信が持てない俺にとって、こんな慢心とも取れるぐらいの自負はある意味羨ましい。

「ありがとうございます！　こんな良い武器を造っていただけなんて……」

「何、お主らの武器の面倒を見ることを決めた以上、手は抜かん。常に最高の仕事をする、それが一流の職人つてもんじゃよ。まあ、客と店主の関係上、お代きっちり頂くがの！」

「ははは……はあ」

ガツハツハ！　と笑うオドガルさんに対して、俺たちは自身の財布を見ながらため息一つ。

今の言葉で分かる通り、この人はあまり値引きというものをしない。本人いわく、付けられた値段というのは正当なもので、それを値引きすることは、自身の作品を、ひいては自身の腕さえも貶める行為である云々……。

まあ、理解できない信条ではないから、それを否定しようとは思わないが、俺たちに造ってくれる一流の作品が非常に財布を圧迫しているのは勘弁してほしい。もちろん、そんなことを言えばオドガルさんを激怒させかねないので、内心だけに留めておくのが吉である。

「では、一周期後にまた来るので、その時にお代もまとめてお渡しますね。ありがとうございます」

「じいちゃん、ありがとな！」

「うむ、ではの！」

オドガルさんに見送られながら、店を出る。目的が終わった後もつつい長居してしまい、もう太陽が落ち始める時間になってしまった。

あの後、投擲用ナイフを預けて、新しいダガーの値段を聞いて真っ青になりかけた俺は、取り敢えず一周期後に支払う約束を取り付けた。基本的に、この場合は母さんにお金をもらって払うことにな

るのだが……流石にこの金額は言い出し辛い。

日本円換算でゼロが6個並ぶような金額なので（基本的に、この世界の金銭感覚はどこかおかしい。特に武器系統はとんでもなく高いので、別にオドガルさん製だから特別高いという訳でもない）、お前はどれだけ金のかかる子供なんだという話である。母さんいわく、冒険者はお金の出入りが激しい職業だから問題ないのよ、とのことだったが……。まあ、問題はそこではなくて（そこももちろん問題なのだが）、俺の心情的問題なのだ。母さんに迷惑をかけるまい、と決意したのにこれであるから、メチャクチャ情けなくなる。それでも、結局は頼まないとどうしようもないので、忸怩たる思いを抱きながら母さんに頭を下げるのだが。

ちなみに、事情は幼馴染たちも同じのようで、その辺りは俺のよ
うな人間と同じなんだなあと、妙に安心していたりする。招待され
た豪邸に、自分の家と同じスリッパを見付けたようなものだろうか。

「じゃあ、俺の家はこっちだから。じゃあな！」

「おう、じゃあな」

「ああ、またな」

店を出てしばらく歩くと、街の中央通りに出た。俺はここで2人とお別れである。カイロネイアの工房は下街の路地で、シルヴィとセレスの家は2人とも中街にあるからだ。俺の家は下街中でも下の方にあるから、中央通りを上がる2人とは違い、俺はもう少し通りを下らなければならない。

俺は2人に手を振って別れると、強烈な西日に目を細めながら、一人家路を急ぐのだった。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

ふう……長かった。ようやく武器説明終わりです。次回は筆記魔術やらの説明になるかと。

さて、ようやく主人公が男の娘だということが発覚しました。唐突なように見えますが、本文でも書いてあったように、伏線とも呼べないような手掛かりをちよくちよく入れてあるので、それほどいきなりでもないかな、と思いつつ。読者の皆さまの反応を恐る恐る窺ってみます。

もしこれで、唐突だったならば、もう少し直接的な描写を増やしてみますが、いかがでしょうか。感想、お松しております……じゃないや、お待ちしております。(今はネタでもなく、純粋なタイプミスだったり……)

次回更新は、8月末までに何とかしてみたいと思います。基本的に、8月20日から27日まで後期夏期講習が入っているので、執筆時間はあまりとれません。なので、月末の予定も少々苦しめです。こういう場合は、リハビリも兼ねてもう少し余裕を持たせて更新日を指定するのですが、月末でキリがいいので頑張ってみます。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹謗中傷の類はご遠慮ください)

どうも、お久しぶりです。
朝顔です。

またもや、更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

8月末日に更新するとかほざいていましたが、全く無理でした。
バカじゃねえの、と過去の自分を罵ってやりたいです。

実は、学校が始まってしばらくしたら文化祭があることを失念して
いて、執筆時間があまりとれなかったというのも原因の一つだっ
たりします。……しょーもない言い訳ですね。すいません。

とにかく、ギリ一ヶ月で更新できました。それだけは自分を褒め
たい。

さて、前置きはこのぐらいにしておくとして。

それでは、本編をどうぞ。

Episode 18 <神聖歴885年・春の期・24日> 平
穏な日々 模擬戦と矜持と。

「疾ッ！」

無意識のうちに、僅かに開いた唇の隙間から裂帛の気合が漏れる。俺は低くかがんだ姿勢から、セレスとの距離を一足飛びに縮めると、セレスの懐深くまで入り込む。この間合いでは、体術はかなり制限されることになる。だが、俺のダガーはこのリーチでこそ真価を發揮するのだ。俺は右手のダガーを逆手で持ち、その無防備な首筋へと刃を走らせた。

獲った。俺がそう確信した瞬間、不可避に思われた刃はしかし、無情にも空を切っていた。

「甘えな、ホーリイ」

「がっ！」

次いで、衝撃。

狙い澄ました一撃を放とうとしたが故、がら空きになった鳩尾に、セレスの痛烈な回し蹴りが炸裂する。セレスはあの一瞬で俺のダガーをかわし、さらにその反動を利用して俺に回し蹴りを放ったのだ。

「ごっ、がっ、がふっ！」

蹴られた。そう知覚した瞬間には、もう身体は木の葉のように軽々と吹き飛んでいて、俺は何度も地面をバウンドしながら、成す術もなく吹き飛ばされるしかなかった。

回る、廻る、世界が回転る。何度も天と地が入れ替わり、そして、強い衝撃と共にようやくその回転を止めた。

「ぐうッ……」

あまりの衝撃に、しばらくボーっとしたままの頭を抱えながら壁に手を突き、何とか起き上がる。どうやら、鍛錬場の壁まで吹き飛んで、ようやく停止したらしい。アンナの防護神術によって大きなけがはしていないものの、その衝撃は大きく、しばらくはまともに動くことすらできそうになかった。

「イツテえ……」

頭を振って、霧がかったような思考を強引に覚醒させる。何とか思考はクリアになったが、逆に意識がはっきりしたことで、今まであまり感じなかった痛みが襲ってくる羽目になった。

身体中がズキズキと疼き、熱を帯び始めている。ちらりと腕を見てみれば、青あざだらけだった。この調子では、全身も似たようなことになっているに違いない。骨折などしていなければいいが。

アンナの防護神術によって、俺とセレスが受ける攻撃はすべて衝撃に置き換わっている。ただし、頭、首、心臓付近などの急所のみ、完全防御である。が、打撃によるダメージというのは、意外と斬られたりするのよりもキツかったりする。後からジワリジワリと効いてくるからだ。

「ホーリイ君、大丈夫！？ セレス君もやりすぎだよ！」

立ちあがったものの未だにふらつく俺を見て、慌ててアンナが駆け寄ってくる。壁にもたれかかる俺に、アンナは回復神術をかけてくれた。優しい光に全身が包まれ、傷が癒えていく。数十秒もすれば全身の痛みも引き、模擬戦をやる前と何ら変わらない状態へと元通りになった。

そう、俺とセレスが行っていたのは模擬戦だ。俺たち2人が始める前は、セレスとシルヴィの2人で模擬戦をしていた。

そして、ちなみにだが、ここはエイガー邸。『エイガー』はセレスの家名で、要するに、ここはセレスの家である。鍛錬場がある家というのがセレスの家しかなかったため、基本的に俺たちは大抵ここで模擬戦なり魔術や魔法の鍛錬なりをしている事が多い。(この世界では娯楽が少なく、また、身体を使った遊びをしようにも、主にセレスとかシルヴィとかのせいでもあまりにも不平等な結果になってしまうため、結局はここで時間をつぶすことになってしまっただ)

さて、まあそんなどうでもいい解説は、そこらへポイと捨てておくとして。

これで、模擬戦の戦績は 0勝57敗11引き分けである。また勝てなかった……と言うか、一度も勝ててない。まあ、セレスの方も徒手空拳というハンデがついているとはいえ、魔術を封じられた状態でセレスに勝て、と言う方が無茶な気もするのだが。それに、こいつは体術にも精通しているので、あまりハンデになっていない。ちなみに、基本的にアンナのドクターストップが入った時点で模擬戦は終了し、その時点でよりダメージを負っている方が敗者となる決まりなので、今回も俺の負けである。

「ふっ、まだまだだな、ホーリィ。魔術を使つてならまだしも、純粹な接近戦で俺に勝てると思ってるのか？ 模擬戦の戦績、確か今回の俺が57勝11引き分けだったよな。俺に一度も勝ててない癖に、無茶なんだよな……」

「うっさいわ！」

やれやれ、と勝ち誇った顔で言うセレス。う、ウゼエ……。思わずイラっとくるが、事実なので言い返せない。

うっ、悔しい……。……いつかコロシマス。

「セレス君も、そんなこと言わないの！ さつき避けたのもギリギリだったくせに。これだと、ホーリイ君に負ける日もそう遠くないね」

俺が心の中で悔し涙と共に復讐を誓ったとき、思わぬ援護射撃がアンナだった。いいぞー、もつとやれー。

「う……。ふん！ ホーリイなんか、魔術ありでも余裕だよ！ どうせ、大したことないに決まってる！」

「あん？」

売り言葉に買い言葉。セレスがアンナの言葉に反発するその様子は、あまりにも分かりやすいオトコノコの意地だった。ひそかに思いを寄せているアンナに（俺たちの間では、本人たち2人を除き周知の事実である）そこまで言われては、言い返すしかなかったのだろう。

……だがな、セレスよ。世の中には言っていることと悪いことがある。俺の魔術が『大したことない』だと？ 聞き捨てならないな勢いで言ってしまったのは分かるが、それでも、魔術を馬鹿にされるだけは俺の矜持にかけて許せない。

「ほう、セレス、言うじゃねえか……。誰の魔術が、大したことないだって……？」

「あ、いや、その……」

俺の言葉に、今更ながらに焦ったような表情を浮かべるセレス。だが、前言撤回しようたってそうはいかない。我ながらネチネチとしつこい男だぞ、俺は。

「魔術ありでも大したことないなら、一度戦って、白黒はつきりつけようじゃねえか……！ なあ、セレスさんよあー！」

うん。完全に俺の台詞がチンピラだ。

だがまあ、そんなことは割とどうでもよくて、ここでセレスが意

地を張るか、素直に謝るかのどちらを選ぶかが重要なのだ。素直に謝れば俺だつて許すが、なお意地を張るというのなら、こちらも気兼ねすることなく魔術を使えるというものである。

過去に一度、魔術を使いセレスをフルボッコにしてやった影響だろうか、いつもはこの時点でセレスが素直に折れる。しかし、今日はアンナという枷かせが存在するのだ。ひそかに好意を抱いているアンナの前で、セレスがどう動くかは推して知るべし。うむ。我ながら完璧な策である。

「ぐ、ぐぐぐ……。いいよ、やってやるさ！ 後悔してもしらねえからな！」

作戦成功……！ おっと、思わず笑みがこぼれてしまった。慌ててポーカーフェイスに戻す。

何やら鍛錬場の端の方で、ホーリイって腹黒だったんだな、なんて言うシルヴィの声が聞こえてきた気がするが、きつと気のせいだろう。

「なら、早速始めようか！ ……アンナ、悪いけど、ちょっと下がっててくれるか？」

ここに居てはアンナが危ない。俺は、彼女に下がっていてもらうように頼んだ。

「もう、これ以上戦っちゃダメだつて言ってるのに……。仕方がないなあ……。一回だけだよ？」

アンナは、渋々といった様子で俺の言うことを聞いてくれた。前にもこういうことが何度かあったから、こうなるなってしまうと俺たちは聞く耳を持たないということを学習したらしい。

うーむ、なんだか俺って子供扱いされてる気が……。まあいいか。

「ふー……」

頭を戦闘用に切り替え、大きく深呼吸。さて、ここからは真面目モードだ。

ゆっくりと身体の中から空気を追い出すとともに、丹田に神経を集中し、魔力を練り上げていく。さらに、同時に意識も鋭敏化させ、集中力を極限まで引き上げていく。

これから俺が使う筆記魔術は、速度と繊細さを必要とする。『力ある言語』ルン 魔導言語を綴り魔術と成す筆記魔術は、一文字でも違えれば、最悪魔術の暴走まで引き起こしてしまう難易度の高いもの。それでいて、一瞬で文字を書ききる速さがなければ戦闘では使えない。この綱渡りのような作業を行うには、非常に高い集中力が必要不可欠だ。しかも、そこに魔力の属性変換というさらに繊細な作業が加わるのだから、尋常ならざる集中力が必要なのである。

こういつた理由から、筆記魔術を使用する魔術師というのはごく少数だ。その上、この魔術を使用する魔術師の大半が、研究を主な目的としていたり、あるいは魔彫師だったりするから、本当の意味で戦闘にこの魔術を戦闘に使用する者はほとんどいない。だが、どうやら俺には少ないながらも才能というやつがあったらしく、この魔術を戦闘に耐えうるレベルまで昇華させることができた。もちろん、『アルティメット・ソーサラー魔道を極めし者』を持つシリウスじゃあるまいし、そこには比喩なしに血の滲むような努力があった。

そこまでして俺がこの魔術を会得したのは、ひとえに、セレスたちに追いつきたい、置いて行かれないがため。才能という点で圧倒的なアドバンテージを持つあいつらに少しでも追いつがるため、俺は努力を積み重ねてきた。だから、その努力をよりもよってセレスたちに馬鹿にされるのは絶対に許せないのだ。

そんな俺の思いを、他の3人は何となくだが理解している節があ

る。しかし、セレスの馬鹿野郎は恐らく気づいていない。脳筋のこいつには、他人の機微を察するという高等テクは難しい。俺も、セレスに気づいてほしいなどは微塵も思っちゃいない。ただ単純に、俺の中の思いを汚されたような気がして、許せないだけだ。

「行くぞ………！」

「来いよー！」

こうして、俺たちは本日二度目のぶつかり合いを始めたのだった。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

なんだか最近、戦闘描写ばかり書いているような気がします。
気のせいでしょうか。いや、たぶん気のせいじゃないはず。

序盤、全く戦闘描写の無い回が続いたせいで、鬱憤が溜まっ
ているでしょう……。

さて、かなり後の方にならないと出てこないであろうプチ設定が
本編に登場しましたので、解説コーナーを設けます。

<プチ解説：『魔彫師』とは >

魔彫師の『彫』は彫刻家の『彫』と言うわけで、魔導言語を彫る
職人のことを指します。

本文中でもちらりと触れたように、魔導言語はそれ単体だけでも
力を持つので、例えば、長持ちをするような魔導言語を鍋に刻めば、
そのほかの何もしていない鍋よりも長持ちします。しかも、その刻
む時に、魔力を込めながら刻めば、より一層の効果が望めること
でしょう。もちろん、一つ一つの効果はあまり大きくありませんが、
そのほかの文字と組み合わせたり、同じ文字を幾つも刻んだりす
れば、十分な効果が期待できると言えます。

また、筆記魔術そのものを武器に刻んだりすれば、魔力を流すだ
けで魔術を発動できる魔導具を作り出すことができます。

そんな訳で、冒険者の間では、鍛冶師に次いで重要な職種だと言

われています。

ネーミングを“魔彫師”と“魔刻師”のどちらにするか、相当迷ったのは秘密。

こんなところでしょうか。説明不足と言うより、細かい所まで説明し出すときりがないので、非常に浅い説明に留まりましたが、いかがでしょうか。

ご不明な点や、気になる点がございましたら、お気軽に感想欄まで。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹謗中傷の類はご遠慮ください）

Episode 19 <神聖歴885年・春の期・24日> 平
穏な日々 模擬戦の後は。

「痛ててて……」

「ふん、自業自得だよ。俺の魔術を馬鹿にするからそうなる。口は災いの元ってか」

全身傷だらけで、アンナの治療を受けているセレスに、俺は冷たく笑って言う。

全身傷だらけのセレスに対して、俺はほぼ無傷。せいぜいが、セレスの蹴りがかすったときにできた痣ぐらいのものだ。魔術一つでここまで差が出るのだから、本当に魔法や魔術は侮れないものである。

……もつとも、これほど差が出たのは、ひとえに筆記魔術自体の威力が高いことと、新しいダガーの性能が思ったよりも良かったこと、後はセレスが魔術や魔法を使った戦闘に慣れていないことが原因だろう。特に、一番最後のウェイトが大きい。もし、セレスが魔術を使った戦闘に慣れていれば、ここまで決定的な差は付かなかった。それどころか、勝てたかどうかすらも怪しい。

「はい、セレス君、終わったよ。どこにも変な所は無いと思うけど、あつたら言ってね」

「ああ、大丈夫みたいだ。ありがとな、アンナ」と、そうこうしている内に、セレスの治療は終わったようだ。そこには、もうすっかり傷のいえたセレスの姿があった。ちえ。アンナのやつ、もう治してしまったのか。せつかくめつたに勝てない相手に勝利したのに、その傷を1分ちよつとで治されてしまつと、何かすごく虚しくなる。……よし、こんな気持ちを抱いたままにするのも癪だから、セレスをからかってみることにしよう。

「いやはや、新しいダガーの性能をいまいち把握し切れてなかったから、丁度よかった。セレスが弱くて助かったよ」

「くっそ……。覚えてるよ、ホーリイ！ 次は絶対に勝つてやる！」
はっはっは！ 負け犬の遠吠えが耳に心地よいわ！

そんな風に、ニヤニヤと笑みを浮かべながら俺がセレスを弄っていると、

「はいはい、セレスもホーリイも、馬鹿なことやってないで、今から街へ出る予定だろう？」

シリウスが呆れた表情で　　と言うより、なんだか小学校低学年の担当になった先生のような表情で、そう言った。

う……。確かに馬鹿なことをやっていた自覚はあるが、セレスと一緒にたにされるのは嫌だな。

と言うか、いきなり何なんだシリウスよ。さっきまで空気だったくせに。台詞なんて2、3話ぐらい^{みかのほ}遡らないと、一言もなかったくせに。何だか作者が焦って付け足したみたいになつてるじゃないか。

……^{そなたはひてお}閑話休題。メタな思考は脇の方へ追いやるとしよう。

「じゃあ行くこうか。俺はいつでも行けるぞ。大分腹も減ってきたしな。できるなら、さっさと腹ごしらえをしたい」

そう俺が言うと、なぜかシリウスは妙に呆れ顔になった。

「俺も、準備は特に要らないから、今すぐに行けるぜ」

続いて、セレスも俺と似たようなことを言う。シリウスの呆れ顔がさらに進行した。

何だか、シリウスにそこはかたなく馬鹿にされている気がするが……。まあいい。今言った通り、俺は腹が減っているのだ。今日は昼から街に出て買い物をするから、ついでに買い食いでもして昼食を済ませてしまおう予定である。さっきまで模擬戦をしていただけあって腹ペコだ。

「はあ……。分かった。それじゃあ、シルヴィを呼んでくるよ」

そう言うと、シリウスはシルヴィのいる鍛錬場の端まで歩いて行った。

基本的に、鍛錬場（闘技場とも呼ばれる）は、城や冒険者ギルドが所有するものだ。個人で所有する者は少ない。かなりの広さを必要とするから、個人ではなかなか所有しにくいし、何より維持費が馬鹿にならない（それに、鍛錬場を必要とする職種が限られているというのもあるが）。よしんば個人でもっていたとしても、かなり規模を縮小せざるを得ないか、もしくは貴族が所有しているかのどちらかになる。

だがまあ、このエイガー邸の鍛錬場は少々例外だと言わざるを得ない。ここの鍛錬場は、個人所有の鍛錬場と言いつつも、かなり大きいのだ。それこそ、冒険者ギルドのそれと比較しても、遜色ない程度には。なぜそんな規模の鍛錬場を持っているのかと言えば、セレスの父、セージスさんの今現在の職業と前の職業が関係してくるのだが、ここでは割愛させていただこう。

さて、ここまで散々説明をしてきて、何が言いたいのかと言えば。

遠い。その一言に集約されるだろう。

「ちきしょう、なんでこんなに遠いんだよ」

俺の口から、つい、そんな言葉が漏れるのも仕方がないと思う。

「まあ、遠いと言えば遠いが……。そこまで言うほどか？」

シルヴィが不思議そうに言う。

分かってないなあ、シルヴィは。こっちはさっきまで模擬戦をしていてくれたのだというのに、こんな遠い距離（鍛錬場の端から端まで。出口が一ヶ所しかないのである。この規模を誇っていないがら、なぜ出入り口が一つしかないのか、理解に苦しむ）を歩かなければならない。それを嘆いて もとい、愚痴っているのだ。

鍛錬場端から端まで、大体200メートル近くあるんじゃないかなるか。前世の世界では考えられない規模だが、悲しい事にこっちはこれが普通である。と言うか、これだけの規模のものを街中で所^{ところ}有^{あり}できるエイガー家って、意外とぶるじょわじい。

「で、今日も昼ご飯を喰ったら、いつも通り女子組の荷物持ちですかい？」

そんな長い距離を、足を引きずって（というのは言い過ぎか）歩^{ある}きながら俺が言つと、

「荷物持ちって、嫌な言い方しなくてもいいじゃない。まあ……ホントのことだけど……」

アンナが言う。

一期^{こうき}（30日）に1、2回ほど、こうして気晴らしにシヨッピングに街へ出かける。そりゃあ、来る日も来る日も鍛錬ばっかりという灰色な日々を続けるのも嫌なので、大歓迎と言えばそうなのだが、

ショッピング 買い物を楽しむのは、どこの世でも女性だと相場が決まっているようだ。そして、その場合の男衆の役割と言えば、これまたどこの世界でも同じ、と言う訳である。まあ、要するに荷物持ちなのだ。俺たちの役割は。

流石に、小説やマンガでよくあるような、殺人的な量の荷物を持たせられることはない。が、それでも結構な量の荷物を持つことになる。よくまあこんな量買えるな、と感心したくなるような量だ。一体その代金は、どこから捻出されているのか……。武器の修理やら手入れやら新調やらで、割とお金を使っているはずなのに。

まあ、それはとにかくとして。
そんなこんなで、俺たちは街へ繰り出したのだった。

さて、その最中なかのこと。

買い食いをする際、

「はい、どうぞ、お嬢ちゃん」

「俺は男だ！」

という、もはや定番と化したやりとりがあったり。

シルヴィとアンナに付き合って、服屋に寄った際には、

「あら、そっちの子もかわいいじゃない。こんな服も似合うんじゃないかしら」

と、フリフリのレースが付いた少女趣味ユスロシな服を着せられかけるといふ、男の尊厳が根こそぎ奪われそうになる事があったりと、色々な意味で退屈しない出来事が多々あったのだが、俺の精神的な意味で割愛させていただく。

ちなみに、シリウスとセレスは、そんな俺を見て大爆笑し、シルヴィとアンナはノリノリだった。……おのれ、覚えている……。許すまじ……。！

なんて、そんな風に、みんなに逆襲を誓った俺だったのだが。この後に控える、これからの人生を大きく決定づけることとなるある出来事に気付くことは、当然のことながらまったくなかったのである。

まあ、後から振り返ってみれば、気付いたからといってどうになることではなかったし、そもそもからして気付けと言う方が無茶だろう。それに、あの出来事は、俺たちが冒険者として生きていくことを望んだ以上、必ず一度は通る道。通過儀礼イニシエーションのようなものだったのだから。遅いか早いかの違いでしかなかったのだ。きつと。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

最後に、思わせぶりな台詞と言うか、伏線と言うにはあからさますぎるものが入れ込んでありますが、お気になさらず。

次話からようやく事件性のある話が始まります。ようやくです。
ここまで来るのに、どれだけ時間がかかったか。長かった……。

次回更新は10月10日を予定しています。リハビリ的な感じで、ちよつと、と言うか、かなり遅めですが、ご了承ください。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹
謗中傷の類はご遠慮ください）

えー……たいへん長らくお待たせいたしました。

約束の日から10日と2日ほど遅れているような気がします、
たぶん気のせいです。

……嘘です調子乗りましたごめんなさい。

ぎりで一ヶ月には届かなかったので、そこだけはよかったかな、
と。……なんだか最近、同じようなことばかり言っている気がします。
す。

更新の遅れ、すいませんでした。

それでは本編の方を、どうぞ。

Episode 20 <神聖歴885年・春の期・26日> いざ森へ。

ドマ王国で最も美しい都市は？ と聞かれたならば、大抵のドマ人は白亜ヴァリネラの街だと答えるだろう。山肌に広がる純白の街を、紅い夕陽が染め上げる光景は、筆舌に尽くしがたい美しさを誇る。

古くは建国当初、ドマ王国初代国王にして、今なお偉大なる画家として名高いイアル一世、彼もこの街に魅せられ、何度も足しげく通い、何点かの傑作を残している。

そんな、世界的に見ても屈指の美しさを誇る景勝地として有名なこの街だが、ただ美しいだけではない。

白亜ヴァリネラの街は、おそらくこの世界でもっとも有名であろう山々『竜骨山脈』と、こちらもまた世界でも有数の大森林地帯 『メーウィン大森林』に挟まれるようにして存在している。………より正確に表すなら、白亜ヴァリネラの街は竜骨山脈の端の山、その中腹に広がっており、そしてその山の裾野にメーウィン大森林が広がっていると表現すべきだろうか。

竜骨山脈が、なぜ世界で一番有名な山脈なのか。

それは、竜骨山脈が世界最高峰の山々を擁する山脈であり、その上、今なお人跡未踏の処女峰が数多存在し、他の地域とは一線を画

する危険度の魔物が徘徊する、推定危険度Sランク以上の未踏破区
域^{リア}だから、という理由だけではない。

実は、この山々は、幼生体ですら危険度Sランク以上に分類され
る世界最強の種族、エンシェント・ドラゴン 古代魔竜種^{すみか}の住処としても非常に有名なので
ある。

エンシェント・ドラゴン 古代魔竜種とは、一部地域では神と崇められているほど強大な力
を持つ種族だ。そんなトンデモ生物の住処なのだから、有名になる
のも至極当然の成り行きと言える。

ちなみに。そんな、超を10個ほど付けてもまだ足りな
いような危険生物の住処だというのに、街がなぜ無事なのか。それ
は、エンシェント・ドラゴン 古代魔竜種が穏やかな気性の持ち主であり、かつ、人間を遙か
に凌駕する知性を併せ持ったためだ。……オブラートで包まずに言え
ば、完全に種族としての格が違うので、俺たちは脅威として認めら
れていない、というのが理由である。まあ、圧倒的強者にはひれ伏
すしかない、ということだ。

さて、一方のメーウィン大森林と言えば、こちらも竜骨山脈と
同様に、世界屈指の魔物の生息地として有名である。また、大森林
の名に違わず、ドマ王国の4分の1を占める広大な面積も、この大
森林が有名になる一端を担っていると見えるだろう。

しかも、この森の外縁部では魔物の危険度は低いのだが、騙され
てはいけない。森の奥に進むにつれ魔物の危険度は上がり、最奥部
ともなると、危険度Aランク以上の魔物が大量に生息するという、
超危険地帯なのである。まあ、最奥部の魔物はめったに森の外側ま
で出てこないのが、街は一応安全であるのだが。

このように世界有数の魔物の生息地に囲まれているとはいえ、一応安全の確保された街である白亜ヴァリネラの街だが、それでも、魔物たちが絶対に街に襲ってこないという保証はどこにもない。普通の市民であれば、こんな所に住もうなんて誰も思わないであろう。そう、普通ならば。しかし困ったことに、この世界には『普通』じゃない人種がいる。『冒険者』と呼ばれる者たちだ。

魔物たちと闘ったり、あるいは、危険地帯で貴重な資源を探し求めることを生業とする彼ら。そんな彼らの目からすれば、この白亜ヴァリネラの街はとんでもなく魅力的な都市として映る。多くの冒険者がこの街に集うようになるのも、必然と言えた。

かくして、冒険者の集う街は成長を遂げ、今に至るのである。

当然、これほどの魔物の生息地に隣接しているのだから、この街の防衛基盤は非常に盤石だ。街をぐるりと囲い込む堅固な城壁に、他の街では到底お目にかかれないような大型の迎撃装置。そして何より、街に集う数多の冒険者たち。一つの街が保有する戦力としては破格と言える。おそらく、軍一個師団分を用いても、この街を陥落させるのは困難だろう。

そして、外に対しても城壁が有効なら、中に対しても同じことが言えるわけで。つまり、街の四方に造られた巨大な門を除いて、内外を繋ぐ通路がないこの街において、門を通らない非正規の手段で街の外に出るには、相当の苦勞が必要なのである。

まあ、要するに、城壁登るのめんどくせー、ということだ。

・
・
・
・
・

「あー、めんどくせー……」

ヴァリネラ

現在俺がいるのは、白亜の街の南南東、人通りの全くない『城壁小道』の、15メートルほど上空である。正確には、街を囲む城壁の内側、その高さ15メートルほどの所にできた通さな足場にへばり付くように立っている、と言った方が正しいか。

そして、俺の上にはシリウスが、俺の下には、順にアンナ、シルヴィ、セレスが俺と同じように城壁にへばり付いている。

どうして俺たちがこんなヤモリの真似ごとみたいなことをしているのか。それは、城壁を越えて、こっそりと外に出るためである。ならばなぜ、こっそりと城壁を越えようとしているのか。当然『散策』つまり、『メーウィン大森林で魔物の討伐をして、俺たちの実力アップだけ』作戦』のためだ。

正直、この前　俺が暴爪熊ワイルド・ベアを一人で相手取った時　みたく命の危険を感じることが少くないので、俺としては別にやらなくてもいいんじゃない？　と思わないでもないのだが……。

生粋の戦闘狂であるお二方（あえて名前は出さない。まあ、言わ

バトルジャンキー

なくても分かるだろう)に加え、魔道馬鹿シリウスまでもがこの『散策』に賛成したため、俺とアンナの大反対も虚しく、多数決で今回も決行である。

……まあ、そんな裏話は置いておくとして。

じゃあ具体的に、このあまりにも高すぎる城壁をどうやって越えるのか。

鉤爪ロープを上に向けてひっかけ、それを使ってよじ登る？ あ
るいは、城壁の下の地面を掘り下げて穴を開通させる？ ……残念
ながら、そのどちらでもない。前者は城壁が高すぎるのでロープの
長さが到底足りないし(そもそも上まで投げることができない)、
後者は地中深くまで城壁が食い込んでるので不可能である。

ならどうするか。答えは簡単。この世界に存在する便利ツール
魔道を用いればいいのだ。

そんな訳で、俺は腰からダガーを引き抜き、魔力を流す。やがて
ダガーはうつつすらと燐光を発し、筆記魔術を使う準備が整った。

『文字リッを筆記すること』で魔術を発動させる筆記魔術において、
魔力はインクであり、発動体はペンだ。魔力をインクとして使うこ
の筆記用具にかかれれば、書き込む対象の有無や材質の違いなど、さ
したる問題ではない。

俺は、城壁に直接魔道言語リッを書き込んでいく。

大地の精霊よ

その身に宿りしは硬き岩をもたやすく操る力なり

我が魔力を対価とし

その力を振るい、我が身の助けと成せ

『クラック・ロック
隆起する岩肌』

城壁の硬い壁に文字列を綴り終わると、唐突に、魔道言語ルインが淡い光を発する。

そして次の瞬間。

何か硬い物で岩を削るような音と共に、大人ひとりがよく立てるほどの広さの足場が、俺たちの頭上の城壁から次々とせり出してきていた。その数、およそ20ほど。この魔術の最大射程である15メートル。そのギリギリまで、足場が乱立していた。

これこそが、この魔術の効果。自力で登るのが困難な場所に足場を作ることによって、術者の手助けをする。主に山間部の探索でよく使われる魔術だが、少しその術式を弄ってやることで、こんなふうに城壁を登る手段に早変わりするのだ。

「よっ、はっ、ほっ」

城壁にできた足場を使い、上へ上へと登っていく。それぞれの足場は高さ1メートル強ほど離れているが、みんな軽々登っていく。もちろん俺もである。

しかし、俺たち5人の中で一番体力のないアンナやシリウスですら軽々とジャンプしていく姿を見ると、この世界こゝがいかに非常識な世界がよく分かるというものだ。俺たちはまだ12歳だというのに、平然とこのレベルの運動をこなしてみせる。これが地球だと、高校生でも俺たちと同じ動きができるか怪しいものである。

そうやって、俺が作った足場の最上段までシリウスが登り切ると、今度はシリウスが俺が使った魔術と同じ効果の魔法（基本的に、魔術、魔法、魔導の違いは発動方法だけであるため、全く同じ効果を持つものが存在する）を発動させる。

そして、また登り切ると今度は俺が魔術を発動。その次はシリウス、そのさらに次は俺、と順繰りに足場を作り出していき、登り始めてから20分後、ようやく城壁の最上部までたどり着いた。

城壁の最上部はすべて通路で繋がっており、人が数人並べるぐらいの幅が確保されているため、俺たちはここで一休みすることにした。

日の出の少し前に出発したため、今は丁度太陽が地平線から顔を出した所だ。ここは標高が高いから、朝焼けがきれいに見える。それに、まだ冬の残り香を感じさせる風が、頬を撫でていく。なんとまあ風情のあることか。ここまで頑張った甲斐があるというものだ。うん。

「景色を楽しむために登って来たんじゃないんだよ、ホーリィ……。ほら、魔力回復薬。不味くても、ちゃんと飲むんだぞ」

と、唐突に呆れ顔で横やりを入れてくるシリウス。何だよ、風流心を解さない奴だな……。それに、お前は俺の母親か。言われなくても飲むわ。

シリウスに言われたからではないが、ガラス瓶に入った緑色の魔力回復薬を煽る。が、どうにもしまらない。これがコーヒーか何かだったりしたらまだ格好がよかったのだが、緑色の毒々しい液体（し

かも、お世辞にも美味しいと呼べる代物ではない）では、とても残念な感じになってしまっている。

それでも、何とか魔力回復薬をすべて飲み干すと、さっきの魔術で消費した魔力が回復したのが分かった。もちろん、ゲームよろしく数字できちんと表示されるわけでもないのです、あくまで大雑把にはあるが。

「よし。じゃあ、そろそろ行けるか？」

みんなに声をかける。セレスやシルヴィはともかく、アンナもそれほど体力を消耗した様子もないので、たぶん休憩を長くとらなくても構わないだろうが、一応念のため。

「私は大丈夫だよ」

と、アンナ。

「ああ。俺もシルヴィもまだ余裕だ。シリウスは？」

セレスはそう言い、シルヴィも頷いてみせる。

「僕はもう行けるよ。魔力回復薬は飲んだしね。それに、そこまで疲れているわけじゃないし」

シリウスも大丈夫そうだ。

セレスに至ってはまだ元気があり余っているみたいだし、シルヴィも涼しい顔をしている。唯一の懸念材料はアンナだが、特に問題はなさそうだな。

「じゃ、行くか」

そう言うと、俺はズボンのポケットから、親指大の茶色い石を取り出す。これが城壁を下りるときに使う道具だ。下りるだけなら、この城壁から飛び降りるだけでいい。もちろん、この高さから飛び降りれば、潰れたカエルよりも悲惨なことになるのは目に見えているので、そのためのこの石である。

みんなも自分と同じ石を持っているのを確認すると、俺は城壁の際に足をかけ、躊躇なく空中に身を躍らせた。

「っ！」

ゴウゴウと耳元で風が唸り、凄まじい速度で景色が変わっていく。内臓が浮き上がるような浮遊感を覚えるが、はや今回で6回目ともなると、いい加減慣れてしまった。

景色を楽しみつつ、時々上を向いてみんながどこにいるかを把握しておく。着地した時に、俺の真上に誰かいたらマジで洒落にならないからな。

そうして、かれこれ10秒ちょっと落ち続けてただろうか。だいぶ地面に近づいてきたのを確認した俺は、手に持ったあの石を地面に向かって投げつけた。

俺の投げつけた石が地面に衝突し、砕け散ると、そこを中心に黒い半球状の膜が出現する。直後、俺は慌てることなく、その膜に突っ込んだ。

膜の内部に飛び込んだ瞬間、今の今まで感じていた浮遊感や、加速している感覚が一瞬ですべて消失する。まるで、無重力状態にもなったかのように、身体が軽い。……いや、この瞬間に限って言えば、無重力と言うのもあながち間違いではないのだが。

そして、俺はそのまま地面に落下を続け

「よし」

小さな段差から飛び降りる時のように、俺は無事に着地を果たした。役目を終えたと言わんばかりに、パチン、と音を立てて膜が割れる。ようやく外の景色が見えるようになった。

「よっ」

「ほっ」

「っ」と

「おっ」と

俺が着地した直後、周囲に次々と暗色の膜が展開され、ほぼ同時にシルヴィたちが突っ込んでくる。パチパチパチンツ、と音を立てて次々に膜が割れると、何事もなかったかのように立ち上がるみんなの姿があった。

中級魔道、『コン・インパクト衝撃吸収』。

魔法陣を起点とする半球状の膜を張り、その膜に触れた者にかかる力をゼロにする。そんな効果を持った魔道だ。主に、今みたいに高所からの飛び降りに使われる。

俺たちは、この魔道を先ほどの石に込め、割れると同時に発動するようにしていた。石が茶色かったのは、発動に必要な土属性の魔力を大量に込めたからだ。土属性に限らず、魔力を多く含む鉱石は、その魔力の属性によって色が変化する。

「みんな無事だな？」

そう尋ねるシルヴィに、俺たちは無言で首を振った。

そんな俺たちを見て、シルヴィは満足そうにうなずくと、

「よし。じゃあ、出発だ」

高らかに出発を宣言した。……すっごく楽しそうな表情で。

流石、バトルジャンキー戦闘狂は考えることが違う。俺なんか、今自分の顔を鏡で見たら、とても嫌そうな顔をしていると断言できる。

何が嬉しくて命のやりとりをしなければならぬのか。冒険者になるための訓練だ、とシルヴィは言うが、本職の冒険者でも

これほどの無茶はやらかさないだろう。まあ、それでも俺がシルヴ
イたちについて行くのは、もしかしたら俺にも戦闘狂バトルジャンキーの気があるか
らかもしれない。

ともあれ、こうして俺たち一行は、メーウィン大森林へと足を踏
み入れたのだった。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

ようやく主人公の住んでいる街の設定が出ましたね。こまごました設定が多いので、正直あと2000文字くらいは優に書けたと思いますが、自重しました。

また、魔法、魔術、魔導の違いもちよろつとだけ出ましたね。あれやこれやと詰め込み過ぎて、説明過多になる部分は削除したりして、こちらでもかなりスリムな説明のみになりました。

設定を書いていくのは楽しいのですが、いざ読む側になると全くつまらないというのが悩みどころです。読む側が楽しめるような登場人物の掛け合いも苦手なので、いやはや、どうしましょうか……。

今回は、いよいよ主人公たちが事件に巻き込まれる！……かと思いきや。それは後1、2話先の話になりそうです。

事件に巻き込まれる前に、ちよつと下ごしらえ的なことをしようかと。

具体的には、この作品初めての三人称視点で、こんな敵が出てきますよー、みたいなことをやりたいと思います。ここ最近一人称ばかり書いているので、三人称が上手く書けるか心配なんです。恐らく、それほど長い話にはならない予定なので、ぱぱつと書いてしまいたいと思います。……最近の更新状況を鑑みると、それも確約できるものではなさそうですけれど。

次回更新は11月の3日をめどにしたいと考えています。(ただし、表現が断言を避けるようになってきましたね……。我ながら

姑息です……。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！（誹
謗中傷の類はご遠慮ください）

Episode 1 <神聖歴885年・春の期・25日> 危機の足音。(前)

初三人称視点です。

Episode 21 <神聖歴885年・春の期・25日> 危機の足音。

ホー、ホーと、どこかで梟の鳴く声がする。リリリ……と、虫々の奏でるか細かい音が耳に届く。

辺りは静寂に包まれ、天空から月が木々の天蓋を縫うようにして光を投げかける。どこか青白いその光に照らされたこの空間は、魔物の巢窟だと言うのに、なぜか神聖なものに見えた。

まるで、人が足を踏み入れてはならない、禁断の聖地であると言わんばかりに。

しかし、一見すると静謐せいひつなこの空気も、まるで器からあふれ出る寸前の水のように。奇妙な緊張感とでも言うべき雰囲気ふんぎに包まれている。梟と虫の小さな声がこの場を支配するのみで、息をひそめて抗いようもない天災に怯えるように、森中がひっそりとしている。

まるで、ほんの少しでも刺激が加われれば、何かとんでもない事が起こってしまうとでも言うような

そこまで考えて、男は頭を振ってその思考を打ち消した。

(何も起こるはずがない。この辺り一帯には、俺たちの脅威になるような魔物はいなかったはずだ……)

しかし、何度頭で言い聞かせても身体は自然と委縮し、歩調は慎

重になる。微かな音も咎めるように、自分が着ている革鎧レザー・アーマーのこすれ合う音にさえ、忌避感を覚えた。

そつと仲間の様子を窺えば、やはり自分と似たような様子だった。

自分たちの中では火力に最も優れ、その一撃でもって脅威を取り除く、攻勢魔法師ソーサラーのレナ。

このパーティーの唯一の癒し手ヒーラーであり、パーティーの要かなめ、司祭のミリ。

重厚な鎧と盾を身に纏い、魔物の攻撃から味方を守る、守護騎士ガーディアンのエド。

畏リミットの解除から、果ては魔銃を用いての狙撃まで、何でもこなす義賊イグのカリオン。

そして自分　味方の援助に徹しつつ、時には攻撃にも打って出る、補助魔法師エンハンサーのクルガ。

皆、何かに委縮しているかのように身体が強張っている。勝気な性格のレナも、普段から冷静沈着なミリも、自分たちの中で一番に肝の据わっているエドでさえ、得体の知れない何かに怯えるように、その表情を歪ませていた。前を先行するカリオンも、表情こそ見えないが、似たような様子であることが雰囲気から知れる。

さあ、どうしたものか。

このパーティーのリーダーでもあるクルガは、決断　依頼をリタイアするか否か　を迫られていた。

駆け出し冒険者のころに出会って、<見え隠れする陽光>と言う名ハーフ・サンシャインのパーティーを結成して以来、誰一人として欠員の出ることがなかったクルガたち。結成当初こそ力量も装備も貧弱であった彼らだ

が、今では立派に成長し、中堅Cランクの冒険者の中でもそれなりに名の知れたパーティーになっていた。

上級冒険者の中でも屈指のパーティー、デンベスト・オフ・デイライト < 荒れ狂う歓喜の嵐 > や ツイン・セイジ < 双極の賢人 > などには及ぶべくもないが、それでも将来有望株の内の一つには数えられている。

今回、そんなクルガたちが受けた依頼は、サイレント・バード 暗眠鳥と呼ばれる魔物の羽根20本の納品、と言うもの。

サイレント・バード 暗眠鳥とは、メーウィン大森林にのみ生息する固有種で、昼間は地面に掘った巢の奥深くに潜み、夜に活動する、と言う生態の魔物だ。この魔物の羽根は非常に柔らかく、最高級毛布の素材として珍重されている。そのため、よくこういった納品依頼が発注されるのだ。

しかし、この魔物はその生態上、夜にしか遭遇できない。この魔物の危険度自体はEと低いのだが、どんな場所に限らず、夜と言うのは危険な時間帯だ。この魔物が生息する大森林中間部は、昼の危険度はDランクだが、夜になると危険度はCまで上昇する。

そのため、この依頼は危険度C+に認定されている。このレベルになると、並大抵の冒険者では達成不可能だ。同ランクのC+に認定されているクルガたちのパーティーで、初めて依頼の受注許可が下りる。

ただ、ギルド側は自身のランクより1ランク下の依頼を受けることを推奨しているから、それを考慮すると、クルガたちは少々背伸びをしていると言えるだろう。しかし、時には危険を冒さなければならぬ場合もあるのが、冒険者と言う職業だ。安全な依頼ばかり受けていては力量も上がらないのである。それに、クルガたちのランクを考えれば、決して達成不可能な依頼ではない。

そんな理由からこの依頼を受けたクルガたちだったが、ここに来て、そのことを後悔し始めていた。それなりの経験を積み、鍛えられた冒険者の勘とでも言うべきものが、この異様な雰囲気^{ハヤシ}に警鐘を鳴らしているからである。

ヤバイ。生存本能がそう告げていた。

（依頼をリタイアした方がいいかもしれない）

リタイアの方に思考が傾き始めたクルガの頭の中で、目まぐるしく損得勘定が駆け抜ける。リタイアした時の損害　信用の損失やギルドからのペナルティ、もし何もなかった時の悪評判など　と、今感じている危機感が秤^{はかり}にかけられ、やがてそれは危機感の方へと傾いた。

冒険者は命が資本。あの時リタイアしなければよかったという後悔も、生きて帰らなければできないのだ。このパーティーのリーダーとして、クルガはこの依頼のリタイアに踏み切るつもりだった。

……そう。『だった』のだ。

なあ、みんな。この依頼をリタイアして、もう帰ろう。ここ
の空気は本当にヤバイ。

そう言いかけたクルガだったが、結局その提案を声に出すことは叶わなかった。意を決して口を開こうとした瞬間、みんなの前を先行していたカリオンが唐突に右手を上げたのだ。そしてそのまま、彼は手で仲間に合図を送る。

<この奥だ。この奥に暗眠鳥^{サイレント・バード}がいる>

彼の手の動きは、クルガたちにそう伝えていた。

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

予想以上に筆が進んだので、かなり早めに投稿できました。ヨクタネ！

しかし、1話で収まりがつくはずだったのですが……。やむなく敵さんのご登場は次話に持ち越しですね。

まあ、守護騎士ガーディアンとか司祭とか、RPGっぽい所をハイ・フリースト(微妙にですが)出せたりしたので、割と満足しています。

ちなみに、クルガたちのパーティー名には、しょうもない秘密があったり。気が付いたあなたは中々鋭いかも！？

次話の更新予定日は、前回のまま、11月3日をめどにしています。

評価、感想、指摘、批判等々なんでもお待ちしております！(誹謗中傷の類はご遠慮ください)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2668t/>

気が付いたら異世界でした。

2011年10月30日19時17分発行